



対話と書き物を通して表れた私の日本語と漢人意識

My Japanese Language and Han Identity  
in Dialogues and Writings

指導教師：古川ちかし

東海大学日本語文学系硕士班

陳思懿

中華民國九十九年七月

July, 2010

碩士論文題目：

日文：『対話と書き物を通して表れた私の日本語と漢人意識』

中文：『對話與書寫之我的日本語與漢人意識』

英文：『 My Japanese language and Han Identity in Dialogues and Writings 』

研究生：陳思懿

指導教授：江崎了也 (簽章)

審查教授：林珠雪 (簽章)

成如鼎 (簽章)

東海大學日本語文學系碩士班碩士論文

99年6月24日

# 対話と書き物を通して表れた

## 私の日本語と漢人意識

### 要 旨

この物語はある台湾の「日本語学習者／漢人」が述べていた、彼女自身に関するお話である。

最初から今まで、日本語を学習することは彼女がもう 14 年に続けていた。しかし、やがて最後には彼女は「日本語の達人／台湾人」になってなかった。社会の資源と親の心血を無駄になさせたなんて恥かしいと思うはずなのに、日本語学系を卒業した学生として、将来の就職のために自分の日本語能力を早く上達になさせないまま、日本語能力が下手なんて別に悪くないことだと正々堂々と言えてしまった。

この前の数十年間に、彼女はずっと「日本語」のことを追い掛けていた。数十年後の今、あるきっかけで四年前から彼女が振り返って台湾原住民族のことを注目し始めた。追い掛け／振り返りの間には、彼女が迷った、その間に自分の立場の微妙さに困られた、また「学術」「研究」の輪光／束縛を加えて、いつでも改変している自分の身分と立場の間にもより一層迷ってしまった。

困るうちに、「自分を語る＝自分のライフストーリーを述べる」という方法と出会って、この方法で社会と主流と体制へ自分の声を発してみても、こだまが返ってくると期待しながらこのプロセスで彼女の疑問を解けられると望んでいた。同時に彼女もある程度の自分の考え方を実践していて、まるで実験するように自らで「論文がストーリーでできるか」という疑問の答えを勝負のつくまで探求した。たとえこのような実験の結果をもらった人が少ないといえないとしても、彼女に属する実験とは、まだまだ始まったばかりである。

最初彼女は自分ができる日本語を使って発声するつもりでいるが、途中でやっぱり自分が中文の考え方から離れないと気付いてから、代わりに中文で書いた下書きを日本語に「翻訳」をしたというやり方で表した。しかし、そのうちにまた自分の中にも日本語の考え方があると気付いた。彼女にとって、その二つの言語は別々の方向と考え方なので、同時に二つ言語で書いたバージョンを一緒に集める目的は彼女の言語能力を示すためでは

なくて、代わりに彼女に属する二つ言語で語った二つの彼女のライフストーリーを読む方向と角度を示したいだけである。

物語のもう一つの中心なのは、彼女の「漢人意識」ということである。「漢人意識」とは何かも彼女が確実に描写できないものだったのである。彼女に対して台湾原住民族に向き合うときに、彼女の「漢人」の部分がいつも提起されて、そして「漢人意識」も影のようにずっと彼女に附いている。しかし、この物語の中に彼女の「漢人意識」を具体的に表示するのは本当に難しい。台湾原住民族の存在で彼女の「漢人意識」を映されてきて、そして彼女が「漢人」に対する認識も転回されていた。

「自分のライフストーリーを述べる」とは、自分をみてから自分を再現することを通して、他人と各自の生命経験について交流する目的に達するという意味をする。この物語の中に、「ストーリー」とはドアを閉じて自分を対象として将来の鑑賞、読みと吊いのために記録されたプライベートな日記ではなくて、未知の大衆を対象として公開しようと思っから発した「声」だったのである（他人と交流する前提で「日記を交換する」という例もあるが、対象の範囲はやっぱり特定のなものだから、意味はかなり違う）。

物語の前期には彼女はまるで溺れている人のように、狂乱の思想の波に浮いたり沈んだりして、ずっと救命バイを探していた。無理だと思って波に呑み込まれる直前に、いくつかの救命バイが波に乗って近づいてきた。その原因で物語の後期には、もし自分のストーリーを語ることでほかの溺れている人たちが呑み込まれないように助けてあげれば、もし自分の経験が思想の波に乗ってきた救命バイとして溺れている人たちを救えば、それでいいと彼女がそう思うようになっていた。

キーワード：ライフストーリー、自己物語（セルフ・ナラティブ）、日本語学習者、漢人、アイデンティティー、漢人意識、自己意識、自己実践

# 目次

● 「テーマ」について.....	1
● 記憶——過去と現在を結びつける.....	2
● 言い始める.....	5
● なぜ言う？.....	9
一、迷って転向して…そして、目的地に着いたか？.....	11
二、なぜ日本語？.....	14
三、「論文」なんて性格を持っている——主流に対抗するやり方として.....	22
四、理論のキャラクター——その出演の場所はどこですか？.....	24
● 何を書く、何を書かない.....	26
● 「論文の書き方・研究方法」のクラスがない——先行研究から学ぶ.....	28
● 自分のライフ・ストーリーを語る：私の研究方法.....	31
● 「変わっている」ところに辿り着いた：大学院で過ごした日々.....	33
一、外から内に入った.....	33
二、変わっている「日本語文学系修士課程」.....	36
(一) 日本語文学系修士課程ではない——多元文化交流大学院.....	36
(二) 私と「先生」の距離.....	39
(三) 私の海外交流小史：大韓民国・日本・フィリピン.....	41
1、大韓民国での経験.....	41
2、日本・沖縄での経験.....	42
3、フィリピンでの経験.....	45
(四) 原住民部落での交流小史：スヌイ・ナカハラ.....	47
1、スヌイでの経験.....	47
2、ナカハラでの経験.....	47
(五) 小まとめ.....	48
● なぜ「原住民」か.....	49
● 「山」のプロジェクトを通して始まる.....	55
一、「平地人」だと言われた——では、私は誰だ？.....	55
二、私が習っていた価値観——「原住民」のことを考える用.....	58
(一) 教科書：政府によって作られた価値観.....	58
(二) マスメディア：社会価値観の映り.....	60
三、院生という身分.....	62
(一) 「研究」か、それとも関係付けと維持か？.....	63
(二) 学術か、それとも利用か.....	64

## 目 次

● 彼女のストーリー——私たちの対話	
:初めて他人のストーリーを書くなんて、とても不安.....	66
● そして.....	73
● 「そして」の後に.....	75
引用文献.....	76
参考文献.....	77
添付資料.....	80
あとがき	

● 「テーマ」について<sup>1</sup>

同じテーマでもう一度書いたら、きっと今書いたものと全然違うものになる。というより、「テーマ」というのは本文を書くときに中心になることでもないし、もっとはっきり言うと、最初からテーマというものは「書くこと<sup>2</sup>」に対して「制限」になると思う。しかし、おかしいのは本文を構想し始めるときにいくつかのテーマを仮設して、それらのテーマに関する文献を集めたが、この“バージョン”を書くときに集めた文献はほとんど使わなかった。使わない文献を私にとって役に立たないとは断定できない、逆にそれらの文献のおかげで、まだ見つけてきつとどこかにあるほかの文献を探すべきことはされにはっきりと分かった。そのため、テーマをまた何回でも変えた。

この“バージョン”のテーマは前述のように書いてあるが、実際に本文を半分ぐらい書いたときに、「あっ、そうだ。『これ(“対話と書き物を通して表れた私の日本語と漢人意識”を指す)』はいいかも」というように突然に浮かんできたものだったのである。まるで全身の筋が通じたように、頭の中に長い間浮き沈んで、行ったり来たりぶつくて、はっきりしていない「アイデア／概念／感銘」を、自分にとって「具体的に表れる文字」が見つかった。

「日本語」と「漢人意識」とはお互いに対応／比較の意味(例えば、「日本語」対「漢人意識」)ではない、それと同時に同一の対象の対応／比較の意味(例えば、「日本語」と「漢人意識」対「○×△」)ではない、別々に対応／比較の対象が別々にある意味である。

ここまでには、読者に聞きたいことがある。最初にテーマを見たときとここまで読んできたとき、貴方は別々に何を思い付いたか。

---

<sup>1</sup> 本文では違う字体で文章を書く時間性を区分／標示する。MS Mincho の字体 (例えば、今使っている字体) で一回目に書いたものとして現して、MS UI Gothic の字体 (例えば、**こういう字体は MS UI Gothic の字体**) で一回目に書いたものを再読してから二回目に書いた新しいものとして現す。目次、要旨、脚注、参考文献などには区分しない。また、実際の状況によって、一回目と二回目の間の時間を具体的に説明できない。

<sup>2</sup> ここでは先に「書くこと」について定義をしなければ、「制限」について続けて論じれない。「書くこと」の定義について本文の P8~9 を参照。

## ● 記憶——過去と現在を結びつける

子供の頃買ったレターペーパーと封筒を集める専用のアルバム、その表紙にこういう話書かれていた、「記憶は川のように……」。一度もその話について疑うことがなくて、記憶が川のように流れていて、流れれば流れるほど遠くなっていくと思った……。去年本文のために実家に帰った頃、デスクに座って上の棚に置いたそのアルバムを偶然に見てから、またその話の意味を味わった。記憶は流れれば流れるほど前に去ってしまう川のようなものではない、記憶は遠くなるが、行ってしまっても戻らないものではない。本文を書くうちに、記憶のことは川のように流れていくことではなくて、散らかるパズルのほうに似ていると思った。頭の中に永遠に存在しているが、時には一つ一つのパズルを探せてあることの輪郭をだいたい組み合える、時にはどうしても探せなくて何もできない、時にはパズルの存在までも忘れてしまう、時には知らない理由で違ったピースで組み合ってしまった。

自伝・回想録を書くときに強い記憶力は最も必要な条件で、また昔の日記、写真とコレクション、親友のインタビューなどを通して書くことに対してかなり役に立てられる。書く時にはパズルをやるみたい、関係があることがどんどん浮かんで来て、最後まで完全に浮かんでくることもあるし、ある程度まで止めてしまって、いくら考えても浮かんでこないこともあるし。時間をたって、また何の触発で再び続けて前の空白と断裂を補うこともあるし……。そして浮かんだ記憶を処理してから（時間の順列或いは主張に従って、文章の段落とか文字の使いとか内容をアレンジすること）、自分以外の他人でも読める自伝・回想録になれる。しかしそのような「処理」は生命の常理を違反していて、自伝・回想録の内容が「生命」と等しいという考え方を勘違いさせてしまう<sup>3</sup>。なぜかという、生命というものは実際に「ごちゃごちゃ（いろいろなことが秩序なく入り混じって）」「断片的に連続している（A 事件がまだ終わらないまま B 事件を起こすことによって中止されたが、またいつかに A 事件を続けて終わせる）」性質があるにもかかわらず、自伝・回想録を通してその性質が処理されて生命が「秩序的に」「簡単に分かりやすい」となさせたのである。しかし、そういう生命の性質が文字を通してありのままに表れるのは決して簡単ではない。上手に書けない、現実の状況（卒業時期の近づき）などを考える上で、本文はやっぱり一

<sup>3</sup> 鄭玉卿さんによって Pierre Bourdieu が個人の自伝に対する有名な言葉—「自伝幻覚 (The biographical illusion)」について論じた話しをまとめて発表された評論の中にこう書かれた「生命史は生活ということが全面的に、一致的に、一つの前後を関連して条理がある整体と看做すことに基づいて書かれたもの、一つの主観と客観を持つ個体の表現だと看做されなければいけないと Bourdieu がそう思った。……伝記は通常に幼い時から回顧し始めて、青年を経て老死に至るまで、ある有意義、目標がある直線的な発展に向いて、理屈と秩序がある仕方によって勝手に生活に起こした事件の間に理解できる関係を結び付けて、そして特別な意義を与えてその存在の価値を明らかに示して偉大な啓発を受け取る。しかし生活は反歴史的に、唯一つで自足的な連続事件からみると、年代の順序に従って組み合われた伝記、実は事実を離れた憶測で、歴史的な幻覚だけである。……」

一般的な自伝・回想録の書き方を参照して、記憶の回顧と時間の順列と意義の連結を通して自分の生命の軌跡を表して記録した。しかし、「記憶」というものは完全に信用できないし、完全にリアルではない（何がリアル、何がリアルではないというのを別なこととしてれば）。脳の構造と機能に限られて、人間はあることに対して記憶が完全に失うとかある部分だけ覚えて（「覚える」ということは作った・作られたのかもしれない、或いは「覚えたこと」も作った・作られたのかもしれない）、全面的に覚えられないし、現場に還元することも無理だという前提に基づいて、本文の始めのところに「自伝・回想録」と「記憶」に対する疑問と考え方を提出することによって、これから本文を読む時に「記憶」に沿って書かれた「自伝・回想録」の内容の「真偽<sup>4</sup>」に関することを続けて考えようと読者を誘いたい。

一般的な人間は、誰か周りに起きた事件とその経由と細かいことを全部覚えるか。また、「全部」の意味について人によって解釈が違うので、「記憶」と「過去」に関するパズルを完成させる可能性がないと考えられる。大多数の人間はそのようなパズルに枠を表装することによって安定感を求める、そしてどこかに散らしたパズルを探し続けるつらさと悔しさを忘れてたり中止したりする。このことによって、パズルを元に戻す、或いはパズルの画像を変更する可能性を消せる行為だと考える。強い外力のぶつかりで枠を剥すときの到来するまで、パズルがずっと囲まれている（外力とは、偶発的な触発によって行うことの意味で、例えば昔の知り合いとの出会い、或いはテレビ、ラジオ、閲読などの日常行為を進行するうちに、紛失したパズルが会話中と視聴中の隙間に落とし出す）。

ところで、記憶の中身にあるものは自分の経験で、あるものは「視聴」によって受けた他人の経験である。マスメディアが出る前に、人間関係によって他人の経験を受けることが普通のことだが、人間関係によって影響を受ける速度と範囲ではマスメディアより遅くて狭い。特にテレビの場合、毎日たくさんの情報とインフォメーションを放送して、遥かなところまでも伝達できるのはとても普通のことである。こう考えてみれば、記憶はただ「個人的」なレベルで組み立てられたものではなくて、多くのときに記憶は「共有的」なもので組み立てられたものである。それは特に我々の目の前から離れたところで起こした事件、我々は参与できない過去に起った事件のことを指す。それらの事件を少数的な、特定の他者を通して少しずつ情報をもたらして、だんだん今のように我々は情報を受けるうちに未経験した事件に対して「認知」を生み出して記憶の一部になる——つまり、我々はいつかどこかで 未経験した事件に対する記憶を「共有」し始めることになるというのである。例えば、テレビの放送で、我々はほとんど911事件とスマトラ島沖地震に関して「大体」を知っている。また学校教育を通して、我々はほとんど 20 世紀に起った第一次世界大戦と第二次世界大戦を知っている。

---

<sup>4</sup> ここで「真偽」とは二重の意味がある。一つは「本当に」発生したこと、もう一つは文字を通して事件現場に関して何パーセント還元できるのである。また、私が書いたのは今の私が昔のことに対する記憶と昔に書いた日記と写真に基づいて現段階に覚えたり思い出したりすることだけで、百パーセントまで還元するわけがないし、完全に還元できる人が存在していないと思う。そして、プライバシーに関することも勿論隠されていた。

それゆえ、「回想録／自伝」に関わるのは「個人的な記憶」だけではなくて、複数の個人と「共有する記憶」も同時に含まれる。その上、それはプライベートで普及的なものであった。また、「回想録／自伝」の本文も「論文」である。学校の先生の話によって、社会に対してなるべく「貢献」を与えるべきだというのはそれなりに意義がある「論文」であると思われる。この点について、またたくさんのことを考えさせる。それは「私」を主体として書いた本文はいったいどんな「貢献」をもたらすのかということである。なぜ私は「論文」でこういう書き方を選んだのか。「回想録／自伝」というのは何だか。なぜ「私的な領域」を「公開的」にしなければいけないのか。また、何が「公開的」で、何が「未公開的」なのか。有名人と偉人の回想録／自伝に対して、一般的な人間(例えば、私)の「回想録／自伝」はこの社会に対してどんな影響をもたらすのか。

## ● 言い始める

大学院の入学テストに参加する前、何も準備しないままいっぱい遊んでいた。それは初回テストの変なやり方と科目のせいで準備する気がなくなったと関係があるが、確かにその時の私がずいぶん遊び好きである。第一段階のテストが終わった翌日に、すぐヨーロッパへ行って三週間遊んでいた；第二段階のテストが終わった翌日に、東南アジアへ行って元同僚の結婚式に参加しに行き、四日三泊で遊んでいた。その時の私に対して、旅行プランを立てるのはテストより大切で、しかもチケットを予約して終わった後にテストの日にならぬことを知っていた……とにかく、テストのためにチケットとホテルの予約と旅行プランを変更しなければいけないといういろいろなことを面倒くさくなって、何回も入学試験を止めようと思っていた。結局申し込みのお金を無駄になるのはだめだという重要な原則を守らないといけない気持ちで、文句を言いながら試験に参加した。

ただ二つの科目をやるだけで第一段階に教室の中に十時間ぐらい缶詰にされてしまった。何の科目が忘れたが、テストのやり方がちょっと変わった。二つの主題によって一つずつ二篇の厚い日本語文章が用意してあった。一つの主題を選んでから二篇の文章を読んで、終わった後に主題について自分の考え方を紙に書いて、先に中文<sup>5</sup>で書くなら、次にはその中文を日本語に訳して、逆も同じである。日本語作文を書くみたいな科目で一日ぐらいつと座っていて、ランチまでも自分で用意して持っていかないと空腹しかできないような不自由である。A4サイズの厚い文章四つと問題用紙、解答用紙、その場に使ってもいい辞書で、小さなつくえがめっちゃ狭くなっていたのに、またその上でテストと食事をやるのは本当にムカついた。最初から面倒だと思うよりテストのやり方がもっと面倒なんで、途中でやめようぐらいにたまらないと感じたが、ちょっと寝てから気分転換してやっとその雰囲気から助かった。二つの主題とも何回読んだ後に、ちょっと意味が分かる主題を選んで日本語で先に自分の考え方を書き始めた（もう一つの主題はどうしても意味をとれなかった）。テストが終わったときに、また文句をぐずぐず言いながら帰って、翌日の旅行荷物を準備するとき、やっとテストのことを忘れた。

海外で三週間遊んでいて、初めてずっと憧れているヨーロッパへ行って（特にイギリス）、すっかり入学試験に参加したことを忘れていた。帰国してからテストの結果通知をあける前に、当然落ちたと思った。何を書いていたか自分も分からないし、心もすでにヨーロッパに飛んでいったし、そんな状態で第二段階に入るわけがないでしょう。しかも第二段階のテストが面接試験なんで、落ちたほうがうれしいと思う。でも、人生が予想できない変なものである。テストのやり方が変だし、第二段階に入るのも変である。申し込み

---

<sup>5</sup> 「中文」とは「国語」という意味、つまり民国 38 年に国民政府によって推進された国語運動政策の中の「国語」とのことを指して、いわゆる「漢語」とのことである。「中文」という言い方は台湾でよく使われている白話で、そして筆者がその言い方に使い慣れたのである。

のときに附いて送った応募理由書<sup>6</sup>をめちゃくちゃ書いたものだと思い出した途端、第二段階に入ったことがまるで悪魔のようなものになって、私が恐怖しか感じられなかった。

専門学校最後の一年に推薦で進学すると決めた後、一番狙っている学校は「面接なし」のを目標である。面接なしでいいと思っていた。学校のリストを見て、面接なしのはただ一所だけ、それは国立台中技術学院である。順調に受けた翌年、つまり技術学院最後の一年にまた卒業してから進学すると決めたが、まったく違う学科のメディア関係学科を選んで修士課程の入学試験に参加した。2003年に文化大学ジャーナリズム研究学科の入学試験で参加者全員が面接を受けなければいけないのである。ということは、第一段階が終わるとすぐ第二段階の面接である。面接がただ五分間だけでも、試験を申し込んだ後からずっと心配していて、終わるまでその心配と緊張の気持ちがとれなかった。バイトと就職のために面接を受けたときもすごく緊張だが、お金をもうけると思った途端、緊張してもしょうがないので、逆に心が面接のこを受け入れた。しかし予想以外に自分に面倒をかけてしまったのは、2006年に入学試験の第二段階に入ったことである。その時の気持ちは興奮するより、余計なことをやった自分に叱るほうが多かった。

結局無理やりに面接試験を受けた。試験会場が三つに分けて、参加者の皆が順番によって三つの会場に入った。私がある会場に入って、何を言っているが自分も全然分からなかった。審査員の一人が私に次の質問を聞いた、「大学院に入ったら何を研究したいですか？」頭の中に真っ白の私は質問の意味が分かるが、どう回答するかどうか全然分からなかった。だって最初ただ単純にサイトにアップロードしたカリキュラムに対して興味を持つだけで入学試験に参加した、しかも面接の場に出ていることは研究をやりたいという意味でもないし、その時の私に対して「興味を持つ」と「研究をやる」とまったく違うことで、何を研究したいなんて考えられなかった。でも、会場までもきたので、やっぱり真剣で何とか答えたほうがいいと思って「三つの領域を応用できるような研究をやりたいです」と答えた。審査員が次の質問を言うまで、その時の私は自分が何のうそをついたか全然分からなかった。「では、具体的な例を挙げてください」と審査員が聞いた。しまった、具体的な例なんて知っているわけがないんだろう。また続けてうそをつくしかできなかった。ちゃんと見ていないが、審査員の表情にいくつかのクエスチョンマークが浮かんでいることが知っていた。幸い一人ずつ五分間の「時間制限」があって、やっと話を終わらせた。面接が終わった後、まるで全身の力が抜けたように疲れてしまった。うそつきの代わりに相当悔しいと感じて、心の奥にはまた自分に対して自信を持っていなくなってきた。また海外へ行くおかげで、荷物を準備しなければいけない私は暫くその不安な感じを忘れていた。

東南アジアのタイへ行くのは二回目で、五月の天気が大変晴れているので、昼に外へ行

---

<sup>6</sup> 大学院の入学試験を申し込むときに規定される資料の一つで、詳しいフォームは添付資料二を参考。

って暑くて、夜にホテルに戻る時すでにぼろぼろになった。ある日、ホテルに戻って頭がフラフラして、もうすぐ目を瞑る前に、携帯をチェックしている私があるメールをみた。その内容を見てから、つい「まさか？」と叫んだ。メールは「合格だよ！それに正式応募人数の最後の一名ですよ！」と書いていた。メールを発信する K<sup>7</sup>が冗談をいっているのも可能で、しかもそんなことが本当におかしいと思う私がすぐ向こうに国際電話をした。向こうは笑いながらそれが本当だといって、また私に帰国してから自分で調べなさいと言いつ返した。うん、いまさら何が言ったほうがいいか。いいえ、違う、また何を言えるのか。だって今私はもうここ（東海日文系）にいる。

三年前の私は何を研究したいのが何も分からなくて、三年間経っていても、やっぱりよく分からない状態だ。しかし、私がまだ頑張っている。

「反抗する、頑張るなんて無駄だ！弱い力しか持たないなんで、何も変えられない！世界を変えるなんて無理だ！ならどうして続けて頑張って反抗しなければいけないの？」という話をよく聞いたが、ずっと納得できない。一人の力で広い世界を変えることが無理だが、少しだけでも、わずかだけでも、世界のある小さな部分を変えられると信じている。悔しいと思うなら言い出す。言ってもしょうがないと思うだけで発声できるチャンスと権利を放棄することをしないように。試さないとも結果はどうなるか分からないでしょう。こういう考え方が、「論文」に対してよく分からなかった時期に私を支えていた。テーマさえ確定できないときにも、私が言いたいことがあると知っているし、何を言いたいのかは知っているし。ただ疑問を持っているのは、「言いたい」だけで「論文」になるか。

こんなときに迷っている自分に私はこう言う、「試さない分からない」。

2010年5月13日木曜日の夜に、阿川<sup>8</sup>の研究室で行われた「論文」相談会で、初稿の電子ファイルと同級生の J<sup>9</sup>と後輩の N<sup>10</sup>に渡して見せた。「言い始める」という章節の前半だけ読んだ N がすぐ私に質問を出した。「なぜ大学院の入学試験から書き始めたの。『自伝』って小さいときから回想して、書き始めたものだと思うけど。」

N の話から以下のことを考えさせた。それはこの前に私も「回想録／自伝」なんで小さいときから書き始めなければいけないもので、たくさんの偉人の伝記のように、時間の順列によって昔のことを一件一件で数える、また、生命の経験がお互いにかけている、例えば大人になってからやったことはほとんど子供時代の経験と関係がある、と思っていた。ただし、前述のように生命とは1, 2, 3, 4...のような単一の数列＝事件ではなくて、たくさんの数列＝事件をお互いにかけて組み立てたもので、数列＝事件の間に時には規

<sup>7</sup> 技術学院時代の同級生。

<sup>8</sup> 私の「論文」の指導先生。

<sup>9</sup> 大学院の同級生。

<sup>10</sup> 大学院の後輩。

則に沿われるように連続的に出ているが、時には全然規則がないように断絶になって消えてしまう。

そこで、その代わりに「特別な意味のある事件から書き始める」という思いが湧いた。その「特別な意味のある事件」からすぐ連想したのは、今「論文」と闘って、死ぬほど苦しい状況に巻き込まれたそのスタートのことである。いやと思いながら「論文」を書いて、そして矛盾に「自分が決めたことだから、勇気を出して真剣にやりなさい」という理由で自分に説得したいが、また四年前に試験を申し込んだ決定を後悔した。このように何回も繰り返して、本文を書くうちに本当にそのような自分のことを厭きていた。その原因を回顧しようと思って、大学院に入ってから私はどのように足並みが揺れて乱れてここまで来たのか。そしてなぜ本文を書いている今までもしっかり前向きに次の歩みを歩き出せないか。

「言い始める」という章節では入学試験の課程について細かく述べることによって、「論文」に対する無知、拒み、矛盾とわけ分からないコダワリを引き立てて、実は「言い出し」は「勇気」がどれほど必要だということ表現したいのである。「言いたい」と「言い出せる」とは別の問題であると考えている。「言いたい」とは聞き取れる方を見つけるわけではないし、「言い出し」とは何を変えるわけでもない。

ここまでは、また読者に聞きたいことがある。貴方は「言い出したい」か。「言い出し」の「勇気」を持っているのか。その「勇気」はどこから来たのか。また、なぜ貴方は言えなくて、言いたくないのか。

## ● なぜ言う？

そう、「試さないといけない」。この話は勇敢に試みに行く胆力を持つという意味がある一方、話者の馬鹿さと無知を見せる。こんな胆力と無知に基づいて、「論文」で言いたいことを言える方法を見つけようとし始めた。

私にとって、「論文」とは対話の空間だし書く場所だし、発声の空間だし実践の場所だし、批判する空間だし反抗を行う場所である。言わなくて書かなくてもそれを全部失うではなくて、ただ一つの「空間・場所」を失うだけだけど、そうする理由が見つからなかった。

本文を書くときに何度も繰り返している自問自答は自分との対話で、そして他人との対話を始めて、例えば、指導先生、同級生、学位試験の審査員、図書館に来てくれる社会の大衆・読者など。その自分との対話がまだ続けていて、たとえ院の課程が全部終わって卒業しても、また続けていく。

書くことは行動・実践である。社会から個人は抜け出せなから、このような行動・実践は個人から生じるものだが社会のある部分を映している。

批判的なものだとしても、口喧嘩などではない。自分の経験から周りを意識的に観察して分析して、そして反省して考えることである。

声を出すのはある程度は反抗を行うともいえる。黙ることも反抗だといえるが、私にとって黙るより声を出すチャンスが少なく、しかもそんなに公開的なものである。プロの作家ではないし、常に新聞社に投稿すると載せられるフリー作家ではないし。ブログで言いたいことを公開的に発表できるが、本文の目標と設定している読者はパソコンの向こうにインターネットを通してたまたま検索資料の中に本文が出てくるのでちょっと読んでもいいなあと思う知らない人たちではないし、常にブログによってくる友たちではないし（彼ら・彼女らは読んでもいい）、「論文」、大学院など学術と教育制度と関連がある人たちである。

学術と教育は反省である。社会から何かを学んだ自分を反省して、自分が入っている社会のことも反省する。この文章を通して、自分と対話するという行動・実践を行ううちにどんな社会の部分を映せるかと探したい。

まず本文の目的について話しましょう。

なぜ私は「発声」しなければいけないのか。なぜ私は「反抗する」のか。またなぜ「論文」を通して自分の考えを伝えなければいけないのか。いっぱいクエスチョンマークが頭の中に回っていて、いくら考えても、自分に満足のできる答えが出てこない。例えば、前述の三つの質問のように。

なぜ「論文」を書くのかという質問に対して、一言言えば、卒業したい、だから「論文」を書くというのがごく一般的な答え方であろう。しかし、なぜ「反抗する」のか。なぜ「発声する」のか。「何」を反抗する、「どんな声」を発するのか。

私にとって、「反省」という声を発したいから「論文」を書くのである。本文を通して、自分を、周りを、この社会を反省する。全体が見えない自分の狭い視野の考えに反省する、周りからたくさんの騒ぎに反省する、この社会の弱肉強食の現実と残酷に反省する。また何を反抗するかというと、自分と周り、そしてこの社会を反抗することである。自分の狭い視野の考えを反抗する、周りからたくさんの騒ぎを反抗する、この社会の現実と残酷を反抗する。ただし、私は社会からもらう、社会にも私を通して体現するので、「反省」と「反抗」によって本当に自分とこの社会の「枠」から脱出できるのかと言ったら、現段階の私には分からないが試みたいと答えるでしょう。私はその枠に隙間を探して、そしてそこから出られるかどうかを試してみる。一本の指だけで出られても、最後まで努力しても隙間だけ見つけたとしても試みたい。それに、不安の気持ちを持ちながらも、「書くこと」から始めようと決めた。

書くことは枠をたてる過程で、また枠から脱出する可能である。書くことは描写、創作で、書く物は証拠、足跡だが、書くことは同時に抹殺、でっち上げで、書く物はうそ、妄想である。書くことは自分を体現する方法の一つだが、逆に言えば、高い壁みたいな障害でもある。何のために書くことをはじめるといったら、「リテラシー」を持つ人だけでその書くことの大門に通れるからではないか。一つの発声、創作、矢印の描写の方法として、リテラシーが先決の条件になった書くこととは「ある人」にとって特権特許を持つようになり、「ある人」にとって発声する特有近道で、「ある人」にとって他人を代弁する絶好の利器になる。大門に入って、選択／排除の状況がまだ存在していると思えるであろう。例えば何の「言語」で書くのか。いくつかの言語ができる人がいるし、単一の言語のみできる人がいるし。それに「言語」とは「文字」とまったくイコールではない。例えば、昔の原住民社会で文字がないまま、近代まで族群の「口述歴史」を保存しようと思って文字を作った。そのため、「文字」が「進歩」の表象と表現とみなされる現代では、「書くことの意味」がもっと複雑で意味深いと考えられる。

しかも、書く物の主題／主体／対象はどう決めるのか。「人間」の場合から考えると、ある人にとって自分を対象として書く＝自分を語る、ある人にとって他人を対象として書く＝他人を代弁する、その間に具体的に対象の経験、情緒と感銘についてできるだけ適切な文字を見つけて、組み合せて、累積して、積み重ねてから、「有意義な配列」に形成する。しかし、なぜ私は他人の代わりに自分を対象として書くのか。「ノコス」とは本当に必要であるか。のこした「もの」は「意味がある」のか。

## 一、迷って転向して...そして、目的地に着いたか？

最初の焦点は台湾の原住民（先住民）と後から来た移民者の交流活動に絞ったが、後から来た「移民者」の定義が複雑すぎるし（例えば、「移民者」とは漢民族のことをさすなら、漢民族の中の閩南人、客家人、国民政府についてきた外省人がいる—どれに設定するか、また、どんな時期に台湾に来た「移民者」を設定するかなど）、「交流活動」とはどんな形の活動をさすか。商売で結びつく関係？族群の衝突？植民と被植民という関係？いくら考えても決められないので、未解決のままどこかにおいてしまった。

それから自分が後から来た「移民者（漢民族：閩南人）」の子孫で、自分が「移民者（漢民族：閩南人）」の立場と観点から出発して考えてもいい方向ではないかと思いついた。しかし、また問題が出てきた、その「移民者」の定義に。私は漢民族の閩南人だが、台湾で生まれて成長して、この面から言うと私も「原住民」であるし、「移民者」ではないので、その方向はまただめになってしまった。

では、原住民のライフストーリーを中心にするのはいけるではないか。

プロジェクト<sup>11</sup>に参加して、初めて「生命史・ライフストーリー」のことを知った。そのときのプロジェクトは「ある人たち」のインタビューをやっていて、彼ら・彼女らが日本時代、太平洋戦争と戦後（日本が降伏して、太平洋戦争が終わった後）の生活について個人の記憶と経験を語ってもらって、そのうちに「個人史」の面白さを感じた。特に一人ずつの生命過程によってストーリーの内容も違っていった。時代の背景が同じで、同じ人・事件があっても、話者によって語り方が違って、語られた「個人史」が似ていても決して同じではない。「語りはあるときには人の演技・出演で、その内容は本当かどうかよく分からない」、ミーティングをするときに、先生がそう言った話を覚えている（個人として、やっぱり「生命史」の内容について驚嘆する）。しかし、何が本当なのか、何か嘘なのかと誰が知っているか？「南京大虐殺」と「ナチのホロコースト」という事件の有無について、違う社会のコンテストにおいて、また違う政治的な立場から見ると、有無の答えは今までもなくて、論争だけ繰り返して、事件の歴史について最後の結論を言えるのは一人もいなかった。「その中から手がかりを探りだせるのは、話者がどうしてこう言うかという理由だ、つまり話者の政治性だ」と先生もいっていた。なぜそう語るか？なぜA事件を語るが、B事件を語らないか？またどうしていつもC事件ばかり語るか？ということで、プロジェクトの「個人史」を集めるうちに勉強したのは：「語る」が経験を示すことだといえるなら、語った内容の真偽を検査するのはポイントではなくて、ポイントは語るときの語り手の立場を分かることである。一方、他人の物語の中に、私が経験しないことと経験

---

<sup>11</sup> 東海大学日文系の大学院では「プロジェクト」への参加が必修単位である。当時には五つのプロジェクトがあって、各自の志願に従って参加できていた。

できないことがいっぱいあって、だんだん「個人史・個人的なライフストーリー」の魅力に吸引されていった。

物語を聞くことが好きで、「個人史」の特徴・意義を分かってくる、また同時に自分と原住民の間に「何かの関係」が存在していると意識してずっと「それはどんな関係だろう」という疑問に答えられず戸惑って、そして「他人の代わりに声を出す（当時には台湾原住民を弱者として助けたいという気持ちで）」ということをしたくて、「論文」を通して台湾原住民の「個人史」を著して、「個人史」を増やして、政府機関の強い権力と対抗できる民間の力になるように考えていた。

協力者の同意をもらって、向こうとの対話・インタビューを始めて、そして対話・インタビューについて簡単な記録を書いた。記録を書いているうちにあることにかすかに気付いた。それはまったく原住民とあってない人より、私の心の中の原住民に対するステレオタイプのイメージはもっと深く根強い——自分の原住民知り合いを社会が構築したイメージから抜き出して別にして独立させると同時に、元々頭の中に構築された原住民に対するイメージをもっとはっきりしていた。その一方、プロジェクトの参加によって頻繁に部落の原住民と接触すれば接触するほど、部落の原住民のことが頭の中に構築された原住民に対するイメージにもっと相応しいと感じていた。ということで、たくさんのライフストーリーを聞いた後に、自分のライフを振り返ってみることで、今までの人生の中に前述の根強い「原住民のイメージ」と知り合いを「特殊化する」原因を探すことを試みたい。

その前に、本文を促成した背景について説明する。  
まず、私と日本語である。

現実には、「どこから来たか、またどこかへ行くか」という「出発—到達」のことがいつも繰り返されている。毎回の「出発—到達」がお互いに引き付けて連帯する、前回の「到達」と次回の「出発」もお互いの因果関係になる。ところで、「出発」と「到達」の間にあるセンの点、実は無数の点で組み合わせたものということで、出発してから到達するまでたくさんのことが起ることが分かったが、それらのことがいつも注目され易くないし、簡単に省略してしまう。

大学院に入っても、「どこから、どこまで」という出し物がまた上演される。その中から「論文」を引き出して拡大して検視すると、同じ構築の出し物が見つかった。ただ「論文」という出し物の中に、私のキャラは俳優だけではなく、ほかにはシナリオライターと自分の演出を見る観衆である。つまり、「論文」の中に、私は同時に「俳優」、「シナリオライター」と「観衆」の三つのキャラを演じているということである。自分の表現に対してあまり把握できないが、力を尽くしてやってみた。

では、なぜ「論文」の中にその三つのキャラが出てくるのか。

それは、次の「到達／出発」が見えないからである。それは、聞いた他人のライフストーリーの中に自分が迷う。他人の語りを聞きながら、その面白いストーリーに引き付けられて、だんだん他人の語りに従ってそのストーリーの中に沈む。そしてある日、急に驚いた、今自分がどこにいるかと分からない、なぜ今のところに来たのか、そしてなぜここに止まるのか。自分の目的地なのに見つからない、毎回経過して接岸した岸辺は「行きたいところ」に繋がるかどうかは分からなくなった。

前が見えなくて、次の歩みはどこに踏んだらいいかは分からないので、元の場所に止まって畏縮して不安を抱く。「後退とは前に向かう」という言葉を思い出してから、方向を変えて、(やっと)足を開いて後ろ／前に(出発して)歩くようになる。三つのキャラ(書く、演じる、見る)を担当することによって、ここまで辿り着いて足跡に沿って途中の風景と元の原点を回顧したいと思う。気持ちが変わっても、足並みが違っても、それによって初めになぜ自分を失ったか、なぜ止まったか、なぜ勇気を出せないまま前の霧に通さなかったかその理由を自分は理解できるように願っている。

私はほかに知りたいことがある。それは一回の「出発—到達」で、その目的地は一つしかできないか。複数以上にあるわけがないか。或いは目的地が複数以上という例があるのか。例えば、私が分かるのは「出発」と「到達」は二つの点で、方向は「出発」から「到達」へ進行することであるが、「出発」と「到達」は三つ以上の点で、方向は「出発」から二つの「到達」へ進行するという例がないのか。

## 二、なぜ日本語？

日本語は私にとって最初から本文を日本語で書くと決めるまで、その意義と役割と機能を常に変えてきた。その変化が複雑だが、「簡単に」説明していく。

日本時代に祖父が日本語教育を受けたということを父から聞いたが、何年間受けたかは行ってなかった。しかも祖父とこんなことについて話したこともなかったので、祖父に関することがほとんど父から聞いた。それは子供の頃に祖父が厳しすぎるといった関係がある。いつも祖父に対して耐えられない恐怖感を持って、一人で祖父と一緒にいられなくて、もちろんそんな個人的な話題を聞くのもできなかった。そのときの私は小さすぎて、祖父のストーリーの面白さがまだ分からないのに、残念で祖父にその年代のストーリーを聞くことが永遠にできなくなった。昔の祖父が緑島で有名な船長で、海について何でも知っていると言った。何も負けたくない性格がとても強くて、いつも厳しい態度で、家族に対しても同じである。その原因で今まで祖父に対する残ったイメージは厳しいが、ほかにはまったく違うイメージのやさしい祖父が確かにあって、そして今までもはっきりしている。昔には、祖父と祖母が家に泊まったとき、夏の夜に晩ご飯が終わってから、もし祖父の気持ちが良かったら、私と弟を連れて散歩しに行った。夜の風に当たって、歩きながら「桃太郎さん」を歌って、そして私と弟にその童謡を教えてくれた。私と弟がいつも祖父の歌声についてバラバラに歌っていた。それは初めて非正式に日本語を学ぶ経験である。

次には小学校五、六年生の時に、父が公務員の昇級試験に参加すると決めた。試験科目の中に一つの外国語を選考しなければいけないので、職業学校の学歴を持つ父が祖父の関係で英語より日本語に対して興味を持っていて、その中に日本語を選んだ。しかし祖父に日本語を教えてもらえなかった父が、基礎がないまま興味を持つだけで私人的な塾へ勉強しに行った。その時、日本語の科目がある試験を受けた父の日本語がきっと上手だと思う私はまだ日本語を勉強していなかった。専門学校の実用日本語学科に入学したばかりの私に、父から自分の日本語が動詞の活用形までもう止められたという話を言った時、まだ活用形を勉強していない私は父が言っている意味がよく分かっていなかった。勉強してからその意味が分かってきた。活用形の変化が多すぎて覚えられないし、また年取って仕事と生活が大変忙しいので、父が日本語の勉強をやめた。ですから父にとって、「日本語が話せる」のは完成できず小さな夢みたくて、そして大学と英語が最高だと認められる年代に、高校を中断して専門学校の日本語学科を選んだ私に支えてくれた。その前提は父として娘の考え方と決定を尊重していて、強豪で父の決定を受け入れるではなかったが、祖父が教えていた保守的な家族の中にそれは異例である。父から何回も聞いた、祖父母が子供に対する男尊女卑の教え方が好きではなかった。自分が男でも、その男尊女卑の観念と態度が受け入れなくて、子供なら男でも女でも自分の子供だから重要さが同じ、昔から自分

の子供に対して絶対祖父母のようにならないように決めたと父がそう言った。孫として、祖父母が兄と弟に対する態度を私と姉との違うことが知っていて、父が言った「一緒にならない」と賛成したが、今の私にとって、それについて考え方も変わった。祖父母が生まれた年代に、男尊女卑の観念が日常茶飯でとても普遍的なことで、女として祖母も同じな方法と態度で自分の娘をしつけするのは祖母のせいではなくて、ただ上の世代から受け入れたことで次の世代に教えるだけである。特に昔の農業社会で、前人の経験がよく学ぶ対象とやり方の規則になった。その足跡についてここまで来た彼らは私たちの責めと検証を負う義務がないが、祖父母とまったく違う教え方の父が、確実に私に自分の人生を選べて大きな空間を与えた。

祖父と父の関係で、人生の小さなところにもう日本語がそこにある。

台東女子高校のときにいいクラスに入ったが、二学期目のときに当時の担当先生の「不適切」な教学行為、態度と発言で、まるで監禁されている学校生活を耐えられなかった。父が支えてくれたうえで専門学校の試験を準備し始めて、そして受けたあとに元の女子高校に休学の申し込みを出した。父の考えによって、受けてから高校に休学したほうが安全だし、自分に戻れる道を残すために、高校の勉強を続けなければいけなくて成績もちゃんと維持しないではいけない、また時間を無駄にならないように暇なときには専門学校の試験を準備する、そのときには決して「論文」を書く今より気軽ではなかった。父が私にもっと時間をつくるために、試験科目（歴史か地理かよく覚えていない）の教科書の内容を「朗読」によってテープに録音した。そうすると、本を持たなければ読めないではなくて、「読む」の代わりに「聞く」で、歩くときに、自転車を乗るときに、ご飯を食べるときに、寝る前に勉強できる時間がかかなり増やした。いつも寝る前に聞きながら寝てしまっただが、父のおかげでそんなに便利な方法を考えてくれなかったら、両方に配慮を加えないかもしれない、また高校の生活から抜き出すこともできなくなるかもしれない。志望の専門学校・学科を選ぶとき、両親がやっぱり心配して、「本当に英語学科を選ばないか？日本語で就職するなんか難しそうだよ」と私に何度も言った。大きくなってから、「進路」について全然考えてなくて、「将来何をやる」ということの重要性についても意識してなくて、ただ小学校を卒業してから中学校に入って、また中学校を卒業してから高校に入るこういうふう一般的な社会期待に添って学校教育を受け続けて、人生を進んでいくだけで、専門学校を選ぶときにも、「将来何をやる」ということを頭の中に入れなかった。理工とビジネス関係の学科に対して興味全然ない（というより全然分からないほうがもっと適当だ）が、言語に対してわけ分からない憧れを持っていた。その憧れはいつから生み出したのか。前に言った日本語の経験の以外に、確かに覚えている時点は小学校四年生から五年生になるその夏休みだ。そのとき、父に英語の塾へ送っていた。早めに英語を習って基礎付けてから将来の大学試験に参加するときいい成績をとれるように、たぶん父が当時そう思っていた（しかし予想以外に娘が途中で転向してしまった）。中学校の英語成績が一番ではないが、早めに接触する経験で英語の勉強に対して怖くないと思って、間接的

に「英語」に対する好奇心が失って、専門学校の学科を選ぶときにも最初から英語を選ばないと決めた。私にとって、英語より日本語が新たなもので興味を持っていた。英語が当時の世界の主流言語で、台湾で大ヒットして、全ての学校の英語学科が言語学科のトップである。英語学科に入学できる成績をとったが、やっぱり日本語学科のほうを選んだ。最後には志望の学校——文藻言語専門学校<sup>12</sup>に入るではなかったでも、高校の生活を思いつくつらいので、父の友たちが推薦した学校を選んで入学した。それで、私立高苑工商専門学校<sup>13</sup>の応用外語科日文組<sup>14</sup>を入学してから、初めて実家を離れる一人の暮らしも始めた。

専門学校を入学ばかりに、ある先生が授業中にクラス全員に「なぜ日本語学科に入ったんですか」という質問を聞いた。クラス半分以上が点数が低くて英語学科を選べないので日本語学科に入る、ほかの人が哈日族（ハーリーズ）になるから日本語を勉強したくなる、という状況をみたら、クラスの中で単純に日本語を勉強するために来ていた人が少ないと分かっていた。多数の人と同じではないと確定できたが、自分が哈日族かどうかよく分からない。日本の芸能人が好きではないし、ドラマのロマンチックな筋に憧れていないし、ただ姉の影響を受けて小学校から中文で訳した日本の漫画を読むことが大好きだし、中学校から小遣いで漫画を買って収集するし（両親に叱られても続けた）、一度もこのために日本語を勉強したくならなかった。漫画を読みつつ、漫画家になりたかったし、漫画の世界で自由に幻想することを楽しみにするし、日本語の原文漫画を読むために日本語を勉強したくなることは全然考えてなかった。また、台湾と香港作家の漫画も読んだり収集したりするので、これだけで哈日族だと言えるかどうかよく分からない。もし、私が哈日族としてほかの哈日族の同級生と比べれば、きっと全然だめだといわれる。高校から逃げて、また祖父と父の日本語勉強経験の影響をうけて、日本語を勉強する動機が不単純の私は、専門学校の初期に好奇心を持って日本語の勉強に対して新鮮な感じをいっぱい持っていたが、後期になると多彩な学生生活のほうに向かって、とくにサークル活動に夢中になって、だんだん勉強のことがほっといた。

中学校のときに、進学のためにあまりサークルに参加してなかったが、やっと高校のときに「サークルの魅力」を初めて知っていた。同級生と一緒に自分のサークルをたてましようといってから、皆が勉強のストレスを解消したがるみたい、早速手続きを踏んで準備しながら、お笑いの劇を作ってリハーサルして、一気に学校の行事で公演した。本当に楽しかった、お笑いの劇をリハーサルするときに皆がよく笑ってしまって、暫く勉強の重さも忘れていたが、二学期目にこの楽しさが新しいクラスの担当先生の要求で打ち壊され

---

<sup>12</sup> 現在文藻外語学院に改名した。台湾の南部で言語教育としてずいぶん有名である。

<sup>13</sup> 1986年に創設して、前身は私立高苑工業専科学校。1991年に私立高苑工商専科学校に改名して、1998年に高苑技術学院に変わって、また2005年に高苑科技大学に改名した。1996年9月に五年専科部に入学して、2001年6月に卒業した。

<sup>14</sup> 応用外語科五年専科部は1993年に創設した当時には英文組だけで、日文組は1994年に増設した。1996年に入学した私は日文組の三期生だったのである。

た。高校を離れた私が高校の同級生と一緒にサークルの創立を頑張ることができなかったが、創立してから学校のトップサークルになった話を聞いたときに、本当に喜んでいて、サークルに熱心さがまだ心の中にあると気付いた。高校の雰囲気と全然違って、サークル活動に対してとても励ます専門学校に行き、このチャンスを大切にして二つ以上のサークルに参加して、そしてスタッフになってイベントを行うこともあった。私にとって、学園生活の中で昔のように勉強が唯一のものだけではなくて、サークルからいろいろな授業以外の勉強をできるということが相当魅力があって、しかもその魅力が日本語に対する好奇心より高まっていた。その原因で、専門学校の後期にあまり勉強していなくて、日本語に対しても初期より積極的ではなくなって、日本語能力試験もいつも低い点数で合格した。しかしおかしなのは、日本語に対して以前のように興味を持っていないが、卒業する前に進学を決めて試験の参加を申し込んだ（二年の技術学院の推薦入学申請と大学の転校試験）。性格がとても臆病で、また自分の日本語能力に対する自信がないので、志望校を選ぶときに直接に面接なしの学校を選んだ。専門学校の後期以来、「日本語を話す」ということが私にとってずっと辛くて困難なことみたいで、こうなる原因はたぶん勉強の不真剣と言語能力の限界と関係があるかもしれない。幸い在校の成績がまあまあ大丈夫なので、順調に志望校——面接なしの国立台中技術学院の応用外語系日文組<sup>15</sup>を受けた。

技術学院の在校時間が短いので、サークル活動の時間も少ない、またすぐ卒業するから、まだ新環境になれていないのにもう将来の計画をたてないといけなくて、この時期にサークルに熱心が展開できる余裕も全然なかった。日本語を勉強する六、七年目、実用的な日本語授業について同じように興味を持たない、例えば：日本語通訳、日本語新聞、ビジネス日本語など。ということで、次の進路を考えると、就職とか進学とかその交差点の前になかなか決められなくてすごく悩んで迷っていた。進学するなら、次には修士課程である。当時（2002～2003年）の大学院がほとんど自信と興味を持たない方向を中心に応募していた、例えば、日本語言語学・文法、日本文学、日本政治と経済など、確かに授業で勉強したことがあったが、わずかなものだけ知っている私にとって、興味を持たせなかった。また、自分の日本語能力に対して自信を持たないで、卒業してから順調に就職できるかどうかについて疑っているし、就職すると実家に帰るかほかのところに行くかということについても困っていた。勉強のためではなくて、海外に憧れる虚栄心で、ブームになる海外留学も考えたが、家の経済状況を許せないで、本当にいけるとは思わなかった。大変迷って焦るうちに、K（前述と同じ人）からメディア研究科のことを紹介してもらって、そして一緒に予備校の説明会を見学しに行った。そこで初めて社会学科の理論を知っていて面白かったと思ったが、短い時間で理論を理解して応用できるようにならないので、進学率が低いメディア研究科を受けなかった。そして社会人になる心の準備をまだできていないので、進路を続けて考えたい私は七年の一人暮らしを終わって荷物を片付け

<sup>15</sup> 1919年に創立して、かなり歴史がある学校で、1999年に商業専科学校から技術学院に改名した。1980年に五年専科部応用外語科日文組を創設して、2000年に二年技術部応用外語系日文組を増設して、2004年に二年技術部応用日語系に改名した。2001年9月に二年技術部応用外語系日文組に入学して、2003年6月に卒業した私は二期生だったのである。

て実家へ帰った。

1997年から12月の日本語能力試験に参加することが慣例になるように、毎年維持していて、実家へ帰る一年（2003年夏から2004年夏まで）にも参加しに行ったが、この年度の試験に参加することが私の社会人になりたくない言い訳になった。特に私も収入安定の公務員になるように私を国家試験に参加ほしかった公務員の父に対するいい言い訳である。三回目の一級試験が終わって、半年ぐらい浪人した私はもう言い訳をしなくて、しつこい父から逃げようと思って、近くにバイトをやって家にいる時間を縮めていた。半年ぐらいバイトした私は、もう無意義のこだわりをやめると思って、半年のバイトで稼いだお金で国家試験の予備校合格保証コースを申し込んだ。もし将来順調に受けたら、絶対自分の力で留学しに行くとか心の中でそう思っていたが、バイトをやめて授業を始めたばかりなのに、毎日勉強ばかりの日々を本気でほしいかと後悔していた。しかし、もうお金を払ったから、続けていくしかないのではないかと自分にいった。誰でも知らないように、まもなく四万円ぐらいのお金が本当に無くしてしまった。

ある日、久しぶりにY<sup>16</sup>から電話があって、彼女の会社が社員を探していて、その仕事を面接しにいかないかと私に聞いたのである。半年ぐらいあまり日本語を使わなくて、職場に入る自信がまだ足りないで、すぐに答えなかった。Yの説得が効を奏して、また父の支えをもらって、胸を張って面接しに行き、それに順調に受けた。そこでずっと畏縮している足を踏み出すと決めて、再び実家を離れて日本語に囲まれる環境に戻った。ただ今回は新米として職場に行き日本語を使っていた。初日に会社が多国籍の合資会社なので、台湾人と日本人の以外に、社員の中で欧米と東南アジアから来ていたエンジニアもいっぱいだったと知っていた。仕事の内容が常に話すではなかったが、日本語だけではなく、時々簡単な英語も必要だったのである。幸いなのは、仕事内容によってあまり口を使わなかったのである。こういうふうに、二年の就職で日本語を話す能力があまり成長しなくて、卒業して以来ずっと同じなレベルで変わっていなかった。そして日本語の勉強に対して進歩を求めないタイプなので、東海大学の大学院（ここ）を受けてから、本当に泣くか笑いかも分からないほどびっくりした。

入学前に東海大学のことに少しだけ知っていた。観光客として三角形の教会と広くて美しいキャンパスへ行ったことがある；技術学院を卒業する直前に、修士課程を開設するかと東海の日本語文学系のサイトを検索した結果は開設しなかったが、ついでに学部のカリキュラムを調べたら、意外に「面白そう」な科目を見つけた。いくらカリキュラムが面白そうだとしても、当時（2002年）すぐ卒業する私は、もう一度大学を入学するわけがないので、だんだんこのことをすっかり忘れていた。2006年に東海の日本語文学科の修士課程を開設することが最初知らなくて、再びKから教えて励ましてくれてから申し込んでいた。仕事が忙しくて疲れた一方、第二段落には面接試験があって日本語を話せないと

---

<sup>16</sup> 技術学院時代の同級生。

いけないので、きっと受けられないと思った。私にとって、受けた最大な原因は申し込みに払ったお金を無駄に浪費したくないコダワリだったのである。

ここまで、日本語は私にとって道具、科目と勉強の役割で、最初には祖父と父から知っていたが、なぜ祖父が日本語教育を受けたことがあったか、なぜ父が日本と日本語のことを言ったときに憧れの気持ちを持っているみたいか、なぜ両親が日本語より英語のほうが勉強すると就職しやすいという考え方が持っているか、ということを考えてなかった。中学校の歴史教科書から台湾昔には日本に 50 年植民地されたことを勉強したことがあっても、メデア研究科の予備校で「文化帝国主義」という理論を勉強したことがあっても、そういうことがとても遙かなことで、私と関係がないと思った。

入学したばかりの課程説明会で、休憩時間に初めて私に声をかけた阿川にそう聞かされた、「なぜ自己紹介の時に、自分の名前を陳（チン）でいうか、なぜ陳（チェン）でいわないの」。わけ分からない話を聞かされて、どう反応するか全然分からなかった。日本語の問題ではなくて、その話しの意味を分からなかった。授業を始めてからだんだん気付いたのは、いろいろなことに対するいつも勿論だと思って疑問を持たず態度でみているが、逆に疑いの気持ちと鋭い観察力で——つまり「問題意識」を持ってみると、いつも勿論だと思ふことの後ろにもっとたくさん注視すべきことを存在するとみつける、ということである。そしてその先生の話しについて自分なりの理解をできていた。1996 年に五十音から日本語を勉強し始めて、2006 年に日本語が台湾で植民とポスト植民、そして日本と台湾の力関係を意味するということを意識した。ゼミを始める前に、長期的に自分の日本語表現能力が「下手、流暢ではない」と心配するし、ゼミのやり方も怖がるし、同級生の中で日本人がいるし、これらの原因で日本語を話すときの劣等感がよりいっそう高まった。ゼミを始めてから、中文、日本語とほかの言語などを混ぜて使って、先生と生徒を分けずにお互いが通訳とか説明とかをしている状況を見ると、やっとプレッシャーを少しだけ解散するように安心した。ゼミで皆が言語の実用性よりコミュニケーションの実質的な意義のほうが大切だと思われるように感じていた。コミュニケーションをとるときに言語が必要なものだが、自分の代わりに他人に頼むとかジェスチャーをすとか代えても、自分の意見と考え方はそのようにできない（他人に頼むのは「本来のものと違う」可能性がある）。この前提で、私の考えが変わり始めた。昔には「日本語を話す」に注目していたが、今は「自分の考え方を言い出す」に変更してきた。日本語能力が足りなくても、ほかの方法で補足するという考えがあって、ゼミの討論と普段のお喋りなどをするとき、私にとって、日本語のイメージは昔の「劣等感」から「劣等感と自信を矛盾に交えたり交替したり重なったりする」になってきた。ただし、大学院の四年漬け・訓練・保護をたどっていて、キャパスから離れると「日本語を話す」ということがまた劣等感だけのイメージに戻るかもしれない。

2007 年の春、初めての海外スタディツアーが韓国へ行った。ある日に韓国当地の日本語

学科の大学生と交流会があって、お互いに韓国と台湾のことについて交流していた、勿論、日本語で。M<sup>17</sup>から聞いた話で、ハングルと日本語の文法構造が似ていると知っていたが、その場に出ていた韓国の大学生の日本語能力が本当にびっくりするほどうまいと思うときに、だんだん心の中で小さな自信が退縮してきた。2007年の夏休みに、二つのスタディツアーに参加した。岡崎ツアーで当地の公開的な発表会が行う前夜、皆が順調に発表できるように一緒に徹夜してリハーサルしていたが、日本語の表現力がうまくいけないことをまた私にプレッシャーをかけていて、向こうの学生の中に認知的な差異が生まれて、ついで情緒を不安定になって失言してしまった。フィリピンツアーで当地の日本語学科の大学生と知り合った。相手の日本語がうまくてちょっとなまりがあるが、本人が自信を持って輝いている、ということを見て、もしかして自分の性格のせいで日本語が下手だと疑ってしまった。それからのスタディツアーも同じように、私を劣等感と自信を交える劣等感の間に行ったり来たりさせられてしまった。学校の先生がネイティブのように上達しないといけないと要求しないが、もし自分の考えをちゃんと伝えたいなら、「分かれる日本語表現力を持つ」ということがある程度の重要さがあると分かっていた。

「ネイティブのように日本語を話せたい」から「自分の考えを伝えるために、相手のことも考えてからうまく話せたい」まで、もし修士課程をたどらないなら、この両者の差異と変化を体験できるチャンスがないかもしれない。

日本語の勉強経由が終わってから、次には前述の勉強経由と本文の関係を説明する。

まず前述にはもうはっきり問題化しているところ——日本語の表現力がうまくないのに、なぜ日本語で書くかというところから説明する。

修士課程には別に日本語で書いて発表しないと決まりがない。それと「多元文化交流」の主旨に基づいて学科の基本理念とカリキュラムを設定することとかかわっている。言語を限らずに、たくさんの領域と接触したり、続けて交流したりすることを学生に励ましている。先生によって「論文」の主張とほかの原因で生徒に中文とか日本語とか「論文」を書くことが要求することは勿論ないとは言えない。例えば、指導先生とか生徒とかに対して一番便利な言語、或いは主張を伝えたい対象のこと、将来日本へ進学し続けるかどうかなどを原因になる。私の場合には、確かに先生のことを先に考えていた。阿川はある程度の中文（日本語には漢字の部分があるので、「書ける」というのはちょっと微妙だが）をできるし、日本語で書けといわなかったし、でも中文よりやっぱり日本語のほうは阿川が読みやすいと思いながら、結局読み取れない可能性も高いと心配している。また、知識の権力からみれば、先生のほうが生徒の私より強いと思う、特に学術の分野で。生徒を尊重しつつ指導すると分かっているが、豊かな知識と経験を持つ先生に対して、生徒として私の姿勢と立場が低くて弱いのは事実だし、そういう上下関係から抜けたくても知識的な

---

<sup>17</sup> 本文の協力者。

幅広い差異が存在している。「論文」についてももし先生の指導をやすくして受けたいなら、日本語で書くことが一番直接のやり方だと思う。ただし、日本語で書くことが確かに困難がある。前述のように、私が日本語の勉強を工夫しなかったし、日本語の勉強に対する興味もほとんど失ったし、いくら勉強しても日本語能力と日本会社で勤めた経験から達成感を感じられなくて、そこから「怯え」を生んだ。1996年9月から2003年6月まで七年の日本語学科生徒の身分、二年の日本会社就職経験、二回の日本旅行、点数が低くてパスした日本語能力試験一級合格書、それらを持って逆に家族と友達に対して私の不真剣なんかみんなの期待に添わないように「怯え」を感じた。「論文」に対して知りたくて近づきたいのに近づきの勇気がないので遠くからみていただけで、また想像の中できっと日本語で書かないといけないイメージがあるので、助詞までもよく間違った私はどうやって完成できるかと思ってしまったが、この考えは今変わってきた。コミュニケーションと交流をする前提は正しくて完璧な言語ではなくて、「領域を越える」という実際的な行動で“越えていく”ということだったら、「完璧ではない」日本語で「論文」を書けないわけがないであろう。公開的な文章になっても、必ず完璧に表すとはいけないではないので、対話とコミュニケーションをとる方法として本文を書くときに、昔のように「怯え」と「劣等感」に束縛される必要がないと思う。先生に直されても、最後には元の形ではなくても、そういうことが「正しくない」日本語で書けない意味をしてないので、日本語で書くことが決まった。

ということで、やっと本文の形成を立てる段階に入っていた。

心の奥には「日本語」に対する葛藤が相当複雑で、その中に関係する「人間と物事」も相当ある。「ネイティブのような日本語」から「自分らしい日本語」まで、あるいは中文とか英語とか、私はどうしても「文字が進歩を表象する」「書くことが進歩を表現する」という「リテラシー」に対するミユスから脱出できない。しかし、脱出できるのか。また、どうやって脱出するのか。

### 三、 「論文」なんて性格を持っている——主流に対抗するやり方として

とびら、要旨、参考文献、添付と注を除いて、「論文」の本文が人の性格みたい、人によって違って、そして話し方と口調も違う。

ネットで「論文」の基本的なフォームと注意すべきことを検索するとき、「論文寫作學習網」というウェブ<sup>18</sup>でフォームについての紹介を読んでいた。その紹介によって、一般的に人文社会科学分野の大多数の「論文」はアメリカ心理学会が (American Psychological Association, 略称 APA) 作られたハンドブックによって書かれたということを知った。そのハンドブックは英語の「論文」が主な対象として作られたものだが、中には国内 (台湾) の学者に対して参考する価値があるところもたくさんあるようである。「本文は序論、研究方法、研究結果、結論と意見などを含めます。序論の部分には研究問題と背景、研究項目の定義、研究目的と仮説。研究方法には研究対象、研究道具、実施のプロセス。研究結果にはデータを分析した結果を誠に表すことで、結論と意見には先に研究の結果が仮説を支えるかどうかを提出してから、研究結果の一致性と差異性と先行文献によって結論を引き出して、また結論によって意見を作ります。その中で研究の制限について少しでも語られます」と林天佑教授 (2002) が APA フォーム第五バージョンについて書いた紹介文の中にそう書いていた。台湾の学位論文検索ネットで人文社会科学分野の「論文」を閲覧すると、ほとんど APA フォームによって書かれていた。

APA が初心者に迷わずに参照できるような「参考」を提供するためにハンドブックを出版したが、固いフォームが「論文」を審査する「標準」になるべきではない、特に「客観的」な審査過程をたてるためにその「標準」を作られた。

また、「論文」の書くことからみよう。作者が独立な思考力を持つかどうかを審査してから学位を認可するということによって『論文』の作者が「一人」だけである。もしそうではないと、審査・認可することが難しくなる。しかし、「一人」で全面的に配慮を加えることが困難があるので、たくさんの理論を出したり違う視点から検視したり、「一人」の能力ができないところを補足して、「一人」が起こしやすい弊害と不公平を減らしていくが、いくら補足しても直しても、やっぱり作者が「一人」だけである。いくらたくさんの観点を納得してから応用しても、やっぱり「一人」だけである。たくさんの資料を集めて、いろいろな意見を受け入れても、どんな資料を集めるとか誰にインタビューするとか、それは「一人」で決めたことである。どんな資料を引用するとか、どんなインタビューの内容を取材するとか、それでも「一人」で決めたことである。外部の要素 (指導先生の意見、便利性など) で「一人」の決定に影響をあたえるが、最後に決めて実施するのはやっぱり「一人」である。以上のことからみると、「論文」を書くことがとても個人的な

---

<sup>18</sup> 論文寫作學習網 (<http://ebada.ath.cx/index.jsp>)。

ことで、「単一性」の部分が代わられないように相当強烈だということを分かる。

そして「フォーム」ということをもう一度みよう。主観性の先導で「論文」を書くうちに、「フォーム」がまるでわざと非主観を求めるような枠と仮相のように、「標準化」「系統性」の包装で「論文」の主観性をごまかしようと企んでいる。

本文の中では「公平・客観」の重要性について述べなくて、そして本文を公平・客観のようにさせない。わざと少数になりたいとか独立独歩しようではなくて、一般の本文フォームを使ってみたら、表したい部分を順調に著せなかった。同じな服が誰でも似合うわけがないように、一般の本文フォームが私にとって似合わなかった。また、一般の本文フォームが「標準化」するような傾向があって、「客観」を結びつくと思案意図があるので、人文社会科学分野の学術研究の多様性という性質とふさわしくなくて、そして人文社会科学分野が関心する「人間性」も不足する。

目次に載せてあるのは本文の形成で、そこから私が本文を通して現した性格をみえる、つまりそれは私に一番似合う服だともいえる。そして、性格的な「論文」は原則を立ててあるか。言い換えれば、性格的な原則とは「論文」の中で「理論」のキャラクターみたいだということである。

人間は従来「一人」ではない。人間は社会から生み出す、社会からもらう、社会を組み立てるという意味のほかには、人間の中に「エス(id)」「自我(ego)」「超自我(superego)」が存在している、そしてお互いによく対話をする<sup>19</sup>。

「論文」に対して、私の「エス」がよく言うのは、「なぜしなければいけないの。貴方は情性が強い人だから、こんな真剣なことを無理にしなくてもいいよ」ということである。

同じときに、私の「超自我」がよく言うのは、「それは貴方が完成すべきことだよ。四年の時間と社会の資源を無駄になるのはいけない」ということである。

よく最後にしゃべる「自我」がよく言うのは、「それを主流に対抗する一つの方法としてやりなさい」ということである。

自分の性格は何なんだかよく分からないし、性格の中に他人の影響に与えられないと信じていないし、ただ「論文」に向き合うときに、「自我」から聞こえた話に基づいたほうが一番気持ちが良いと思う。

---

<sup>19</sup> フロイトによる精神分析学上の概念である。

#### 四、理論のキャラクター——その出演の場所はどこですか？

「論文」を書く時に先人が発表した理論をどう引用するか分からない場合には、どうしようか。

修士課程の修業前、「論文」に対してずっと距離を持っていて、「学術・研究」なんて私と全然関係がないと思った。修業し始めても、その感覚は同じように持っていて、自分が「理論のことなんか理解できない」と思っていた。やっと書き始めてから、また「論文」に対する社会的な「専門・専門・プロ」などのイメージ・目線から逃げ出したくなる。本文の協力者（M）と話すときにこのような気持ちがもっとはっきりしていた。協力者（M）と話をする間に、社会文化に基づいて研究・発表された学術理論がそこにあると気付けるが、偶には学術理論がお互いの距離を幅広くなる原因になさせる、或いは協力者（M）が話したことに対して誤解させられるなど、まるで私と協力者（M）の間に一つの「学術理論」と呼ばれるガラスの壁に遮られるように、協力者（M）に「専門的な分野」に分類されていた。恥かしいなのは、理論のことをよく分からない、或いはどんな程度で理論のことをよく分かつと言えるかということが分からない。

理論の引用は基本的に研究結果を検証して引き立てるために、そして理論に対してどのぐらい理解したとそこから個人の考えが生じるかどうかを示すために使う。ただし、理論から理解したことを個人の認知の中に溶け込めれば、別に文章の中で提起しなくても理論の足跡を見つけられる。

初心者の私が初めて「論文」を書くときに、理論なんか引用しないと「へん」ではないか。皆が引用するのに、なぜ私が引用しない、なぜ引用できない。個人的で理論を理解することが困難になるか、或いは根本的に「論文」を書く能力が持っていないか。他人の「論文」を参考するときに、よく理論がどう引用されるかを見ながら、それらの疑問を考えていた。この件について指導先生にも相談した。必ず引用しなくてもいい、自分の考えをちゃんと書けば自分なりの理論になると言われたが、やっぱり私が畏縮していて書けない。

ある日に「引用なし」のある「論文」<sup>20</sup>を見つけてから、やがて前向きの勇気を出した。途中で何度も自分が決めたことを疑っても、前人の試みとモデルがあるので、少なくとも安心してやりたいことをやっていく。

---

<sup>20</sup> 何婉如（2006）：〈迷路の大肚魚-一位女研究生的自我追尋之旅〉、国立交通大学教育研究所修士論文。

「自分をする」のはとてもわがままだったのである。他人と外部のことを気にせずに、自分の頭をぶつけて傷つけるまで止まらない。ただし、「自分をする」ということが勇気を持たないといけない、いくら頑固で独りよがり、愚かで無知などの責めを招いてもかまわない。

確かに理論の引用を勉強して試みる努力を足りない分かっているが、それでまったく試さないということの意味しない。ただなぜ試さないといけないか。なぜ理論と引用を頑張って勉強して使わないといけないか。

読者の貴方は、「理論」とは何と思うのか。

## ● 何を書く、何を書かない

「論文」の中で何を書く、何を書かないかと研究の目的とは深く関係がある。これからの話は本文の研究目的と関係がないように見えるが、本文と全然関係ないかということそうではない。

2006年6月に東海大学に入学してから2007年6月まで、ゼミと同級生たちとの交流に夢中になって、「論文」に関しては全然考えなかった；2007年9月に、とても簡単な研究計画書を提出して「論文」の指導先生を決めた後から2008年6月まで、「山」プロジェクトに関することに夢中になって、まったく研究計画のことを直していなかった；2008年9月から12月まで、この間に「論文」のことから逃げたい気持ちに囲まれるので、代わりに学部の助手を短期に代理して、偶に「論文」のミーティングに参加するようになった；2009年1月に、卒業したいなら「論文」を書かないといけないことが事実だと認めて、「論文」に重点を置こうということを決心した；2009年2月に、ご主人の急死でとてもショックを受けたH<sup>21</sup>のことを心配せざるを得ないので、「論文」のことを考えられなくて、「論文」より大切・関心すべきことがいっぱいあると思って「論文」をやめようかという考えまでも萌えていた；2009年3月に、友人に任せて迷子になってしまったペットの犬を探すために、また「論文」のことを傍に置いた；2009年5月に、実家から台中に戻った数日後、大好きな実家の犬が動物病院の医療ミスで急死してしまった。まさかあいつを予防注射につれていった私のせいではないかと後悔していて、「論文」なんて考える余地はなかった；2009年6月に、阿川の許可と自分の焦りで中間発表をやったが、これからどう突き進んでいくかよく分からなかった；2009年8月に、長い間付き合ってくれるペットの猫が大変な病気にかかって膨大する医療費を必要になってしまったので、休学してそのお金を稼ごうかという考えが頭に浮かんだ；2009年10月と11月、実家に帰って本文の協力者とインタビューして……。以上、本文を書く間の重要な経緯である。

読者にとって、前述の経緯の話は本文とまったく関係がないと言われるだろうが、作者の私にとって関係があると思って書き出した。つまり書くときに作者が相当の権力と権利——解釈権と言論の自由を持つと示したい。

「論文」で一人の「個人史」を全て記録することができなくて、ある部分に集中して述べるように研究の目的と範囲を設定して、取材したデータの中から繋がりがあ部分を選ぶのはよくある。個人史を書くときに、作者が「何を書く、何を書かない、どう書く」という立場と意図は個人史のアピールに対してもっとも有力な影響である。もちろん訪問される側が持っている立場と意図を作者の書き出しに影響を与えるが、最後にはその意図が元のように述べられなくて、作者によって分解されたり再現されたりした断片的になる。

---

<sup>21</sup> 技術学院時代の同級生及び親友。

これより分かるのは書くことが権力を持つ行動で、「内容の並び、キャラクター設定、言語と文字の使用」などの範囲を作者が支配できるということである。書き出すかどうかによって書くことは作者が社会に自分の権力と権利を見せるために一番良い空間である。しかし、「論文」の作者が一人しかないの特殊性で、訪問される側の権力と権利を侵害・遮断・丸呑みにしないように見せる方法はお互いの権益を守って共同で書くことは適用ではないので、訪問される側に何度も繰り返して内容を検証させることによって、その状況が起きる可能性を減少していくということである。

ということで、本文には協力者と確認することによって書き出すかどうかの部分詳しく計算して、作者と訪問された側の両方権益を守る。しかし、いくら言っても、いったい「論文」はどう書くか。特にここ（東海日文）には『論文』の書き方と「研究方法」に関する課程がない状態で、どう書くか。

初稿を完成した後、中文バージョンの電子ファイルを M にメールした。どこかに問題があると確認してほしい、特に M に関するところ。仕事で大変忙しい M がすぐ返事をしなかった。半月ぐらいに経って、M から読んだといった電話があった。M の話によって私はほとんど彼女が言ったこと及び言いたいことを書き出して、不適切な引用がないというのである。また、まさか私がこんなに覚えるか、たくさんの細かいことでもよく覚えて、とても彼女に驚かせたといった。

M の返事を聞いて、わざわざ時間を作って読んでくれたことに対してとても感謝したが、私を励まして支えてくれるためにプラスの感銘しか言わなかったと心配した。それと同時に迷ってきたのは、本文の中に私に言及された「人々」にも本文を読ませて、そして本文の中で彼らに関することの引用について同意するかどうかを確認したほうがいいのか、ということである。

## ● 「論文の書き方・研究方法」のクラスがない——先行研究から学ぶ

大学出身ではない私は修士課程を始めるときに、課程の中に「論文の書き方・研究方法」がないことは自分とどんな関係性があるかどうかについてよく分からなかった。同級生から聞いてから、「論文」を書くときに影響を与えることが知っていた。何について書こうかと考えて悩んでいるときに、やっと「論文」を書くということがとても深い学問だと了解した。同級生と勉強会を作って一緒に頑張ってお互いの意見を交換してから「論文の書き方・研究方法」について少しずつ概念があるが、研究方向をはっきりしていなくてまとめられないの原因で、国内の「論文」を参考しようと思って探し始めた。発表された「論文」を参考するのは短い道だと思うが、研究方向をはっきりしていない私は方向なしのハエみたい、天の川のようなたくさんの「論文」の中で突き進んで探して、たくさんの時間をかかってしまった。

やがて参考できる文章を探すと、逆にその課程を開設しないことに対して感謝したい気持ちになってきた。

もし「論文」の書き方に関する課程を開設するなら、たぶん今のように「話したいことを話している」というかたちではなくて、一般的な「論文」のフォームを使って書いて、内容までも元々「言いたい話」ではなくなっただろう。最悪の場合は、「論文」のことを徹底的に放棄してしまうかもしれない。

一般的な「論文」のフォームがおかしいという意味ではなくて、ただ私に似合わないだけである。最初から「やらないと分からない」という気持ちで、何度も一般的なフォームと堅い口調を使って書き始めたが、やっぱり普段の話し方＝話し言葉から抜けられなくて放棄したくなった。続けて書けなくなるし、書き出した文章が私から書いた言葉ではなくなるし、修正することによって言いたい話が言いたくない話になるし。もちろん個人の文章についての造詣が深いかどうかに関わると分かっているが、「言いたいこと」はどうしても言いたい。しかし、自信がない人なので、一人で目標に向けて行き難いタイプである。「ストーリーを語る」のように話し言葉で「論文」を書くことが指導先生の支えをもらっても、二の足を踏むことである。そのとき、よく阿川に「おしりが重いよね、さっさと始めてよ」といわれた。「論文」のことから受けたストレスなんか知っているが、阿川が知らないのはどうして私が動いていないかの理由である。外面から見ると全然動いていないが、実は理想的なやり方を探せないのも、とても迷う状態になっていた。何度も自分なりの話し方で「論文」を書くことをやめようと自分に説得したいが、説得してからも一つの迷いに巻き込まされて、また先行研究を見つけないので、だんだん憂鬱になってしまった。根拠として（論点を批判するか、引用するか）先行研究が必要なもので、探さなければいけない。中間発表を終わってから、改めて先行研究を探すある日に、ネットで

「主体性」についての関連サイトを閲覧するとき、意外にずっと探している自信を与える根拠を見つけた。見つけたと思う瞬間に、一年ぶりの青空がやっと曇ばかりの心に顔を出した。

何粵東の『眾聲喧嘩與獨白：敘說學校生活故事』から、一般的な「論文」のフォームから抜け出すことを教えてもらった；張佩涵の『鹹魚復活記－從「勞動階級大學生求學經驗的探究」變形到「我的生命敘說」』から話し言葉でも「論文」を書けることを教えてもらった；何婉如の『迷路的大肚魚－一位女性研究生的自我追尋之旅』は理論を引用しなくても「論文」になることを分かせてくれた；顔如禎の『裁縫師の女兒－以"乖"做為抗拒保護色的小學老師』から人文社会学科の「論文」を「書く」だけではなくて、踊りとドキュメンタリーを加えてアピールすることを教えてもらった；應用心理研究紀要第25期の研究テーマ「生命書寫與心理健康」からナラティブ・アナリシス (Narrative Analysis) についての基本的な認識を教えてもらった。

実は前述の文章を「完全に」読み終わったのは一篇でもない。初稿の後に読んだ二つの文章も同じだったのである。その二つの文章は賴誠斌の博士論文『自我敘說探究與生命轉化－發生在蘆荻社大的學習故事』で、もう一つは成虹飛先生に「論文」敘說分享會の参加に誘われたときに、先生からのメールの添付ファイルで参考してもらった蔡馨儀の修士論文第九章「豬的漫遊：走過心中所行之路」(『當豬遇見會計：敘說一位會計系學生轉化的歷程』という論文の中に載せてある)。彼らの文章によって、確かに見聞が広められて自信も与えられたが、文章をよく読んで味わう勇気がない。気をつけないうちに、彼らのライフストーリーに陥って、そして彼らのストーリーを書き写してしまうと恐れた。また、彼らの文章を読めば読むほど私が慌てる。彼らのように文章を書けない、自分の書き方がよくない、書き出したことが少ない、記録を間に合わなくてたくさんの思いを失う、全てのことがもう間に合わない、ということ恐れる。

今でも、前述のように恐れながら自分の「論文」を読み直している。

ただし、その青空が日本語学科の上の空に現れるではなかった。前に言った先行研究がほとんど教育、心理分野の「論文」だけで、それらの「論文」のキーワードによって延伸して見つけたのもあまり日本語学科と関係がない「論文」である。そのときの私は不安だと感じたが、ちょっと安心できるのは修業している修士課程が「文法、文学、商業」の分野を中心に注目している学科ではないことである。いろいろな分野に関心して、多元文化交流を中心に教学している大学院だから、「分野越え」というやり方を受けれると思う。

でも、それは重要ではないことである。重要なのは、ずっと探している方法が学術的な

言い方だったら「自分を語る（中文：自我敘説<sup>22</sup>）」ということだということをやっと分かった。話し言葉で言い換えれば「自分のライフ・ストーリーを語る」ということである。

審査に提出しなければいけない最近でも、同級生との間に「学科には『論文写作／研究方法』というクラスを開設すべきかどうか」ということについて違う意見を持っている。J にとって、そのクラスが必要だと思う理由は、それによって「論文」の作者に研究方向をきちんと整理できる。私たちのように遠道に沿ってやっぱり見つけなくて或いはミスするというふうにならない。そして、J の考え方は、そのクラスによって「論文」を必ず囲まれるではないので、方向を見つけると、関係がある物事をきつとその方向の道に出てくるというのである。

J に対して、私はこのクラスがあるかどうかと関係がないと思う。根本的な問題はやっぱり私たちの頑張りと入れた力が足りないと関係があると思う。もし必要と気付いたら、私たちはもっと早くて全力を尽くしてそのクラスの開きを努力する、或いは外へ行って援助を求める（例えばほかの学科へ行って「論文写作／研究方法」のクラスをとる）。しかし、最後までやっぱりそうやってなかった。学科のモルモットにされると思うので、私たちは何もしないまま待っているだけかもしれない。こういう状況に会ったことがないので、私たちはどうしようも分からなくて、てんてこ舞いさせられたかもしれない。向こうは「学校」「先生」なので、私たちは大胆になってやる勇気がなくなったかもしれない。

しかし、いくら討論しても、私たちは誰でも「論文写作／研究方法」のクラスをとったことがないので、各自には考えが持っている。ということで、将来機会があればそのクラスをとってみたい。いったい「論文写作／研究方法」のクラスとは何だかを見に行ってから、また続けてこの話題を考えようと思う。

---

<sup>22</sup> 2010年3月9日に全国修士及び博士論文網站 (<http://etds.ncl.edu.tw/theabs/index.html>) のページで「自我敘説」をキーワードとして全面的に捜査して出てきた資料は398件で、また「自我敘説」をキーワードとして「キーワード」というブランクを捜査して出てきた資料は125件である。捜査の結果によって表れたのは現在台湾で人文社会関係の学術論文がまだ多くないという状況を分かれる。ただし、民国80年代から今まで年々上昇する傾向があるようである。

## ● 自分のライフ・ストーリーを語る：私の研究方法

この小節を元々は省略したかった。研究方法を知ってからその方法を使って本文を書いたのではなくて、先に頭の中で想像があってから「その方法」を見つけたからである。しかし、本当にこの小節を省略したら、本文が「論文」だと認められるかと心配するので省略しなかった。

「自分を語る－自分のライフ・ストーリーを語る」ということに対して最初の発想は、学科の海外交流スタディツアーと「山」プロジェクト<sup>23</sup>の活動に参加するときによく他人のライフストーリーを聞くことからである。海外交流スタディツアーの中で出会ったストーリーの話者の大多数が現代社会の我々と違う体験を持っているので、彼ら・彼女らのストーリーを聞きに行った。「山」プロジェクトで出会ったストーリーの話者も同じように我々と違う体験を持っていて、海外の話者と違うところは彼ら・彼女らを接触する機会が頻繁に多くて、親しい関係と近づく感覚を立てやすく維持しやすいというところである。しかし、「山」の話者と一緒に同じの土地で暮らしているが、私と彼ら・彼女らの間に存在している言語と文化のギャップが私と海外の話者の間にあるギャップより少ないとはいえない。ストーリーを聞くことによってそのギャップがだんだん減っていく可能性があると感じていた。その経験についての話と経験の伝達は聞き側が語り側の感覚を百パーセント理解するのはありえないが、このようなプロセスが「経験の想像を置換する」というスイッチを開く。という意味は聞き側が自分を語り側が語ったストーリーのコンテキストに入れて、語り側が経験した事件を想像する—簡単に言うと想像力を使って想像する：もし私なら、そのときにどう思うか、どんな感覚があるか、ということである。想像の他人経験と現実の自分の間に、ある疑問を意識した：想像するのは個人の自由だが、現場にいない第三者に伝えるなら、他人のストーリーを伝えるときに、「私」は媒介になる。転換のメカニズム——もし機械だったら、設定された機械だったら、転換の過程には問題が起きない——問題なのは、私は機械ではなくて、思想がある人間で、社会から学ぶとか社会に学ばれるとか、社会から影響を受けるとか社会にも影響を与えるとかということである。ストーリーを聞き始める時に想像力によって経験しない空白を補足して不可能の時空を越えることができるのに、ありのままに他人のストーリーを伝えるのは言うまでもなく難しいことである。また、転換したものを読者に渡したら、第三者の立場から読む読者たちはどう解釈するか、ということをお心配する私は本文の中で自分以外の他人のことを著すことに対して嫌な気持ちになって拒否し始めた。

その後ゆっくり考えて、ある方法を見つけた。私が気になること、「プライバシー」を「公開・公共」に転換する間に気がかりになることを排除する方法——作者が他人のストーリーを語る時にストーリーの外に自分を隠さないということである。転換の媒介とし

<sup>23</sup> 東海大学日文系大学院のプロジェクトの一つである。

て作者は個人の立場を持つことを避けられないので、「作者自身の経験を語る」に基づいて「伝えるメカニズム」を立てれば、作者が隠されなくて自分のストーリー、経験と生命の経由を述べることになる。他人との出会い及び他人のストーリーを聞く経験が作者のライフの一部に内面化して、作者が「内面化した他人のストーリーに対する理解」を語るときに、個人の立場と視点をはっきり「現れる」ので、中立の客観的な話者のふりをするではないようになる。ということで、私は自分のストーリー、経験と生命の経由を語り始めるから、自分のストーリーを語ることによって他人のストーリーを読んでいく。

「私的領域」から「公的領域」へというのは、公開的な空間で未知の人たちに自分の／私有のストーリーを展示することで、とても冒険的な実践である。「公開」といっても、「文字」によって暗号化されて、「リテラシー」を持つ人だけ読める、そして意義を生産できる。もし複雑な暗号化というプロセスを除いて、語り方とか映像化するとか表れれば、もっと未知の人たちを入れる。そして、この実践も「公開」の意味にもっと相応しくなると考える。

ただし、「公開」という行為を選んだ理由は何だか。「公開」という行為を通して何が得られると期待するか。「公的」と「私的」の間にはどう限界を区分するのか。また、はっきりと区分できるのか。

## ● 「変わっている」ところに辿り着いた：大学院で過ごした日々

### 一、外から内に入った

兄が大学を受けたときに、父が兄にこう言った：「陳の子孫の中に今まで大学を受けた人がまだいないのよ、お前は一番目なので、よく勉強しなさい、分かったか。」そばにいる私は兄のことがすごいと思った。当時の私はまもなく中学三年生になって、毎日のテストで勉強のことに對してとても嫌いで厭き厭きしていたのに、未来のことに對して憧れをいっぱい持っていた。また、兄と話すときに父が喜びと安心に溢れる表情を見た。父の兄弟に比べるとわが家はいやいやながら普通の家庭だと言える。生活は貧乏とはいえないが、両親が節約した上は、子供たちも玩具を買ってとあまり要求しなかった。しかし、教育方面の費用たとえば、両親がいつもできるだけ提供する。例えば、私（水彩画）、兄（パソコン）、姉（ピアノ）と弟（テコンドー）、別々の技を習った。兄がパソコンの操作を習う時に、家で兄と家族に使えるように両親がパソコンを買った。姉がピアノを習う時に、家で弾けるように両親が中古の堅型ピアノを買った。弟がテコンドーを習う時に、両親が必要な設備と練習の道具を買った。私が水彩画を習う時に、家で描けるように両親が絵の具と絵筆を買った。また、学校の教材には、もし連絡帳に写すように文房具などが必要であれば、両親も節約しなくて、絶対買ってきて私たちに授業まで持って行かせた。そういうわけで、私たちにいい教育を与えるように両親がすごく節約して暮らすことをよく分かっていて、そして、父のその表情も、よく見ていた。

義務教育を受けて高校に進学する年代（1987年から1996年）には、社会で普遍的に「大学に進学すると一頭地を抜く」という雰囲気や期待が溢れていた。親が子供に対する期待は「大学に受かる」ということを目標にして、中学生になる前、まだ小学生なのに、子供を英語とか作文とかの塾に行かせていた。中学校に入ると、英語と作文の以外に数学とか物理とかの塾をより一層増えていた。子供を塾に行かせるのはまるで風潮のようになっていて、すべて子供が順調に大学に受かるためだったのである。もし受けないなら、予備校に行かせてまた来年やりなおすように期待を持ち続けていた。そのような雰囲気の中で、私も行かせてくれた。最初は英語と数学の塾に行き、中学校二年生になった時、もう塾に行くことが厭きたので、いくら成績が悪くても、物理の塾に行きたくなかった。だんだん最後には、成績がどんなに悪くてももう塾に行きたくなかった。高校の進学テストの点数が良くないが悪いでもないの、順調に実家の地方で唯一の女子高校を受けた。進度の早いクラスに入った私は、大学の進学テストに対するストレスに負けたのではなくて、つまらない高校生活に耐えられないのでもなくて、担任先生の不適切の指導に對して不満を貯めていたので、我慢できずに高校をやめて親が長い間に用意してくれた「進学ロード」を断ち切ってしまった。

そして専門学校に入った私は卒業の直前に、推薦入学申請で技術学院に受かるかどうかと心配だったので、大学の転校試験を申し込んだ。推薦入学申請の結果を先に分かって、合格したと知っていたから、大学の転校試験に参加しなくても大丈夫だと思うが、父の話を聞いてから、やっぱり参加しに行った。「行ってみて、大学に入ればいいことではないか」と父が言った。そういうことを聞いてから、父が私には大学の学歴を持ってほしいと望んでいることが分かった。父の考えの中では、やっぱり大学の学歴を持ったほうが就職しやすいと思っているのに反して、私は技術学院のほうを選んだ。

2000年ぐらい、その進学のリームが「大学」から「大学院」或いは「海外留学」になってきた。兄が大学を卒業した後に大学院に進学したということが再び父に喜ばせた。その頃まだ専門学校にいる私は「海外留学」の選択肢が選びにくいと知っているの、国内で進学することを選んでた。技術学院を卒業の直前に、また「留学」という夢を持っていたが、家の経済が許さないの、まだ就職しに行きたくない私は大学院のリームに乗るために、同級生と一緒に情報メディアの予備校に行った。2002年の前後、情報メディア学科が大ヒットになって、ジャーナリスト、ニュースキャスター、監督などメディア関係の仕事が鮮やかに明るいとみえて、すごく引き付けられていた。特にジャーナリストの仕事であちこち取材しに行く特性がとても面白そうである。その時に予備校で初めて人文社会科学に接触して批判意識を啓発されたが、残念なのは短い時間で情報メディアの課程を完全に消化しないうちに、大学院の入学試験がもう終わってしまったことだ。無理やり試験に参加した結果は落ちたが、その間に何ももらえないではなかった。しかし、その時に悔しかった気持ちが大きかったので、いったい何を学んだか意識していなかった。

実家に帰ってからのもの、すぐには学校の生活に戻れないとしても自分の力によってお金を稼いで「留学の夢」を叶えるように頑張ろうと決めた。初めての就職で台中に戻った。ただ二年間働くだけで、予想より早めに学校の生活に戻った。それはお金を十分に儲けたでもないし、海外へ留学しに行くこと決まったでもないし、ただ元の計画以外のことが起こったのである。しかし、今度の父はいつものように支えをくれるのではなくて、逆に仕事に専念したほうがいいじゃないかと私にアドバイスした。「女の子は学歴が高すぎると良くないじゃないか」と父が言った。その話を聞くと、父の私に対する期待は「大学の学歴を持つ<sup>24</sup>」から「良い仕事を勤めて、いい人と結婚する」に変わったんだと思った。

そう言われても放棄したくなかった。当時の仕事の給料が結構高くても、試験に参加する前に合格できると思わなくても、下手な日本語で卒業までいけないかもしれないと思っても、たくさんのがあってもこのチャンスを放棄したくなかった。東海大学の日本語文学科のカリキュラムが面白そうだと思って、ずいぶん引き付けられた。そして、そうするとやっと正統的ではないと見なされた職業教育システムから正統的だと見なされた高等教育システムに入れる。台湾では、高等教育システムが正統だと思なされて、いくら操作

---

<sup>24</sup> 台湾では技術学院の学歴は大学の学歴に相当する。

の方面では職業教育システムのほうが経験に富むとはいうものの、理論の研究というよりは高等教育システムのほうが深い。そんな背景で、操作の方面であまりいい成績をとっていない私は大学院のチケットをもらったときに、非常にびくびくしながらそれを大切にしていた。今のところチケットを握るからには、入らないわけがないので放棄できなかった。

ということで、チケットを握っている私は、慎重に大学院のドアに横になっている敷居を跨いでいた。

## 二、変わっている「日本語文学系修士課程」

最初に入るに際しては、やっぱりいろいろなことにより一層驚いた。

### (一) 日本語文学系修士課程ではない———多元文化交流大学院

先生のところから聞いた、元々修士課程の部分が「多元文化交流大学院」という名称を改めてほしいが、教育部に対して新しい学科の名称は新しい学科を設立することと等しいので、元の日本語学科から独立しないといけない、もちろん教学の資源も独立すべきである。しかし学校のほうには経費が足りない上で、最後やがて日本語文学科に付属して、師資と教学資源を共用して、名称は「日本語文学科修士課程」になるしかできなかった。

これは学科の悲しさである。学校が資源を与えることに対してけちくさいおかげで、外から評価されるときに学科は現有の名称に縛られている。継続を求めるために、学科の表現はできるだけ外の「標準」に相応しいと出張しなければいけない。

その悲しさは、いつ無くなるのか。

また、大学院を設立するためにほかのと同じではなくなるではないことを説明する。2000年から学部のカリキュラムが日本語教育を中心に教えるではなくなって（重要の基礎課程として設定された）、独立の思考能力を必要な科目を増えながら、思考、知識、技能を三つの柱として教育目標を改めていた。学部の教育理念<sup>25</sup>を継続と実用する、また交流の人材を育てることが実践できるために、2006年に修士課程を成立して、もっと目線を広げて「台・日」を注目する角度から「台・日を中心として東アジア地区」と日本関係の研究まで拡大して、もっと広く歴史観を持って、生徒に台日関係を中心に東アジア地区で越境する交流（Trans-Regional Interaction）の能力を持たせるように育てる。カリキュラムでは「言語接触」「表象文化交流」「社会コミュニケーション」という三つの角度で生徒が「越境する交流」の能力を企画・実践するように生徒を育てる。基礎的な共同必修を基づいて台日の関係を中心とする大まかに了解してから、各自の関心によって「台日言語接触領域」「台日表象文化交流領域」「台日社会コミュニケーション領域」という違う領域のプロジェクトを修業する。そして学習したことを実行するように、実際に「越境する交流」の活動

---

<sup>25</sup> 学生が「自省する」「独立に批判的な思考を行う」「問題を見つけてから解決する」などの能力を持てるように育てて、「台日多元文化のコミュニケーションと交流」ということをよくできる人材を作成すると期待している。

を行ったり、各地の人たちに出会ったり、自らで実際に感じたりして、生徒が「鋭くて観察できる目」と「独立に思考できる脳」を持たせると同時に、「多感的な心」も持たせるように期待している<sup>26</sup>。

このような教学理念とカリキュラムはほかの日本語関係の大学院に比べるとずいぶん違うが、私が行くと決めた主な原因である。（自分の日本語能力に対して）怖がってわくわくする気持ちを持ちながら授業に出ていた。だんだん、その怖がる部分を消えてしまっ、代わりにちゃんと自分の考え方を言い出す勇気を生じて気前が良くなって、他人の立場次第で考えを変わるとか反省するとかになってきた。個人にとって、日本語はだんだん縛りではなくなって、もっと交通の機会をもたらず橋のようになっていて、そして自分の日本語が役に立てる時もあるんだという考え方に変わってきた。例えば、二人の間に交通の橋を建てられる原因は私が日本語を話せるということではなくて、他人が助けてもらいたい時にすぐ気付ける繊細な心があるからだったのである。繊細な心があるからこそ、私の日本語が役に立てる時があるんだのである。

つまり、ここで私の下手の日本語能力に対して特殊な自信を見つけたと言い換えられる。学科の多元文化コミュニケーションと交流の軸に従って、もし「下手な日本語」を一種の言語・文化として見なされれば、それは私を代表できる言語・文化の一部だということを知っていた。多元文化を混雑・融合・排除・競争している現代社会の中で、言語・文化は主流・中心と非主流・周辺というように分けられるだけで、「純粋」「正確」「単一」という絶対性を存在していない、ということが言語の方面では「多元文化交流」とは良い多言語の基礎を備えたとお互いの交流に対して良い影響を与えるが、「下手な日本語」「中文と日本語を雑ざる」「単一の言語だけできる」「黙っている」などの状況が起こる人をコミュニケーションと交流の会場に入ること断るという意味ではない、ただし会場に入ると順調に他人とうまく交流するかどうかは保証できないということである。

以前の私は日本語についていつも劣等感だけ感じて、根本的に「日本語」から出発して越境によって起こった交流に関する問題を考えると思わなかった。ずっと思っていたのは日本語が上達になりたい、日本人のように上達になりたいということが日本語に対して唯一の目標だったのである。日本人のようにうまく話せれば、コミュニケーション不良のことが起こらないと思っていた。そういう考えから日本へ留学したくなった。日本へ留学すると日本人のように日本語がぺらぺらになって、なまりがなくなると思っていた。その時に分からないのは「日本語が上手になる」ということよりもっとたくさんの日本語と関係があることが注目すべきだということである。

小さい時に父に責められると、何も解釈しないまま躰けられるのは嫌だし、私なりの考え方や理由があったし、父が言ったとおりではないと思うので、いつも言いたいことをい

---

<sup>26</sup> 東海大学日本語文学系の公式サイト (<http://www2.thu.edu.tw/~japan/>) に参照した。

っぱい話して、「口答えする」と思われても言い出さないといけないように言い返した。相手が祖父母だとしても、非難される覚えがないところがあれば、絶対彼らの考えに反発する。事実は彼らが言ったとおりではないのに、どうして黙っていて目上の人を尊重するふりをして「つらい思い」を抑えないといけないか。そしてその時の自分が「口答えした」と全然思わなかった。目上の人を尊重しないではないし、反抗したいとか処罰を逃げたいとかのために「しらばくれる」ではないし、ただ考えていることを言い出してみるだけだったのである。今のところに思い出すと、それら「口答えした」といわれたのはただ父と祖父母とコミュニケーションをやることだけだったのである。青春期の私が親不孝と反逆だと父がずっとそう思っているが、子供の中で今よく彼とおしゃべりするのは私だと父がそういった。短気な祖母が同じような話も言ったらしいと父から聞いた。

日本の文化、文学、歴史、経済、言語などに比べると、台・日を中心に東アジアの「越境による起こったコミュニケーションに関する問題」を延伸して注目するほうは日本語に関する大学院に対する私の期待通りに運ばせる。特に日本語で韓国人、日系ブラジル人、フィリピン人と台湾原住民族のお年寄りと交流するチャンスがある、ということが昔には全然思わなかった。

ここ(東海日文)で見たたくさんの風景はとても面白い。その面白さでここから離れたくなる、その面白さでもっとたくさんの風景を見に行きたくなる。ここから離れてから、二度とそれらの風景が見えなくなる、それらの風景の前に立ってよく風景を見てから考える機会がなくなると恐れる。或いは、もう離れるときだか。

## (二) 私と「先生」の距離

小さいから「先生」という人と遥かな距離を守っていた。幼稚園時代のことが思い出せないが、小学校一年生から技術学院を卒業した時まで、いくら親切で私のことに興味を持って、「先生」という人に対して怖がる気持ちを持っていた。私にとって、「先生」とは威厳と知識が持つ階級にいる人間で、「先生」がいったことを反抗できなくて、「先生」を正視できないとずっと思うので、学校でいつもいい子にしていた。授業の時に先生に朗読とか質問を答えるとかを呼ばれることが怖がっているのは、うまくいかないとすぐ「先生」に叱れるとか処罰するとかということだったのである。高校一年生のとき、先生にクラス全員の目の前に適当ではない話で説教されて恥をかかせられても、溢れている怒りと悔しさを我慢していて、家に帰ったら父に文句を言った。そして、「ちゃんと説明してくれる」ということで先生と向き合って先生の誤りを指摘できなくて、高校をやめることでその先生の長期的な適当ではない教育行為から離れたただけだったのである。

大学院を受かったとたん、日本語が下手だということを出した以外、もう一つのことを心配した。それは「論文」を書くときに「先生」と近い距離で一对一のミーティングだったのである。積極的に「先生」に近づいてお互いの距離を縮むことがない私は、将来の「先生」と一緒に「論文」について話すことが想像できなかった。ここに入ったら、あまり会っていない先生を除いて、意外に大多数の先生に対して気楽な気持ちで一緒におしゃべりしたり食事をしたりすることができるようになっていて、或いは先生に冗談を言うとか一对一でもかまわなくなってきた。

生徒が少ないことによって先生と接触する比率が高くなるので、近い距離で先生と接触することに慣れないといけませんが、先生に対して尊重の態度がそのままにしている、「先生」とは威厳と知識の代表だという考え方が変わっていない、ただしもう反抗できなくて正視できない階級にいる人間ではないと思う。先生に近づくと、先生の周りにある光が自分で発散するのではなくて社会から置かれたのだと分かっていた。距離を縮むことによって、もっとはっきり先生を観察できるし、先生の一般的な人間の姿を見る機会があった。

しかし、分からないのはもし将来ほかの学校に行くチャンスがあるなら、今のように「先生」と近い距離を守るかどうか分からないということである。ある時には環境の雰囲気によって人を環境に融け込むが、環境から人を排除することもあるんだだったのである。

初稿を読んだ阿川がそういった、「最初のところにはとても不親切でうっとりされないので、読者が附いて来られるために速く行ってしまった部分をちょっとスピードを落として直したほうがいい」。

実はそんなところを元々さっと通したいところだったのである。そんなところで足並みのスピードを落として、ちゃんと止まって見たくないところだったのである。止まりたくなくて、止まるつもりでもなかった(なぜかどういとう、そんなところが「複雑」だと知っているから、ほかの近道で通した)。しかし、阿川によって直したほうがいいと言ってから、わけ分からないうちに私が説得されてしまった。その後、読者の気持ちを考えながら書き直した(元々読者の気持ちを考えずに書いてしまったが)。

しかしどうしてそんなに簡単に説得されたのか。阿川が私の読者になったからか。阿川が指導先生だからか。或いはほとんど何が言っていると分かってくれる阿川のことを信用するのか。ほとんど分かってくれるのに、私のほうは時々先生のことを分からなくなると、それはとてもおかしいことである。

### (三) 私の海外交流小史：大韓民国・日本・フィリピン

#### 1、大韓民国での経験

大韓民国での経験が二回あって、一年ぶりで二回目に行った。いつものように初めての経験が深い印象を残した。その時入学したばかりで、ちょっとだけ「上手な日本語」という唯一の目標から離れて「下手な日本語」に対する自信をあまり持っていない上で、初めて韓国へ行くことは深い印象を残すより言葉でもならないショックを受けるほうが説明すべきだが、そのショックは「言語」の方面から受けられたのではなくて、主に「交流の意義を理解できないのがっかりした」という方面からである。

晩ご飯に居酒屋で韓国側の大学生と一緒にわいわい騒いで食事したりお喋りしたりしているうちに、日本語に対する劣等感と内向的な性格で、頭の中でそこから逃げたいという考えばかりいるところに、初めての人と楽しくてお喋りするのに長い間の知り合いに対してとても冷たいという場面をみていた瞬間、そのように衝突を納得できなかった。交流とは何のものだか、短くの虚偽だか、即興的な演技だか、なぜ周りの人に配慮するより重要なのかなどの疑問を浮かんできた。それらの疑問に加えて前述の劣等感と違和感を感じて、頭が忽ちに塞げた私は崩れたしか出口を見つけないので、思ったとおりに先に現場から逃げた。旅館に帰る電車の上で、崩れた気持ちをまだ続けていた。夜の感想会まで、やっと「交流」ということはある時に政治性を満ちている行為だと分かってきた。

もしイベントに参加しないと、「交流」の意義を理解するとはありえないことを分かっていた、それからの海外スタディツアーの中で、自分の日本語が正しいかどうかのことを気にしないように頑張っていた。二回目の韓国ツアーによって「交流」とは口頭の交通だけではなくて、時々には共同で活動したり一緒に何をしたりすることを含めて「交流」だということを見つけたのである。

二回目の韓国ツアーで二回目の「ナヌムの家<sup>27</sup>」へ行った。今度はそこで泊まったりご飯を作ったり掃除をしたりしていた。一回目にはその資料館に見学したりお婆さんのお話を聞いたりする経験に比べると、お婆さんとお喋りしたりお婆さんの歌を聴いたりお婆さんに肩をマッサージしてあげたり公共地域を掃除したりする二回目のほうは親しくてリアリティーに富むと思って、お婆さんに近づいたと感じた。私にとって、このようは「交流」は融け込みやすいし温かいと思う。

---

<sup>27</sup> 英語に訳すと **House of Sharing** という意味で、太平洋戦争末期に強制連行で戦時慰安婦になった生存者（私に「お婆さん」と呼ばれる方）が共同的に生活している場所、そして資料館も設立してある場所である。1992年に成立し始めて、1995年に現在大韓民国京畿道広州市内のところに引っ越した（参考資料：「ナヌムの家」日本語サイト <http://www.nanum.org/jp/index.html>）。

## 2、日本・沖縄での経験

この学校に入る前に、観光客として二回日本へ旅行しに行った。そして、二回の経験には七年ぶりであった。初めてには専門学校時代に先生と同級生と一緒に日本の姉妹校へ交流しに行った。スケジュールの中で日本文化を体現する日程（例えば：茶道、花道、剣道、弓道と着物の着付けなど）があるが、遊びの部分が多かった。二回目は学校に戻ることを決めた後に祝いの旅行で南の広島から北の東京まで遊んできた。二回の旅行で別々に長崎と広島原爆記念館へ見に行った。その時の気持ちは戦争のせいで犠牲された人たちに対して悲しいと感じただけだった。

修業し始めてから、植民地時代と原爆に関する文章を読んだ後に、頭の中で「日本」についての見方を改めて整った。昔には多少崇める気持ちを持っていて、「日本」に関するすべてのことが「高級」だと感じた。このような気持ちは父と祖父から影響を受けたかもしれないし、或いは台湾社会には日本に対する崇める・ハーリーのブームと関係があるかもしれない。目上の人々が日本時代の良い治安に対してノスタルジアを覚えるから、中年の人が日本のブランドの電気と薬を愛用することに経って、若者が日本のドラマ、芸能人、ファッションルックを熱狂することに至るまで、知らずのうちにこの社会雰囲気感化されて、「日本＝高級＝良い」という見方があたりまえなことになってきた。日本語を習う方面でも同じである。日本語がぺらぺらに話せるようになりたいのは、もっと「日本人」らしくてそのイメージに近づければいいからだったのである。「日本人のように」日本語が話せれば、「高級」というイメージに近づけるという考え方は、皇民化時代の台湾人と同じように、皇民になりたい気持ちで日本語をしゃべったり天皇を遥拝したりしていたが、やがて皇民にならないし、皇民としても見なされていなかった。ですから、日本語が上達になることに対して意地にならなくなったし、「日本」に対して昔のようにいつも「高級」というイメージと結び付けていなかった。

大学院に入った一年後には、「日本＝高級」というイメージがますます薄くなってきた。再び日本へ行った時、昔のように綺麗な町とか空気とかのために胸がわくわくするではないようになってきた。このような転化を背景として、以前と違う視線や感覚をもたらせる岡崎と沖縄での経験を促した。

日本岡崎で N 大学<sup>28</sup>の学生と一緒に参加するスタディツアーの中で、初めて授業と文章によって書かれた「日系ブラジル人」と出会った。保見団地<sup>29</sup>で出会ったのは若者のほうが

---

<sup>28</sup> 日本愛知県にある大学で、長期に本学科と繋がりがある。

<sup>29</sup> 愛知県豊田市の北部にある、入居者数が全部で約 11,000 人ほどの大きな団地である。そのうちの約 3 割がブラジルを始めとする外国人だと言われている。県営住宅、公団住宅、一戸建て住宅があり、特に県営住宅は入居者全体に占める外国人の割合が高いようである。近くにはトヨタ関連の企業が多くあり、人材派遣業者を通してそれらの工場で働いている人が多いようである。団地内には 4 つの自治区があり、季節ごとに盛大な催しが開かれている。

多かったが、彼らの間にお互いのことがあまり知らないと気付いたので、私が一員として参加したチームによって「交流のパーティー」を行われた。このパーティーによって私たちと彼らたち、そして彼らたちの間にも知り合って交流できるようになってから行われた。会話の内容がよく覚えていないが、そんな盛大な活動（30人ぐらい出席した）を促進して参加することに通して「交流の意義」について新たな意味を理解した。それは気持ちがあれば短くの交流をできる一方、その交流によって立てられた関係を続けて維持するのは、もっと入れ込まないといけない、また続けていくと友情が芽生えるかもしれないし、或いは何もならないかもしれない、そして短くの交流は線香花火のように驚きと嘆きしか残さないということである。

ツアーの最後三日目の夜に、性質が結構いい私は意外にも短気になって怒らせていた。ツアーの前期に、両校の学生がお互いの年齢と言語の違いを問わず、調査と話し合いを通して絶好の革命の感情をすぐに育てた。充実の日程でいくら疲れても、暇を見つけてお喋りしたり遊んだりしていた。そこで私が下手の日本語でメンバーの理解をもらえることに対してとても驚いて感動した。それは毎回の討論に私がかかなり真剣に皆に分かれるように頑張っていて日本語を使っていたからだったのである。メンバーが分かったふりをしているかどうかはともかくとして、せめてそのような場合に、私はちゃんとできていた。

コミュニケーションが順調に岡崎当地の公開的な発表会の前の日（最後の三日目）に行ってきた。発表会のためにメンバーの皆が真剣に調べて資料を集めて、そして何度も発表の内容について討論していた。発表会の前の夜に、皆が最後まで貫く意志によって体力、根気と精神を支えていた。いい結果を求めて発表会でちゃんと私たちの意見をうまく伝えられるように、私のグループが最後まで頑張りたいと思いながら、何度も何度も発表の内容を直して、新しいアイデアが思いつくとすぐ発表の内容を直すことで頑張っていた。連続の疲れで私の意志をやっと撃破してしまった。その夜の討論の中に、私が新しい意見を提出してからもっとはっきりと説明しようと試みているうちに、同じグループのメンバー（N大学の学生）がまだ理解していないのに「分かった」と返事して、ほかのグループに私の意見ではないことを言ってしまった。私の意見をかなりずれて言い出されたときに、いくら抑えていたがもう限界だったのである。各グループの話し合いの時間になると、すぐ向こうに「なぜ分かったふりをしていたか」と聞いた。このように聞かれても、向こうはどう反応するか分からない顔をしていただだけである。「日本語の問題ではなくて、伝えたいことの問題だ。抽象しすぎるんだよ。向こうは自分が理解したと思うのに、実は理解したものがずれてしまったと分かっていないだけだ」と、そばにいるほかのメンバーが私にこう言ったからこそ、コミュニケーションをとる時に言語の方面で問題が起こるだけではなくて、言い方と世代と理解の差異、そして気持ちの管理でも交流をうまくいかない問題が起こらせることが分かってきたのである。その後、自分の気持ちをうまく管理しなかったことに関してしっかり反省したし、交流についての認識がやはり足りない部分を分かつ

---

(<http://www.homigaoka.jp/> NGO 法人保見ヶ丘国際交流センターのサイトに参考した)。

ていた。

沖縄へ行ったといっても、交流の対象が台湾の T 大学<sup>30</sup>日本語学科の学生だったのである。今回のスタディツアーはいつものように指導先生がいなくて、事前の勉強会と当地の感想会を含めて生徒だけによって日程を立てられている色々な用意をしていた。T 大学の日本語学科と協同で交流の活動をすることが初めてではなくて、そして今回の沖縄ツアーに参加することでも私が初めて T 大学の学生と一緒に活動するではないが、親しいと感じながら拒否したい「特別」な感覚があった。その「特別」な感覚は向こうの学生が「日本人」を中心に偏って交流する時に見つけたのである。日本語を勉強する前期には、私も時々「日本人」と交流できる機会、友達になることに至るまでも望ましかったので、多少向こうが気付けないうちに流れた微妙な「差異」がある態度に対して理解できるが、今の自分がそのようなコンプレックスからだんだん引き抜いてから、その「差異」に対してすごく違和感を感じる。新鮮で珍しい物事が人を引きつけて焦点になりやすいのは常情だといえるかもしれないが、その「差異」と向き合う時に違和感を感じる以外にどうすればいいのか分からなかった。受け取るか、怒るか、それとも見て見ぬふりをするか。当時の私は受け取ることを選んだが、実は心の中に「見て見ぬふりをする」のほうを選んで、それと向き合うことから逃げていきたいと思っていた。

それによって分かっていたのは、「交流」の目的が「差異」をなくすではなくて、たかさんの「差異」が存在することを発見して、そしてどう「差異」と向き合うかを考えるのである。

はっきり言うと、よく考えた後に自分自身もまだ完全にその「特別」な感覚と「差異」がある態度という対日本人のコンプレックスから脱出していないことを気付いた。それは無意識に「日本＝高級＝良い」というイメージを持つことと同じような存在である。そのコンプレックスは「親日」とか「哈日(ハーリー)」、或いは「恋(れん)日」とか「媚(こび)日」など、どのレッテルの下に置いたほうがいいのか分からないが、分かるのは決して「懐(かい)日」ではないと思う。ただし台湾の歴史背景で、自分がその「特別」な感覚と「差異」がある態度に気付くのは本当に難しい、さらに完全脱出なんて言うまでもない。

多分当時の自分は傍観者的な立場から見ていた、或いは自分が日本人と違うそっちに扱われたので、そんなにはっきりと見えてしまった。ほかの角度から言い換えれば、他人の目から見る私、もしかしたら日本人に対するその「特別」な感覚と「差異」がある態度はとてもオーバーしていたかもしれないとも言えるだろう。

---

<sup>30</sup> 本学科と常に交流する大学。

### 3、フィリピンでの経験

フィリピンでは日本語があまり役に立たないが、英語のほうもさびてだめになってしまって、どうしたらいいのか。どうコミュニケーションをとるか。実はとんでもないことに、うまくできた。

初めてフィリピン人と話したのは、台湾にいる時だったのである。そのときは向こうと台語<sup>31</sup>で話していた（英語で話してとよく父に言われたが）。なぜならその人が私の嫂（従兄の妻）で、つまり台湾で「外籍花嫁」といわれる人だったからである。彼女の出身はフィリピンで、大学を卒業して、伯母さんと従兄の家族全員が彼女と台語で話すので、とても短い時間で私より彼女の台語が上手になった。

二回目フィリピン人と話す時には、同じ台湾にいるが違うのは相手と英語で話さないといけないのである（相手は中文が話せるが、ほんの少しだけだった）。相手が私の同僚で、単純に労働力によってお金を儲けるではなくて、建築関係のエンジニアなので、台湾で「外籍労働者」といわれる人ではない。彼の出身はフィリピンで、修士学位を持ち、豊かな海外働く経験があって、本格的な海外派遣者である。

三回目フィリピン人と話す時には、同じ台湾にいるが相手と何語で話したのは忘れたが、とりあえず英語か中文か台語かのなかの一つだったのである。台湾のカトリック教会の神父さんに勤めるので、相手が台湾で長い間に暮らした。彼の出身はフィリピンで、常に台湾にいるフィリピンの海外労働者が助ける、例えば仕事上の問題を解決するなど、そして彼らに穏やかなシェルターを提供したが、去年フィリピンに帰ったことに従って、もう台湾にいるフィリピンの海外労働者を助けられなかった。

四回目フィリピン人と話す時には、まだ台湾にいた。両側とも照れ屋なので（私のほうが相手より一層照れる）、私が目線とジェスチャーによって相手と話した。相手は前に言ったシェルターによく通うフィリピンからの労働者たちだったのである。彼ら、彼女らの家族が何人いるか、どんな学歴を持つか、照れ屋の私が分からなくて彼ら・彼女らに対してフィリピンの出身しか知らなかった。しかし、目線とジェスチャーによってあることを共同でやっていた、例えば一緒に食事するうちに、話さなかったが少しでも交流を進行していた。

五回目か六回目か忘れたが、今度はフィリピンで相手と話した（初めてフィリピンへ行

---

<sup>31</sup> 学術的な立場からいうと、常に使われた言葉は主に「閩南語」「河洛語」「福佬語」などのほうが多い。また、台湾主権を主張する立場からいうと、常に使われた言葉は「台湾語」だが、台湾にいる族群各々の主権からみると、「台湾語」という言葉はある特定の言語を指すわけにはいかない。しかし前述の立場の中に「私」の考え方を代表できるのではないので、自らが成長の背景の中によく使う言葉として本文の中で「台語」と使う。

った)。しかし意外なのは日本語で相手と話したことである。スタディツアーによって彼女と知り合っていた。彼女が日本語学科出身で、今日本で仕事をしている。

またフィリピンへ先生の友人の家族に会いに行く時、私が簡単な英語と僅かなカタログ語に加えて目線とジェスチャー（ダンスを含めて）を使って相手と数日の交流をしていた。

フィリピンに関する交流経験が私にとっては、韓国と日本に関する交流経験のように複雑な気持ちを持たさない、しかし浅くて穏やかな感じをもたらして深く印象を残した。

#### (四) 原住民部落での交流小史：スヌイ<sup>32</sup>・ナカハラ<sup>33</sup>

##### 1、スヌイでの経験

この経験は必修の科目——台日多元文化交流総論をきっかけにして始まったのである。学校を始めたばかりに、先生側によって行われた初めての校外合宿を通して部落へ行って来た。台中から清境へ或いは台中から廬山へいく道の風景は仕事で貯められたストレスを解消するいい仕方なので、よく遊びに行つてそこへ行く道に対して疎くないが、その近くの部落に入ることと部落の原住民と交流することはこの学校に入ってからのことだったのである。

本文の協力者 M は原住民だが、部落で育っていない。部落で育てられた原住民と部落で育てられない原住民の間には差異が存在すると M がそう言っていた。私にとって、部落で育てられた原住民に出会った前に、M が言っていた差異のことに對してよく分からなかった。スヌイへ行つて来たから、その差異のことが気付いて始めた。M よりスヌイの皆のほうは私が原住民に対するイメージに近く、例えば中文を言う時になまりが混ざっている、冗談をたたくことが好きで、晩ご飯の後に家の外とか庭とか集めてお喋りしたり歌ったりする、子供の間で中文と原住民語を混ざって遊んだり口喧嘩をしたりする、親の職業がほとんど農業とか労働者のほうが多いなど、ということも小さい時に家の隣にいた原住民の家族に対するイメージと大分合っている。その時から M のことが（ほかの私が知っている原住民と）違っているのを意識した。

スヌイでの経験によって原住民に関する問題に對して私が関心を持たせて、原住民と交流する時に自分が何の立場と考えを持つかと振り返つて考えることを気付かせた。また、スヌイでお話を聞く経験を皮切りとして、自分のライフを振り返るし、本文の動機を促した。

##### 2、ナカハラでの経験

この経験がスヌイから延伸してきたのが、学科と長期に交流する日本の N 大学と一緒に台湾で行われた協同学習の活動をきっかけに当地の住民と交流し始めた。活動中には部落の教会に協力するために、当地の住民を訪ねたり簡単な部落の地図を描いたりしていた。

---

<sup>32</sup> 現在南投県仁愛郷の春陽部落、住民は主に原住民のセイダッカ族である。スヌイとはセイダッカ族の言語 Snuwil の音訳で、「桜」を意味して、セイダッカの人たちが春陽部落のことを名付けた名前とのことである。私に對して始めてこの部落に接触したのは「スヌイ (Snuwil)」という名前だったのである。

<sup>33</sup> 現在南投県国姓郷の中原部落、住民は主に原住民のセイダッカ族である。ナカハラ（中原）とは国民政府によって名付けられた名前である。

交流の時間が短かったが、チームによって担当の地域を分ける方法で皆がたくさん面白い交流経験とストーリーを聞いた。私にとって一番特別なのは教会の青年団との交流だったのである。

スヌイの教会でもたくさんの青年がいるが、なぜかよく分からないのは毎回行って青年の一人か二人かと挨拶するだけで、ほかの青年の間になんとか距離感があると感じた。一方、人数が少ないナカハラ教会の青年と毎回会ったら、長年の近所の人と挨拶をするように親しいと感じた。私はスヌイへ行く回数からいうとスヌイの青年と親しいはずだといえる。個人の性格には恥ずかしがり屋と非主動な問題があるせいかもしれないが、ナカハラでは私が困らせなかった。それとも人数が多いスヌイの青年に比べて人数が少ないナカハラの青年の中で、私がいくら非主動でも隠しにくいのか。その活動を準備し始めてから、毎回ナカハラへ行ったら心配をなさずに安心できるのに、スヌイへ行ったら知っている人がそこにいるかどうかを先に確かめたいように安心できない。

## (五) 小まとめ

このドアに入ってからもう四年目で、近い距離で「先生」と付き合っ、人と人の付き合いに対して対処と態度が変わっていて、物事を見る角度が変わっていて、物事を考える基準も変わっていて……そして驚かせたのは、小さいから原住民（ここで複数の単一的な個体の意味を指す）と付き合う経験がある私は、自分が原住民（ここで複数の族群の意味を指す）に対してとても分かっている、原住民（ここで複数の族群及び単一的な個体の意味を指す）についてステレオタイプを持っていないと思ったが、修士課程によって原住民（ここで複数の族群の意味を指す）に関する問題について深く考え始めてから、実際に心の中で原住民（ここで複数の族群及び単一的な個体の意味を指す）に対するステレオタイプを持つ考えがずっと存在していて、そして深刻に消しにくくて、ただ……今まで気付いてなかっただけだったのである。

交流の「きっかけ」と「障害」は何だか。国籍か、身分か、或いは言語か。

私はこう答える。ひらいたココロととじるココロ。

では、貴方の答えは何だか。

## ● なぜ「原住民」か

なぜ「原住民」だったのか。

それはどういえばいいなのか.....まあ、頭から説明しよう。

はっきりいうと、入学試験に参加するときから入学してから二年のうちに至るまでも「なに」を「論文」のテーマにするかと考えてなかった（その二年のうちに、一年生の時に興味を持つ課程の点数を全部取っていた。二年生の時にプロジェクトに夢中になってしまって興味津々でやっていた）。もっと直接に言えば、「論文」なんか書きたくない。今思いつくと、その時にそう思う原因は「論文」に対する認知が「何をテーマにするか分からない」という単純な階段に止まっていたのである。「『論文』を書かないと卒業できない」という事実を認めても、やはり「何を研究するかと分からない」ということによって「論文」と大分距離があると思った。その時の自分が「論文」に対するというイメージに囲まれていて、例えば「論文」の内容が広くて深い、理論をたっぷり書き込む、たくさん引用しなければいけないなど。そして、このような独りよがりな枠組みの中で、もし私が一生懸命にこの枠組みをいっぱい詰めていけば、社会に対して貢献がある「論文」を生んでくれると仮想していた。ただし、囲まれた私がこの枠組みの中で自分がほしいものをみつけられなかった。

三年生になったら、点数を取れなくてもプロジェクトの活動に興味津々参加し続けた。プロジェクトによって「論文」のことを逃げているかという皮肉を同級生が言ったが、それならいいとは思った。「論文」よりプロジェクトのほうが面白かった。「論文」を書く経験がないけど...と思っていた。三年生になって、「論文」の以外に点数も取れってしまった。それからは？「論文なんて実はそのために悩まなくてもいいだろう。或いは別に悩んでいないか。」このようによく頭の中に自問自答で行う私は常にあることを思い出した。それは私が学歴証明書のためにここに来るではないことである。就職と学歴の間に絶対の関係があるではないし、修士の学歴を持つことと就職しやすいことと等しいではないし、特に今の私にとって「就職してお金を稼ぐ」ということの重要性が人生のランキングのトップに入らない。こういう意味はお金が重要ではないのではなくて、まだまだいろいろなお金が必要なのである。また、自分の人生に対してプランを立てていないのではなくて、ただ「お金を稼ぐ」の前にもっと重要なことがあると思う。今のところはまだ「お金」があるので、「お金を稼ぐ」より重要だと思ふことをやる余地があるのである。そして、アルバイトと二年の就職経験によって「お金を稼ぐ」に対して別に熱中していなくなるなどで、学歴証明書が重要ではない考えを持たせた。では、そのような考えを持つ私は、なぜ学歴証明書をとるために自分に迷惑をかけるように学校に残り続けなければならないか、という質問を自分に何度も聞いた。「あら、どうせ今卒業しても仕事を探せないのです、景気が悪くて学校に残り続けるなんていいじゃないか。ニュースによれば、大勢

の博士と修士の学歴を持つ人が卒業したら就職できないまま失業してしまうということだ」という嫌味な言い方に対して、いつも自分が高給をもらえるように学校に戻ったのではないと反発したいが、ただし言っても、相手が私の見方を認めてくれるかどうかも分からない。なぜかという、反発の時に確かに私がまだ卒業していないのは事実なのである。それに、学歴によって人の能力を評判する状況に偏っている今の台湾社会では、「私」という個人——単一的な個体の見方はあまり重視しなくて、簡単にこんな社会メカニズムを変わり易くない。しかし、こういうことは「私」という単一的な個体が重要ではないという意味ではない。ここまで、「論文」に対して新たな見方が出てきた。

単一的な個体の眩きがいいつも大時代の騒ぎにカバーされるが、大時代の中に生活している個体の眩きが「独り言」だけではなくて、私みたいに自分の眩きを「論文」の形でこの社会と対話したいように、実際に大時代の騒ぎに対抗と交通をすると企む「対話」だったのである。もし「論文」が研究結果を表す仕方の一種だけとしてするならば、こんな「論文」を処置する方法が私に似合わない（「研究結果」もずっと私を囲まれる悩みだった——結果が予想できない問題は「論文」にならない）。私の学識が広くて深いではないし、理論をたっぷりに書けないし、あまり引用できないし、ただ知っているのはこの社会がたくさんなことを疑って探求すべきで、特に「もちろん」だと見なされる物事だったのである。学校に戻ることはそれらの「もちろん」を檢視し始めるきっかけになった。この中に私がもちろんだとよく見なされたのは台湾原住民族をみる目線だったのである。

ここに入ったばかりに課程に従って南投県仁愛郷の原住民部落と接触し始めた。最初を思いつくと、東部で育てられた私は「原住民と親しい」と思う態度を持って行ったが、接触してから気付いたのは社会文化の方面で、「原住民」とは何かと分かっていないし、長い間に台湾社会の教育が私と原住民の間にどのぐらいの差異と距離を設置したかと分かっていない。そして私が考えたのは、最初に「原住民と親しい」と思う誇りがどこからきっていたか。何の根拠によってそう思ったか。小さいから周りには原住民の友達がいっても、原住民が何かと本当に分かっているか。「原住民」という三つの文字、レットルが台湾社会では、どんな意義があるかと分かっているか、ということに対して一度も疑っていなかった。注目し始めても、それらの問題に対して答えを見つけられない。台湾社会がどんな目線で「原住民」をみるかということとりあえずほっといて、先に自分がどう「原住民」をみるかと考えよう。しかし、確定に答えを言い出せない、せめて「とりあえず」の答えでも言えない或いは言いにくい。では、なぜ私はうぬぼれて「原住民と親しい」ということを言えるか。「原住民と親しい」ということの中で原住民の意味が族群とか個人とかを指しても、根拠がないのに意欲と自信を溢れるばかりの見方を持っていることについて檢視すべきだったのである。

台湾社会の中では、原住民族がマイノリティの「スター」として、大勢の社会問題議題と研究資料から政策方面に至るまで、原住民族の姿及び原住民族を注目する目線と関心が

いろいろだったのに対して、ほかのマイノリティ（個人・団体）が原住民族と同じような「スター」の処置と関心をもらえなくて、マイノリティの中のマイノリティで、姿の弱さが蟬の翼のように透明だといえるほどうすいし、注目しにくくて協力を得る対象になりにくい、例えば結婚のために台湾へ移民してきた女性（いわゆる「外籍配偶者」）、或いは資源不足の辺地教育問題に直面する子供（「外籍配偶者」）についての研究が少ないとはいえないので、前述のは相対的な言い方だと筆者の考えだ<sup>34</sup>）など、とある先生から聞いた。先生もその二つの例を「論文」のテーマと研究の対象としてしたらいいじゃないかと私にアドバイスした。「原住民族はマイノリティの中の『スター』だ」という先生の言い方に対して認めながら、学術の研究<sup>35</sup>、関連の資料<sup>36</sup>と政府機関の設置<sup>37</sup>からいうと、原住民族がほかのマイノリティに比べると確かに光を集めている「スター」だといえるが、私にとってその「スター」という輪光の下で、近年の原住民族が集められた光は輝きすぎて眩しくて、逆に彼らが暗い闇の中に失ったものをはいくらだったのかと見なされないかどうか、と注目したい。失ったと得たの間に彼らが一瞬のバランスを取ったか。いくつ世紀以来の被植民された経験によって彼らが遭われた不平等を一度で薄くて流されたか。そういうことについてほかの学者と研究者よりもっと詳しい分析と独自の見解を提出できないが、原住民族がマイノリティだと思って原住民を「論文」のテーマと対象として設定したのではないしいえな。

学校の課程につれて、「(他人に対する) 偏見」と「(他人に対する) 圧迫」がどこでもあるんだと意識した。特に気をつけると、「特に気をつける」という行為が「偏見」と「圧迫」が付いていると意識して反省しながら、物事に対して「偏見」と「圧迫」を持たないように自分を象牙の塔に囲まれるのではなくて、もっと「人」との付き合いを大切にして、違い族群、文化や言語との接触によって、身に付けている「偏見」と「圧迫」が一つずつおろしていくように思っている。違い物事と接触の前に、或いは接触のところに、偏見と圧迫が同時に増加する、それとも偏見と圧迫が違いレイヤーと様子に転化しに行く。また、他人に対してすべての偏見と圧迫を消すのは無理だが、それなのに自分が「偏見」と「圧迫」を身に付けていることに対してどこでも、いつでも意識できるように望んでいる。

小さいから原住民が一番多い地域で育てられたし、長年の知り合いが原住民だし、その自分が無意識に台湾原住民族についてとても分かっているという考えがあるのを気付いてから、「他人を研究する」よりも「自分を研究する」——原住民族に対して偏見と圧

<sup>34</sup> 2010年3月26日に「外籍配偶」をキーワードとして台湾の全国博士及び修士論文資料サイトに検索した結果は関連データが379件を出てきたのである。

<sup>35</sup> 2010年3月26日に「原住民」をキーワードとして台湾の全国博士及び修士論文資料サイトに検索した結果は関連データが1515件を出てきたのである。

<sup>36</sup> 陳雨嵐（2008）の研究によって、1980年から2007年まで台湾原住民族に関する出版物は410冊があって、作者が違う族群（原住民族、漢族など）と地域出身（台湾、日本、中国、ロシア、アメリカ、ベルギーなど）だというのである。

<sup>37</sup> 1996年12月に原住民族委員会を設置されて原住民に関する事務を担当する。

迫を持つ自分のことを先に研究すべきだと思う。ただ成長の環境及び族群の違いによって偏見と圧迫を引き起こすという単純な言い方のせいにするか。もちろん否定できないのは、違い成長環境と族群によって確かに偏見と圧迫を生み出すというのだが、時空の転換と人事の異変に従って「偏見」と「圧迫」が同じように続けて長期に存在することは成長の環境と族群の違いだという一貫して単純な言い方で解釈できるか。特に大環境の中で暮らしている小人物たち、彼らの顔と声が歴史に——政府によって書かれた「国家の歴史」にカバーされて消えてしまった、まるでこんな人たちがいるが、彼らは五官と髪がないと知っているみたいだったのである。

それに反して原住民族の歴史が政府によって書かれた「国家の歴史」の中でちょうど相反した。原住民族はマイノリティとしてカバーされて消えてしまうのではなくて、逆に「国家の歴史」の中でこんな人たちがいるよ、彼らの五官と髪型がはっきりと見えて、同じだったり固定的な形だったりしていると書かれた。そこで原住民の存在が台湾社会の中でずっとはっきりしていて、彼らの「本当の」顔はどうだったのかと気付けなくて注視しないほどはっきりしている（或いは別に彼らの「本当の」顔はどうだったのかを気にしない）、考えなくても彼らに対する認識を言い出せるほどはっきりしている（或いは全然彼らを認識するなんて考えない）、全然原住民と接触しないのに彼らに対するイメージを言い出せるほどはっきりしている（或いは全然彼らを接触するなんて考えていない、それともこれらの疑問を全然頭の中に出ていなかった）。

政府によって書かれた「国家の歴史」からこんな「顔がはっきりしている」の族群がいるということ、また族群の名称、所在の位置、伝統の文物、風俗と民情などを含めてこれらの外在的な特徴を注意される以外に、彼らに対してほとんど分かっていない。未知な物事に対して、人間が心強くなれるようにある言い方を作る、長い時間を経ってから、その言い方がそのまま特定の対象についての偏見になってしまう。同じことが政府によってまた作られるのは、政治的に偏見の散布と圧迫を行うとはっきりしている。また、周りの（漢民族）友だちが原住民に関する議題があまり注目しなくてもいいだろうと思うことからみると、まさか原住民族が台湾社会での存在は「はっきりしすぎる、当たり前すぎる」のせいではないかと考え始める。そのせいで我々は教科書と主流メディアによって描かれた原住民のイメージに対して疑問を持たないではないか。そのせいで我々は漢民族としての我々が原住民族に対していろいろな偏見と圧迫を与えることを全然無視するではないか。たとえ 1980 年代の原住民族運動は激しくて展開してから今までとしても、前に言ったような「当たり前なので全く疑うことはない」それとも「当たり前なので疑う必要もない」という考え方はそのまま大衆（原住民も含めて）が国家の歴史と主流メディアによって描かれた原住民のイメージに対する認知の態度である。

そして大衆の中にいる自分を見つめてみよう。同じように「当たり前なので全く疑うことはない・疑う必要もない」という認知の態度を持っていて「彼らのことがよく知っている」

と違って原住民のこと、(原住民の)知り合いに至るまでそうみていた。最初こんな自分が存在すると意識した時、本当に向き合いたくないでも承認しない、或いは気まずいと感じるほど可笑しいと思った。直面したくないのはどんな様子で直面したらいいかということではなくて、通常に慣れているので、そんな自分を卸したらどうなるかと想像できないというのである。そして、なぜ私は大衆から抜けないといけないか。大衆の足跡に従って、心強くなるではないか。しかし、長い間の「あたりまえ」だという思いは偏見と圧迫が付いていると意識した時、そのまま大衆の中に続けているのは不安だと思う。この不安はパウロ・フレイレ (Paulo Freire<sup>38</sup>) によって書かれた『被抑圧者の教育学』の中に語ったことと同じようである。

**自分が抑圧者であることを知るのは、かなり苦痛なことであろうが、必ずしもそのことが被抑圧者との連帯につながっていくというわけではない<sup>39</sup>。**

大衆から完全に抜けるのは無理だと思う私はどうやってこの不安・苦痛を解消したらいいか。じっくり考えると先に自分がどんな状況で他人に圧迫を与える者になることを理解すると思った。具体的なやり方だったら自分のことを語ることによってちゃんと整理して反省をするほうがいい、例えば「論文」を書くことが絶好のチャンスで、そしてそれが対話の場所、バラバラに分解する場所、或いは公共性を体現するプロセスだとみなされる(胡紹嘉、2005)。それは開放的、静態的、緩やかな空間で、私はその中で自分と対話すると同時に読者と対話する、それとも社会と対話する。また、それも展示(空間・物)で、自分を取り分ける過程と取り分けられた私のある部分を放送する・置くと同時に、本文の協力者を取り分ける過程と取り分けられた本文の協力者のある部分を放送する・置く、またこの社会を取り分ける過程と取り分けられたこの社会のある部分を放送する・置く。

簡単に言うと、本文ということは自分と他人(本文の協力者 M)との対話を通して、次々に社会一個人という関係の中に私が台湾原住民族に対する「あたりまえ」の目線はどう構築される・構築するかを解けてから、書くことによって社会が構築する「あたりまえ」だということに簡約された個体(私と本文の協力者)のことを再組合・再構築・再現すると企んで、同時に他人(読者)と社会に開放的、解釈的な対話の展示を提供できるようにするのである。この展示を通して、私の不安・苦痛に属する出口を見つけるように期待している。

<sup>38</sup> プラジルの成人教育学者及び教育実践者として有名で、西方でも二十世紀以来最も重要な教育学者の一人とみなされている。近年で、彼の教育思想と理念は critical pedagogy (批判的教育学) という理論・観念が西方でだんだん盛んに行われることに従ってもっと注目されている。

<sup>39</sup> パウロ・フレイレ (小沢有作ほか訳) 『被抑圧者の教育学』 亜紀書房、1979年、26:3-5。

台湾の社会の中に、漢人としての苦痛を述べるのは、なんか無病なのにうめいているみたいである。そう  
だとしても私が述べる。述べないとその苦痛をどうにかすると分からない。漢人に抑圧された原住民たちの  
苦痛を分からない私は、きっと彼らも漢人としての私が苦痛を持っていることを分かっていないと思う。

お互いの苦痛を理解することによって、いつかお互いの苦痛を解決する方法が見つけれられるかもしれな  
い。

## ● 「山」のプロジェクトを通して始まる

プロジェクトは必修で、ここに入ってから初めての合宿に参加したことによって、幾つかのプロジェクトの中に「山」プロジェクトを選んでいった。合宿の場所（スヌイ部落）に行ったことはないが、その風景は実家にいるときに偶には通った原住民の部落と似ているので、原住民の部落に対する「親しいながら疎い」の感覚を持って、親しいと感じる部落の外見をはがしてその中の文化と生活を覗きたいと思って「山」プロジェクトに参加した。ただし、予想できずにこの間になんか気付いて自分のところに戻ってきた。

### 一、「平地人」だと言われた——では、私は誰だ？

ある日にスヌイ部落の教会へ行って、着いたところ会ったことがあると気がする子たちが私の傍に寄ってきた。最初は私と距離を守って、ちょっと遠いところからこっちを見ているだけで私を観察していた。やっとなら寄ってきて、子たちが「あなたは日本人ですか」と私に聞いた。多分先生や同級生と日本語で話す時に子たちが聞かれたので、私に対してもしかして彼女が日本人だという疑問を持たせるかもしれない。首を振ると答えを示した。そしてある子が「じゃあなたは何人ですか」と再び私に聞いた。ええと、こう聞かれて、どう答えたらいいなのか。ゼミには確か「アイデンティティー」について討論した、そして最終に得た結論は「アイデンティティー」の構成元素が単一ではなくて、複雑に多様な認めを混ぜて構築されたというのである。それに従って、台湾人とか台中人とか台東人とか或いは地球人でも答えられるが、ただし子たちに対して私の答えの中でたくさん含まれた意味（考えすぎだともいえる）が分かれるかねえ、子たちはただ簡単な答えがほしいだけではないかねえ、と思いながら複雑にならないように一つを選んで答えようと決めてその一つの答えを迷うや否や、ある女の子が待つのもたまらないように私の代わりに答えを言い出した。「あなたは平地人よね」と女の子が言った。あれ、「平地人」って、私は「平地人」だったのか。私の答えが別になくてもかまわないように、女の子に従ってほかの子たちも答えを得たみたい「あなたは平地人だ、あなたは平地人だ」と言いながらばらばらと走っていて、私の視線の外まで行ってきた。

平地人か。私は「平地人」か。私のアイデンティティーの中にそれについてのインフォメーションが出てこなかったのに、初めてそういうふうには指さされた。いきなり私は反応できずに去っていた子たちを呆れてみている。

「平地人」に対して「山地人」で、「漢人」に対しては「原住民」である。「漢人（漢民族の意味も指す）」について最初の印象は歴史の物語の本と教科書から習った「中国の五大族群—漢満モン回蔵」ということの中に人数が一番多い族群だということである。という

ことで、私にとっての「漢人」が「漢人—中国」という連帯の関係を付くと意味する。つまり、「漢人」という言葉が「中国」「中国人」という意味を指していると思う。統一版の教科書（国文、社会、歴史、地理などの科目）の中に常に台湾—中国という関係を提起して私は「中国人」だ、同胞を救うために大陸を反攻しなければならないという理念思想を持つべきだと提起されるが、その理念思想が私の成長の環境と全く違っている。土地の認めからいけば、教科書によって書かれた「祖国の中国」が私にとってイメージしかできないし、実質的な感情も付いてないし、その土地を踏んで立つこともないし、自分が「中国人」だと認められないので、「中国」「中国人」を意味する「漢人」というアイデンティティーが私の頭にあまり出てこない、偶には出ているのは台湾へ移民してきた漢人の開拓史について断片に知っていたのだが、その僅かの断片に対する認めよりやはり出身地に対する認めのほうが強い。頻繁に部落へ行ったり原住民に関する活動に参加したりすることによって、「漢人」と指される経験が高めながら、漢人の台湾移民史に対する認知がちょっとずつ変わってきた——「漢人 が台湾に移民して開拓する」から「漢人が台湾に移民した後、自身の利益を求めするために原住民を圧迫したり原住民の手から資源を奪ったりしていた。台湾で自分の存在の正当性を固めるために原住民族とその文化を汚名になさせた」になってきて、そしてまた「歴史—過去」の面から「歴史—過去—現在」の面まで延伸してきた。初期の私はその歴史の存在に対して否定したり抗議したりしたくて、個人の漢人として日常生活の中で原住民を傷つけることがないので、そのような状況がただ「歴史—過去」の面だけに存在すると思う。ただし、原住民と接触する経験及び関連の議題に投げる注目を増加しつつ、移民の初期に漢人が原住民に対するいろいろな略奪と圧迫が今までも続いていると意識した時に、団体—漢人の一人として、私の「漢人のアイデンティティー」がいよいよ「漢人—中国」から「漢人—台湾」を通して「漢人—圧迫者」に至るまで転換した。

「平地人」という言葉を習ったことはなかったし、アイデンティティーの中でも出てこなかった。聞いたことがあったが、「平地人」という言葉に対する認知は「平地に住んでいる人だ」という意味の段階に止めていて、そしてそう呼ばれたこともなかった。子たちに「あなたは平地人だ」と言われた時に、子たちの笑い声の中にある「嘲笑」の気味を感じていた。その時、昔に「平地人」という言葉に対する認知が狭すぎるではないかと疑った。部落の子たちが認知した「平地人」の意味と違うかなあ。部落の子たちが認知した「平地人」の意味は何でしょうか。部落の子たちの立場と考えを想像することを通して、その中から可能な答えのヒントを見つけたいので、自分と子たちの立場を交換してみたら、ある親しい感覚を浮かんできた。ある場面が遠くから近づいている、画面が疎くなくてだんだんはっきりしている。それは小さい時に「山地人」「番仔」<sup>40</sup>に対する記憶だったのである。

記憶中、大人たちが「山地人」と「番仔」を言った時に、いつも軽蔑と不機嫌な顔をす

<sup>40</sup> 「山地人」は中文で、「番仔」は台語で、両方とも原住民のことを意味する。

る。自分が軽蔑と不機嫌な顔をするかどうかよく覚えないのは知り合いの中に「山人」「番仔」といわれる人がいるのである。よく大人に言うのは、私の知り合いの家庭背景がほかの「山人」「番仔」のと全く違って、そして山地に住んでいない、わが家の近くに住んでいるというのである。しかし、今のところに確定できるのは昔の自分も軽蔑と不機嫌な顔をしながら原住民をみていたが、その中には——知り合いとその家族を除いた——「家庭の背景」に基づいて知り合いのことを考えたし（例えば知り合いの親の学歴が高校以上、お酒飲まない、ピンロウを食べない、原住民語を言わない、中文を言う時になまりがない、経済状況が家より良いなど）、私が認定する原住民族（例えば親の学歴が低い、お酒とピンロウを大好きで、原住民語をぺらぺらに、中文を言う時になまりを雑ざっている、経済状況が悪いなど）の中から知り合いとその家族を独立して別のカテゴリに分類した。そうすると、元々彼らが属する原住民族のことは関係がないように私に遠くところに置かれてから、「私の知り合いがほかの原住民と違う」という原住民族を軽蔑する意味を内包する話を正々堂々に言い出せた。

部落と接触してから、私のアイデンティティーを変わって、原住民のことを考える価値観の内部には漢人の主観的な立場と文化の思惟ばかりだということを見ていた。逆に原住民の角度からいけば、「番仔」と言われるべきなのは台湾へ移民した漢人である。漢人こそ「異邦からきた人」で、本物の「番仔」で、もし子たちが本当に嘲笑しながら私を「山人」と呼んでも、漢人が彼らを「山人」「番仔」と汚名にすることに比べて千分の一も達しないと思う。

私は誰か。他人から見ると誰のことだか。私は他人の目から見たその誰のことになってしまったのか。  
知りたいが、そんなに簡単なことではない。

## 二、私が習っていた価値観—「原住民」のことを考える用

原住民のことを考える用の「家庭背景（例えば親の学歴が低い、お酒とピンロウを大好きで、原住民語をぺらぺらに、中文を言う時になまりを雑ざっている、経済状況が悪いなど）」という基準がどこからきていたか。原住民族はどういうふうに汚名にされたか。自分が経験したことの中に、「具体的な証拠」として見つけられるのは「教科書」である。一方、マスメディアの報道の中で再現された原住民の姿に関して整理することによって、私が育てられた社会の大衆は原住民族について何の「見方」と「認知」を持つかという説明に補佐しようと思う。

### （一）教科書：政府によって作られた価値観

私が使った国民教育教材（小学校六年—1986年8月～1992年6月及び中学校三年—1992年8月～1995年6月<sup>41</sup>）を集めて、政府によって作られた原住民のイメージを「具体的に」表したい。国立編譯館で資料を集めるうちに、1988年後の教材内容に原住民（当時の内容ではほとんど「原住民」のかわりに「山胞」という言葉を使う）を提起される比率が下がれて、特に「呉鳳」に関する内容が削除された<sup>42</sup>後にも、原住民に言及する内容がほとんど「マイナス」傾向のイメージしか繰り返さないのと分かれていた。ここで幾つか私が使った教材の内容を例にして、当時の政府によって作られた「マイナス」傾向の原住民のイメージを説明しよう（添付資料一に参照）。

小学校二年生前学期の社会科目の教科書（第三冊郷土與風俗、民国76年8月修訂再版）には標題肆（郷賢故事）の二つの物語の中に原住民が出ていた。一つは「改革壞風俗」で、もう一つは「反抗強暴」である。「改革壞風俗」でのタイトル及び内容（P65、原文：過去、山地同胞有用人頭祭神的壞風俗—日本語訳：過去、山地同胞は人の首で神様に拝するといふ悪い風俗があった）には原住民が「壞＝悪い」風俗を持つことに言及する、つまり「改革すべき」の隠喩が付くと分かる。また「反抗強暴」の中に、原住民が「酷く打たれたり、奪われたりする（原文：被毒打、被搶奪）」という低くて弱い族群のイメージを作られて、また「日本人を殺した（原文：把日本人殺死）」という形容で前述の「酷く打たれたり、奪われたりする」に対応して、さらに原住民が弱いのに復讐する時に「残忍恐怖」のイメージを促された（同じように、小学校四年生前学期の社会科目の教科書にも「日本人は現在の恆春牡丹郷で琉球人が山胞に殺されたという言い訳によって...（原文：日本人藉口琉

<sup>41</sup> 国立編譯館は1989年から部分的な教科書（中学校芸能と活動の科目の審査版）の編集を民間の出版社に開放したが、その時に私はまだ国立編譯館によって出版された教科書を使った（2002年まで「統编版」の教科書がやっと正式に歴史になった）。

<sup>42</sup> 1988年に原住民団体の抗議で、教科書から呉鳳の物語を削除すると教育部が宣言した。それ以来、呉鳳に関する神話が教科書の中になくなってきた。

球人在現的恆春牡丹郷被山胞所殺...）」という原住民族が残忍恐怖のイメージを構築された)。

それに「伝統文化(弓術、歌舞、文物)」「生活が貧しい、飲酒の悪習を改善すべき」を強調して「山胞の教育、山胞への慰め」などを提起して原住民族が「落後」「未開化」の族群だと見なされる教科書の内容は、小学校三年生前学期の国語科目の教科書第十三課「布農族的の神箭手(日本語訳:ブヌン族の )」、三年生後学期の社会科目の教科書標題参の四「山地社區的問題(日本語訳:山地コミュニティの問題)<sup>43</sup>」、四年生前学期の社会科目の教科書標題参の二「沈葆楨功在臺灣(日本語訳:沈葆楨が台湾に対する貢献)」と参の三「劉銘傳治臺新政(日本語訳:劉銘傳が台湾で創建した新政)」である。

写真とキャプションの使いも原住民の「伝統服装」「祭典儀式」などに偏って、「観光娯楽」と結び付ける傾向が多い、例えば四年生後学期の社会科目の教科書標題参の四「豐富的休閒生活(日本語訳:豊かなレジャーライフ)」の中にタイトル「東西横貫公路」の写真があって、写真の中にアミ族の伝統服装を着る女子二人が東西横貫公路の看板の下に立っている。また参の四「勤奮富裕的日子(日本語訳:勤勉富裕の日々)」の中に原住民族豊年祭の写真を置かれた。五年生前学期の社会科目の教科書には「中華民族各宗族分布図」があって、台湾の位置に標示されるのは台湾山胞で、使われたのは伝統服装を着る原住民だったのである。

中学校時代、原住民に関する内容は一年生後学期の地理科目の教科書しか出てこない。第一課「南部地区<sup>44</sup>」の内容には「族系很多 人口外移」というタイトルの下に短くこう書かれていた「.....由於地形崎嶇阻隔, 很多族系, 如苗、僛、黎、傣、僮、臺灣山胞等, 仍然保持傳統的生活方式。.....(日本語訳:地形によってたくさんの族系がまだ伝統的に過ごしている、例えば苗、僛、黎、傣、僮、台湾山胞など)」。ほかにはほとんど写真とキャプションを使って原住民に言及して、そして使った写真はほとんど伝統的な服装を着る原住民或いは祭典で、ついでにキャプションは各族の服装と文化の特徴を説明する。それ以外に、「台湾山胞分布図」によって原住民族の各族群の所在地域を説明する(当時の原住民族はまだ九族だったのである)。

前述の教科書の内容をまとめてみれば、政府の漢人文化の思惟と立場によって構築された原住民族は「残忍」「教育を受けるべき」「生活貧乏」「悪習改善し難い」「暮らし方が伝統的(服装、祭典、獵、文物)」という「落後」「低い」「弱い」のイメージをする、そしてまた漢人の文化価値観を標準として少数の原住民が「新奇な怪獣」と見なされて、所在ま

<sup>43</sup> その内容には直接に「山胞」と指さないにもかかわらず、代わりに「山地の住民」という言葉で原住民は山地社區の問題とメタファーにした。

<sup>44</sup> 1993年1月に国立編譯館によって改版された中学校の地理教科書第二冊は主に「本国地理」について書かれた。当時の「本国地理」とは中国大陸を中心に六つの地区(東北、塞北、西部、北部、中部、南部)というのである。台湾の位置は南部にあるので、「南部地区」に編入された。

でも地図によって教えられていた。しかし、静態的な教科書内容と写真に比べると、漢人の主観的な立場と文化思惟を主流にする社会大衆が原住民に対する認知の傾向の影響性がなめられないと思う。家の大人、学校の先生、同輩やマスメディアなどを含めて長期に原住民を汚名にする雰囲気を引き起こしたり助長したりしていると気がする。原住民族でも、その雰囲気に影響されると思われる。

## (二) マスメディア：社会価値観の映り

マスメディアはデジタルと印刷を分けているが、資料を歴史的に捜査する難易度及び完備さからいえば、本文では印刷メディアのほうを選んで新聞（聯合報）を例として説明しよう。またこの章節のポイントは報道内容の比較に注目するではなくて、当代の台湾社会に大衆は原住民に対する認知の傾向とメディアによって構築された原住民のイメージを表すことに注目したい。

王嵩音（1996：65）の調査によって、民国70年代以前原住民の行政に関する報道が多くて、次には文化面と原住民問題に関する報道で、70年代には新聞の中で原住民に関する報道が原住民問題のほうが多くて、次には原住民の行政、社会運動、文化、都市原住民に関する報道で、70年代以後常に出てくるのは原住民の行政、原住民問題、文化、社会運動、名人の紹介という順番によって報道された。報道の数量からいうと一番多いのは「原住民の行政」「原住民問題」「文化」など三つの方面だと分かれるのである。今までも印刷メディアは原住民に関することを報道する時に前述の範囲に抜けられない（蘇雅蓉，2005）。実際に「原住民・山地人・山胞」をキーワードとして聯合知識庫－聯合報系知識庫を捜査すると、1951年<sup>45</sup>から2009年まで見つけたのは61456件があつて、タイトルを概略に閲覧すると王嵩音の調査結果<sup>46</sup>とほとんど一致することが分かる。原住民に関する報道を総合でみれば、行政方面の報道が政治人物と候補者の以外に、大多数の内容は「原住民の生活、経済、医療及び教育状況を改善・関心する」と「原住民の主権を尊重する」などに偏る。文化方面の報道では「伝統」「踊り」「祭典」「文物の展覧」などを中心にする。原住民問題方面の報道では「偏差行為」「家庭不健全」「大酒を食らう」「違法に山地と原始林を開発する」などを中心にする。

私は確定できないのは、社会大衆がメディアに影響を与えるのか、或いはメディアが社

---

<sup>45</sup> 聯合知識庫 <http://udndata.com/>。聯合報は1951年に創刊した。

<sup>46</sup> 簡略に王嵩音の分類（原住民行政、社会運動、文化、都市原住民、人物紹介）によって新聞記事のタイトルを概観してから、「原住民行政」、「原住民問題」、「文化」に関する記事の量が圧倒的に多かった（実際に王嵩音の分類によって記事を分類しにくい。なぜかどういふとある記事が二つの分類に関わつたし、ある記事がどうしても分類できないというのである。ただし、分類の基準を注目するのは本文の重点ではないので、ここで特に「簡略に概観した」結果を示すと強調した）。

会の大衆うに影響を与えるのかというのである。しかしメディアによって人間が認知の枠組みを構築されるし、メディアが社会大衆の価値観の映りともいえる。メディアの報道を読めば、社会の大衆が上から下に原住民を見る角度と特別な目線だということをごだいぶ分かってくる。簡単な事例を幾つか挙げてみよう。私の家族が原住民に対してまだ「大酒を食らう」「複雑な男女関係」「偏差行為」というところを認知しているので、原住民のことに言及すると、最後には「原住民だからこそ」という結論を出てくる。ある友達の家族が原住民との結婚を失敗してしまったので、その思い出を提起したらついでに以下の結論を出した、「原住民だから信頼できないと言ったのに...今度こそ絶対原住民と付き合わない」。友人と遊びに行き、お酒を飲みながらお喋りする場合に、もし原住民の人がいれば、「原住民だからよく飲めるでしょ」という話を絶対誰かの口から言い出されて現場を盛り上がられていくなど、このような事例がまだたくさんある。これらの事例の中に、深刻な傷害を造成するかどうかをまわなくても、原因は「個人の行為」の代わりにすべて「族群血縁のせい」と言われた。

こんな成長の背景で影響を受けられないとはありえないが、「族群血縁のせい」という出発点から原住民を見る立場から抜け出して、好意や関心を内包する「プラスの指標」を持ちながら見てみたいと企むのである。例えば、「原住民全員はそうではない」、「社会地位を高く、お酒を飲まなくて、ビンロウを食べないという原住民の親がいる」、「中文を話す時に全然なまりが付いていない」、「経済状況が良い」などである。しかし、東海大学日文系大学院に入ってから意識したのは、善意を持って受け入れたプラスの指標は皮肉にマイナスの指標と同じだということである。分からないのは漢人の主観的な立場と文化思惟を出発点としてプラスの指標を設立されたというのだ——中文を話す時になまりがなく、お酒を飲まなくてビンロウを食べないというのは「一般的」な原住民ではない。親の社会地位が高いなら、子供が「偏差行為」を出てない——マイナスの指標は直接に原住民を異族として排除する意味を内包するが、私がいう「プラスの指標」は「漢化程度の高低」という意味を隠喩にして、「原住民」を低等の族群と見なしてから、漢化される者が漢化の等級（学歴の高低、なまりの有無、家庭状況など）によって分けてそして漢人の中に入れ込みたいと企んでいた。簡単に言うと、こっちに近づけてと他人を要求したまま、自分がどうしても動かなかった。

漢人を中心にする価値観と認知の角度に長期的に沈み込んで、無意識に原住民に差別の目線を投げて、或いは圧迫者になったかもしれないと意識して、心の奥には不安と懸念を感じた——無意識的な圧迫状態によって傷害を造成するかどうかに対して不安を感じて、どうやって自分が圧迫者にならないように意識するかと懸念を感じた。不安と懸念から脱出する前に、原住民族の価値観と認知の角度を近づいてみたいと決めても、近づいて行く途中で不安と懸念を脱出できる仕方を見つけてみたいこの時に、もうひとつ困られる難題が出てきた——「研究」と「生活」の場とそのキャラクタを切り換えることである。

### 三、院生という身分

勉強を好きだから学校に戻るではないし（勉強を好きでなければ学校に戻れないというルールがないと分かった）、就職の経験があったので学校に戻ることによって職場の新米になることを避けて仕事を見つけない気まずさを逃げるのではないし（仕事を見つけない時に気まずさを感じて或いは頭を上げられないというルールがないと分かった）、ただいくら以上の状況になっても「大学院生」という輪光を被られる時に嫌だと思うより楽のである（確かに私は院生—大学院の学生である）。

最初、「院生」という「輪光」がとても輝いて、特に父がその輝きを見せることが好きだったのである。しかし、その「輪光」を三年間続いて輝いてから、光が暗くなり始めた。「輪光」が暗くて古いと見えるのに、逆にもっとたくさんの関心を集めた。それに対して、その暗い光でも嫌味を招いてきた。よく「卒業したか、『論文』は今どうだったか」と聞かれて、関心と嫌味を雑ざって私に襲来する時、常にその「輪光」を捨てたいと思っていたが、執拗に（自分に、「論文」に、社会に）負けたくないなので、周りからきた注目と心の奥からきたストレスを無視するふりをしていた。

ほぼ四年間の間にいろいろな場合に適当な時機が見つめて「輪光」をつけるかつかないかと決めることを学んでいた。例えば、友人とお喋りする時、もし「輪光」をつけないと意見をどんどん出す私が友人の疑いの目で見られる。家族と一緒にテレビニュースを見る時、もし「輪光」をつけないと報道に対して批判の意見をどんどん出す私が家族に「勉強で頭が狂っていたか」と言われる。彼氏と話す時、もし「輪光」をつけると彼氏に「現実を考えずに理想ばかり考えると、腹をこしらえられないよ」と言われる。元同僚と会う時、「輪光」をつけてもつけなくても『論文』のテーマは何ですか、日本語が上手になったでしょう」と聞かれる。だんだん、いつつけるか、いつつかないかと決める時に、頭がもっとはっきりになってきた。ただし、やっぱり言いたいのは、院生は人間で、普通の人間で、頭が狂ってないし、判断が間違った時もあるし、模範でもないし、社会に対して貢献があった研究員でもないし、ただ研究と貢献についてまだ学習している学生だったのである。ちなみに、私が所属する学科の修士課程は日本語と文法を中心に研究するのではない。

ある場合、特に「研究」と関係がある場合には、その「輪光」をつけたほうがいいのか、つけないほうがいいのかとよく分からなかった。つまり、「研究」と「生活」の場景とそのキャラクタを切り換える時に何の基準に基づいていたか。

## (一) 「研究」か、それとも関係付けと維持か？

例えば、もし「研究」とはある人・人たちを見つけて、インタビューしたりアンケートをしたりしてから「論文」を発表し終わった後に、ついでは向こうとの関係が終わるといふことだったら、この過程によって作者が新たな啓発、感想、人生の体験と学歴証明書を得られることに対して、訪問者の側が何を得的のか。作者の感謝か、作者の助けか、それとも「論文」の発表によって訪問者の生活と考えが変わってきたか、或いは「論文」の作者が訪問者の人生の中に去っていた一人の客みみたいな存在だけで、思い出しか残っていないか。ではその「論文」と書く過程は一体何だったのか。何の意味だったのか。前述というのは『論文』を書かないと卒業できない」という事実を認めてからずっと頭の中にある疑問だったのである。しかしそういう考えは質の研究と量の研究の差異と研究の倫理というのと絶対的な関連性がない。

もう一度学校に戻る前に考えたのは、現代社会にはなぜ人間関係が薄くなってきたか。それは社会が進歩した表象だったのか。或いは「現代」とはそういうことだったのか。その時答えが見つけなかった。ここに入った後、答えかもしれないものを見つけた。それはプロジェクトの参加によって、濃厚な人間関係がまだ存在しているのである。そして人と人の関係についてたくさんの角度から観察できると気が付いたが、それらの角度で見ていたものが「論文」の形に通して現れるかと実に疑問を持つ。まずは自分の表現力、次は「読者」の解読力に対して疑わしい点がたくさんあると思う。適切に各観点の意見（私の中にある観点とか他人に通して聞いた観点とか）を著せないという疑いの目で自分を見ているし、「読者」がどう解読するかに対して「心配しても役にたたないと知っているのに<sup>47</sup>」という心配性を持っている。いくら考えても他人に対する疑いを晴らさないと「論文」を書けないので晴らしたが、自分に対する疑いを晴らせるように気をつけて繰り返して考えてから書かないといけない。

「論文」はとても個人的、主観的、主体性つきのものだとしても、作者の一人によって完成できるものではない、またたくさんの人の貢献、演繹と感情などを完全に文字の形に転化して保存できないので、「論文」の構成、取材と書く時に、自分と「研究」の間にどんな距離を守るべきか、どんな役割でいつ「研究」の中に入ったほうがいいのかと考えている。個人の立場からいけば、「研究」をやると思わなくて、訪問者或いは協力者と関係付けたり対話したり交流したりしている（関係付けと対話交流の進行が持続の状態だと期待している）が、訪問者或いは協力者にとって、私は「研究」をやっていると思われた。しつこいかもしれないが、自分が「研究」をやっていないとの主張に拘っている。もっと詳

---

<sup>47</sup> 読者は文章を読んで勝手に意味を取って解釈する自由があるので、文章の作者でもその自由を干渉する権利がない（1968年にロラン・バルトが言った「作者の死」(the death of the author)という概念に類似する)。

しいという、「学術の研究」より関係付けと対話交流のほうが先のことだったと思う。つまり、「研究」をとめてもかまわないが、関係付けと対話交流のほうが続けて維持していきたい<sup>48</sup>。違う角度から見ると、私が「研究」をやっているともいえる、「傾聴と反省が中心としての研究」だったのである。

ただ他人（訪問者・協力者）と干渉すると、考えないといけないのは自分と他人（訪問者・協力者）の間に起こしたことだけではなくて、どう「他人（訪問者・協力者）の話を使う」ということに対する態度でも重視しなければならない。

## （二）学術か、それとも利用か

ある原住民に関するネットの論壇が成立したばかりのときに、その論壇の創設者が私になぜ入るか聞いた。「もし卒業とか論文のために入って、卒業してから原住民に対して関心がなくなる方は、その加入に対してこちらは歓迎しない」という意味の話を向こうが言った。その場にいるのは四人で、創設者の以外に私を含めて三人とも原住民ではない、つまり漢人だったのである。二人の友人の感じを代弁できないが、私の場合だったらちょっとギョツとした。なぜかという、向こうの聞き方が「疑い気味」だったのである。違う角度からいうと、漢人が原住民族のコミュニティーに入る動機を疑われるのも由来がある<sup>49</sup>ではないかと思われるが、当時の疑問なのは、原住民族議題に関心を持つと原住民族議題を研究テーマにする、この二つの差異は何か。「単純的な関心」と「関心の言い訳をして実際には利用する」の違いか。それとも時間の長短によって相手が原住民に対しては関心を持つか利用するかと評価するか。また「利用」とは何のことか。「関心」とは何のことか。

また、協力者 M と一緒に話し合いの間に、ある日に友人のところへ遊びに行かないかと M に誘われた。そのきっかけは M が自分と部落で育てられた原住民との違いを説明した時に、よくその二人の友人のことを私に提起した（一人は昔から M に通して知り合ったが、もう一人は今回初めて出会った）。友人と約束がある日に、M から私を誘って一緒に会いに行った。飲みながらお喋りしているうちに、彼らが私の「論文」に対して少しの関心を持つし、初めて出会った方に実家の人口流出問題についての見方と将来卒業したら実家に戻って就職するかどうかなどと聞かれた。向こうとの話し合いがとても楽しかったが、な

<sup>48</sup> 元々本本文の協力者は二人の対象と設定したが、このこだわり（「論文」「研究」というものを長く付き合える自信がなさそうな人間関係に加えたくない）によって最後には一人になられた。

<sup>49</sup> 孫大川（1996）：〈碾米廠的門檻〉。見孫大川主編（2003）：《台灣原住民族漢語文學選集—散文卷（上）》、台北：印刻。81-83。

ぜ急に「気が利くので、騙されると……」という非完成的な話を言ったかと分からなかった。その後の話を待っているのに、向こうが黙ったままに何も言わずに友にお酒を飲みすぎて馬鹿な話を言うなといわれたので、その話の意味が分からないままに残した。多分向こうが本当に酔っ払ったかもしれないし、私がかうそをついたと思われた（実家に戻って就職するとの話しか原住民族に関する話したとの話しか）かもしれないが、ここでそういうことを提起すると断章で意味を取るともいえる、ただし私は向こうの用意に対して疑い目で見るという意味が全然ないのである。それにその話が会話の中で前後との関連性があまりないので、向こうに疑われたと断章で意味を取りたくない。ここで提起の用意は、その話を聞いた時にすぐ前述の創設者に聞かれた質問を連想して、また「利用」と「関心」は何かという問題を再思考すると説明したいだけだったのである。

そして自分らしい結果を作り出した。それは「論文」のことを関係付けたばかりの人たちに置かないという結論である。その結論はきっと疑われたのは関係付けたばかりではない人たちに置くのは大丈夫だと意味するか、また、長い間に知り合った人が協力者として設定するという事で本文結果の客観性と有効性に対して影響を与えるかどうかのことである。しかし長く付き合った人たちを「論文」の中に「安心的に利用される」ではなく、「関係を続けて維持できる」こそ安心的に利用する最大の原因だと言いたかった。「関係」は「論文」「研究」によって中断されるとか阻害されるとかできないということは、「論文」を始める前に決まった最低限度の条件だったのである（「論文」書きの立場からいうと、動機が善意でも悪意でも結局「利用」のカテゴリに置かれるなら、「利用」の意義についてしつこく探究する必要もなくなると思う）。そして、有効性に関する疑問の答えは「人間でも他人と違って特有の成長背景によって作られた経験と解釈を持っている<sup>50</sup>」ということだから、環境によって育てられた経験と語り方は本文が注目したいところで、族群の名称によって個人の特異性が被られたという枠組みから跳び出せると企んでいる。

---

<sup>50</sup> 姚美華、胡幼慧（2008）：〈一些質性方法上的思考：信度與效度？如何抽樣？如何收集資料、登錄與分析〉。胡幼慧編、《質性研究-理論、方法及本土女性研究實例》。台北：巨流。118。

● 彼女のストーリー——私たちの対話

: 初めて他人のストーリーを書くなんて、とても不安

Mは昔からの顔馴染みである。実際に小学校一年生にはMとクラスメートだったが、その時Mに対してあまり印象が残っていなかった。三年生になって、Mに対してたまには授業が終わった時一緒に遊んだとかの印象を残した（逆にMに聞いたが、その時まだ私に対して印象が残っていなかった）。優等生のクラスを編成するためかどうか分からないが、五年生になる前に、四年生の全員が強い太陽の下の運動場にあちこちに呼ばれてきた（元々甲、乙、丙、丁四班の学生を「ばらばらに」分けて新たな四班を組み合わせる）。私とMが二人とも認める出会いの時点はあちこちに呼ばれたり列に並びなさいと言われてたりした運動場の上に丁班に配れてから長くて待たれた時だったのである。その時から今まで、お互いのライフの中にいたりきたりして、勉強のために私は先に実家を離れても、常に連絡している。

「山」プロジェクトに参加してから、部落と住民の接触と交流によって思い出されたのはMと全然そういうふう交流してなかった。例えば、「伝統」「生まれ付き（歌舞、体力、飲酒の量など）」というイメージ以外の「原住民」に関する話題について話さなかった。なぜこうなるのはMのいろいろな行いと家庭の背景が私とそんなに違ってなくて、印象的な原住民と私のようにそんなに「違い」ではないということの関係で、私が「好奇」を感じないか。それともほぼ二十年ぐらいの間にそのような話のきっかけがないだけだったのか。ということで、Mの同意を得てから、「論文」を話のきっかけにすると決めた。Mは私の協力者として、私と一緒に「伝統」「生まれ付き（歌舞、体力、飲酒の量など）」というイメージではない「原住民」に関する話題について「対話」と「インタビュー」を行った。

なぜ「対話」と「インタビュー」を別々に区分するか。形式からいうと、私とMの会話が二つの段階があるのだったのである。まずは私たちの過去（共同的の記憶と個人的の記憶）を振り返りながら延伸した「対話」——質問を設定せずに「過去を振り返る」という主題に沿って普段のお喋りをするように行った（「過去を振り返る」ために、一緒にお互いの写真集をみたり、二人生まれてから今までの年表を作ったりしていた。写真と年表の中から、いろいろなことを思い出して、その中からいくつかの疑問もうみだした）。場所が決まっていない、主に喫茶店で行ったが、たまには露天の運動場とか古い鉄道に沿って散歩しながら行っていた。時間はほとんど夜のほうに、Mの仕事がひける時間に従って行った。回数だったら私の記録によって、長時間（一時間以上）の会話回数が10～15回ぐらいに行き、短時間（一時間以内）の会話回数が5～10回ぐらいに行きと書かれてある。会話の現場で質問を先に設定しないまま、会話中の自分とMの心境を配慮するために（会話中に「録音」ということはあまりにも不自然だったので、会話の進行に影響を与えると

心配する——確かに「インタビュー」の時に「録音」によって会話の進行が影響された)、ノートでも録音でもしなくて、会話の現場を離れてから記憶に沿ってパソコンで印象を残す会話と私の感想を記録した。そういうことでもう一つの会話形式、唯一の「インタビュー」を引き出した。

(Mの同意を得てから)録音と撮影の影響で、「インタビュー」を行う時の雰囲気が「対話」より形式的、厳格になっていた。もしかして先に用意した質問のリストが会話の内容を硬くさせたかもしれない。質問のリストとは私が「対話」についての記録の中からまとめてきたもので、記録の内容とMの話しとその意思の間に違いとか誤解とかあるかどうかに対して対照するために作られたのだ、つまりそれを通してMの意思を確認して、誤解される可能性を減らしていくともいえる。場所はある喫茶店の2階の露天席で行って、途中で店員さんが来る、デジカメのパワーがなくなる、ほかのお客さんの騒音が大きすぎるなどの状況を起こして何回も中断された。(録音したファイルによって計算されてから)総計でほぼ二時間を使っていた。その間に私はMの知り合いとしても傍から見ている観察者としても、会話に参加しながら会話を観察していた。

まずMの家族から説明する。Mの父は部落で育てられた原住民で、母は都市で育てられた漢人(名家の出)である。Mによれば、両親のような組合はその年代でとても珍しい、50、60年前に、原住民と漢人の通婚は男性が漢人で、女性が原住民だというモデルが多くて、また男性のほうが外省人の老兵が多いそうである。昔外省の老兵と原住民の女性が通婚する事例について、実はここに入ってから初めてそういう認識があった。実家で或いは西岸で勉強の時、別にそんな「特殊」の組合に注目する記憶がなかった、ただし男性が原住民で、女性が漢人だという組合は本当に珍しくて、今まで出会ったのは二つのカップルしかいない、Mの両親はその中の一つである<sup>51</sup>。そんな一般的ではない組合を促す原因はきっと存在する、或は何も原因もないが、本文の注目したいところではないのでここで深く言及しない。親の二人とも小さいから両親を失って、自分の努力によって良い学歴と仕事を得た。そして子供に良い教育の環境を与えるという理由で結婚の後に都市へ引越した。部落で暮らしたい父が就職のために毎日部落と都市の家の間に行ったり来たりしていてもかまわなくて、年を取ったらまた部落に戻れば良いそうだったのである。苦境で育てられた経験で親が裕福に暮らせるMに対する期待と要求を相対的に高めてきた、特に母のほうだったのである。小さいから、いつも母の要求に達さないし、母の愛を得ないと思いながら、自分に対してだんだん自信を失っていて劣等感を生じた。近年までMが実家に戻って就職してから、母から長年以来的努力を見ていたがただ心の中に置いたままだけだと告白されたので、これこそMがだんだん母に対する心の「結び」を解け始めていた。また、親ともキリスト教を信仰するので、生まれてからMもあたりまえに聖書と詩歌に囲まれて育った。しかし、そのあたりまえによって何度もMが礼拝のことに対して対抗されて、

<sup>51</sup> もう一つのカップルは蘭嶼という台湾の離島で民宿の経営によって有名になるオーナーとその妻である(参考資料: 女人魚民宿のサイト <http://www.mulita.com.tw/>)。

「信仰」も失われていた。初めて実家から離れて北部へ勉強しに行った時、M が暫く自動的に教会に寄っていなかった。この二、三年まで、北部の仕事をやめて実家に帰って、あるきっかけで従来の教会を変わってから、改めて「信仰」をみる角度を見つけた。

会話中たくさん延伸してきた話題の中に、原住民の祖霊信仰とキリスト教の信仰についての話しに対して私が深く印象を残した。初めて正式的に M と私が本文を書く動機と背景を説明する時、ついでに「山」プロジェクトを通して部落での交流経験、例えば教会の礼拝とか祭典とかの参加経験も含めて簡単に M とシェアした。その後、M が祖霊信仰とキリスト教の信仰についての考え方を話した。キリスト教の中にはたくさんの教派と系統があって、現在の教派の教義からみると、天地の間に神様が一人しかいないで、ほかには存在していないと M がそう言った。ある教会とか教派とかそうでは思わなくて、昔から祖先がそうするので祖霊信仰を伝統だと見なしている。しかし M にとって、もし両方が衝突しないなら、どうして祖霊を拝むか、「拝む」対象は神様しかいないので、その以外の対象を「拝む」とかある「儀式」をするならその対象を神様として拝んでいたのではないか。ということで、M が今の信仰に対する認識は祖霊信仰とキリスト教の信仰がお互いに衝突していると分かれる。M がアミ族の豊年祭とフヌン族の打耳祭を例として挙げた。祭典の中に歌ったり踊ったりするのは別にいいが、その前にお酒撒き及び祖霊拝みなどの儀式を行うこととか祭典後には飲みすぎで妥当できない行為を起こることとか M にとって認められないそうである。M と確認した上で M がこの二、三年で教会を変わってから前述の見方を持っていたのだと分かった。キリスト教の信仰を確定したことが M に対して人生の変わりに違いない一方、親が教育では長期的に漢人の文化を中心に M を育てるのも変わりを促す重要な背景だったのである。幼い時にあまり父と一緒に部落に戻らないし、父も別に M が族語と部落の文化を習うと要求していない、部落の重大な祝い事にもあまり参加しない。父に従って部落の教会へ行って礼拝をしたが、部落の教会でほとんど族語で伝道するので、M が必ず父の訳に頼らないといけないう原因で面倒だと思う M が父の誘い（部落の教会で礼拝をする）を拒否し始めた。

原住民と漢人の血統をともに備えて、小さいときから自分の原住民としての存在を分かっているにもかかわらず、父のほうで族語と文化を習うと要求しないやり方で、M は私と顔が違った漢人だと見なされた。記憶の中では、大学に入ってから、M はサークル活動に通してたくさんの原住民の人たちと知り合った。その原住民関係のサークルに入るきっかけについて M に聞いた（今度は初めて M にその質問を聞いた。以前 M が原住民関係のサークルに参加することに対して当たり前だと思うので、その質問に関しては全然提起するきっかけもなかった）。M の答えにちょっとびっくりされた。生まれてから都市に暮らして、父と部落に戻る時に族語でも話せないし部落の文化でも分からない自分に対して卑下していたので、親戚の子供以外に、あまり原住民の友達がいなかった。その原因で、大学に入ってからたくさんの原住民族の人たちと知り合いになりたくて、ほかの族群の原住民と自分と似てるかどうかを知りたいと思い、原住民を対象として応募するサークルに入っ

た。

加入してからほかの族群の文化についてちょっと習って、たくさんの人と出会ったと M がそう言った。しかし最初には混血の自分に対して疑いを持っていた。漢人とは付き合う時に顔立ちによって原住民と見なされたが、サークルの中にいる大多数の部落出身の原住民青年と付き合う時に、M が部落のストーリーと生活に対してほとんど分からないので、時々部落の青年に「まさかこんなことも分からないか、関心を持たないか」と揶揄されて漢人と見なされた（彼らがこう言ったのは悪意がないと M が特に強調した）。そう言われるたびにどう思ったか、或いはどう返事したかと M に聞いた。M がいつも正直に分からないのでサークルに参加したのだと返事したと言った。また M にその後には部落について学習への意欲を引き出されるかと聞いた。M が笑いながら実はなかったと返事した。原住民族の文化について真剣に学習するのを考えずに、ただ幼い時からずっと市区で暮らしていて、あまり原住民の友達がないので、サークルに入って単純に自分の原住民の人間関係を広くなりたいだけだと M がそう言った。

父からたくさんの子どもの原住民の伝統文化の見方をもらえないので、父に「普通の子供」と見なされて教育を受けられた（ここでの「普通の子供」が漢人の子供という隠喩を含めると分かれる。つまり、漢人の文化を中心にする社会の中で、皆と同じだったら「普通」と意味する）と M が言った。族語でも話せずに、父も要求しないので、相対的に昔の伝統知識について M が全く分からないし、原住民の伝統文化についてもよく分からない。「原住民」ということが M に対して「血縁」だと見なして、その「血縁」で自分の顔立ちが「原住民」と見える、ただし内面的に自分が本当の原住民ではないかとよく疑っている。

他人の目から見るとどうなるかと分からないが、自分のアイデンティティーの中に原住民の部分を少しだけ占めてあると M が言った。部落で育てられないので、部落の伝統的な「同心協力」という精神に対してあまり納得できないし考え方も持ってない、部落に戻って親戚に挨拶しに行くのはお正月の時だけでほかの時間にはほとんど市区にいる、ということで M にとって「原住民」とは血液の中の一部だけで、顔立ちが「原住民」と見えるとの意味だったのである。

原住民の文化に対してよく分からないので、復興することがほかの能力を持つ原住民に任せばいいと M がそう思っている。もし原住民ではないなら、勉強の間に或いはあることを遭った時に今より順調にいけるかもしれないということを M が想像してあった。M の仮想の中で、原住民ではないなら今よりもっと順調にいけるわけではないが、台湾では原住民族がやはり少数民族なので、そして自分の顔立ちも（原住民の顔と）はっきりしているので、「貴方は原住民ですか」と聞かれるたびに、いつも相手がきっと「原住民」から悪いことを連想していると想像してしまった。相手が悪意でもないにもかかわらず、きっと悪い事（原住民関係）と自分の事を結び付けられたと M 自身が絶対そう思った。そう思う

のは自信を持たないと関係がある一方、もし原住民ではないなら、ある事が起こらないかもしれないと M がそう言った。

ついでに早期 (M が経験した) 原住民加分制度について M が自分の意見も述べた。政府の好意だと否定できないが、この制度では原住民の間に差異も存在することを配慮していないと M が疑いを持った。ある原住民にとって役に立つことに対して、ある原住民にとって、特に部落或いは奥山に育てられた子たちにとって逆にプレッシャーをかけることである。加分制度によって市区の良い学校の良いクラスに入ったら、都市の生活を慣れるために長い時間をかけて、或いはどうしても慣れない人もいて、その間にストレスをかけられた。そして、社会には原住民に対してステレオタイプを持つ人たちに加えて、間接的に心の中に劣等感、無形の卑下を形成されながら、自身のことに対しても疑いを生じて、自分に「原住民だから笑われているか」という帽子も被った。それは長い間に社会が原住民にかけたプレッシャーだと M が言った。

どうして原住民は大酒を食らうかというのも同じだと M がまた例を挙げた。部落ではとても才能を持つ原住民がたくさんいて、彼らが都市へ発展しに行ったが、結局都市のルール (ここでは漢人を中心に作られたものだといえる) に適応できないので、才能を伸ばさずまま憂鬱に部落に帰ってお酒に通して自分を麻痺するしかできないそうだったのである。ここに言ったところ、突然になぜ原住民は小米酒が大好きか、それは安いんだからだと M が冗談めかして言った。また、現在の台湾では原住民に対してまだステレオタイプを持つ一方、いくら原住民族の中にたくさん的人是が才能があっても、ニューメディアはそれに関して興味を持っていないらしい。たくさんの原住民が博士の学歴を持つ、或いは各行各业ではよく発展しているのに、現代のニュースの主流にはその方面の原住民を注目してくれないと M がそういう状況を気付いた。それは今の政権を持つ者は漢人のほうが多いという原因ではないかと M がそう言った。

「たくさんの人を集めれば力も強くなる。その人たちが良いか悪いかにもかかわらず、たくさんいるなら力が強くなる。これもどうして父が『原住民は台湾の真の主人だ』と言ったたびに、いつも『そうだとしても、力を持っていないのは事実だ』と父に返事するのだ。父が常に外省人と本省人のせいで我々の原住民が山の奥まで追い出されたと言ったが、いつもそれで、どうするかと返事した。原住民こそ台湾の真の主人だと口だけで重ねて言ったばかりなのに、それでは力を出してよと私が言い返した。そうではないか、ずっとそこで台湾の主人だと主張するだけで、それでは何もしていない。力なんか持っていない主人に対して、誰も認めてくれないじゃない... (略) ...だが可笑しいなのは、観光の活動とか何とかある時、また原住民の歌と踊りを出して、それは目立って利用ではないか... (略) ...国際の活動なんかある時、また原住民を出してやらせてなんで、その後はどうなるか?」

というのはMの見方である。この話からみると、少数の原住民（例えばMの父）によって積極的に原住民こそ台湾の真の主人だと宣言された主張と台湾では原住民の力の弱さの間に、その力が対等ではないと感じながら、マスメディアがあまり原住民の才能に注目してくれない現状と原住民の伝統文化が頻繁に消費されたり利用されたりしている事実の間に、その落差に対して不平やるかたない、とMの気持ちが分かれる。

前述の話題以外、お互いにも東部出身の人として別々西部と北部の大都市へ行って、そこでの勉強と暮らしの経験を交流した。北部と西部に対して、東部がいつも辺縁地区と看做された。東部の子が西部と北部の学校クラスに入ったら、いつも騒ぎを招いて、まるで新奇なものをクラスに出ていたみたいだったのである。「違う目で見られる」のは別にいいと思うが、出身地の名称と地理的な所在の位置を間違われたのは、「重視しなくてもいい」と意味するではないかと思われる。まるで私たちは珍しいだけで、それ以上興味を持っていないし、ステレオタイプを持ちながら（例えばすべての東部の人が原住民だ）無理やり私たちにレッテルを貼りがっただけだったのである。私よりMのほうが原住民の顔立ちと身分という目立ちを持てばこそ、マイナスの原住民のステレオタイプから抜けられにくくなってきた。そのステレオタイプを剥がせるために、Mができるだけに最新のインフォメーションを受け取っている、例えば皆が何を話しているか、今何が流行っているか、それについてある程度 of 理解を持ったほうが良いと思う同時に、「インターネット」に通して都市と田舎の差異と距離を消せるとMが言った。

ところで、今回の会話によってMが一つの点に基づいて話しているということに気付いた。それは信仰に対して迷わずに、自分なりの仕方を見つけてそれに従って信仰している、また信仰によって自信を持たせて自分のことも素直に受け入れられるということである。2004年に大学を卒業して実家に戻って就職して、その時にMが自分と生活に対してまだたくさんの期待とやりたいことを持っているので、2005年に再び北部へ行って、元々頭の中に置いたこと（良いでも良くないでも）をさんざん実行してから、2007年2月に満足的に実家に戻った。その後、母が自由に教会を選んでも良い許可をもらった上で、Mが小さいから通うイギリス教派の代わりに韓国教派の教会を選んでそこで礼拝をすると決定して、そして2009年1月にその教会のスタッフになる——2007年に新しい教会へ行き始めてから今までこの間は、Mにとって人生最大の変化時期だったのである。2002年から2003年まで交換留学生として韓国で一年暮らしたという特別な経験があったが、それで人生が変わるとはいえないそうである。

以上はまとめた私たちの対話で、それに私の目線から見た彼女のストーリーである。

「私たちの対話」の中に出ていたたくさんの「彼女のストーリー」に関する部分がこの章節に入っていない、つまり、この章節は実際の対話内容の通りに書かれていない。「私の判断」によって省略された部分が、読者の貴方はここで見えない。

M の語りに沿ってここで一つの「彼女のストーリー」を書き出した。もし場所を変われば、別の「彼女のストーリー」を書き出す。中には出ている唯一つの文字起こしは、M が本文を通してとても伝えたいところだと感じたので、そのときの録音に基づいて一つずつの文字で再現した。転化した文字という形で M の声を伝えればいいと思う。

## ● そして

Mの語りを機に、私は自分の人生に沿って回顧して以下のように簡単にまとめた。

両親とも漢人（離島から台湾の本島に移民した漢人）だという環境に育てられて、家庭の中に自然的に漢人の文化を中心に継承しているということを見つけた。特に父権を象徴する漢人の男性（祖父と父）からたくさんの影響を与えられた（そういうことは漢人の女性—祖母と母からあまり影響を受けないと意味していない）、ただし成長の過程で、父権と象徴する漢人の男性（主な対象は父だ）とよく争いと対抗を起した。保守的な父から見ると、よく私とやさしい母とおとなしい兄弟たち、兄、姉と弟に比べて、私のほうがとても悪くて大人しくないと思った。私にとって、それらの争いと対抗をする理由とは、単純に私が言いたいことがあって、私が言い出した話と父の通り相違するということだったのである。その状況では私は実家から離れて西部で一人暮らしをしてから、性質が少しずつ収斂して、言い方も昔のように短気ではなくなった時まで、言いたいことを話して父とコミュニケーションをとりたかっただけだということを知ることができた。

しかし私の場合に対して、Mが生まれてから二つの文化と価値観及びその二つの文化と価値観の間に生じた衝突を受けなければいけない。彼女にとって、家庭教育は母の漢人の文化と価値観を中心に（父のほうもかなり漢人の文化と価値観を身につけるが、Mの話からいうと父より母のほうから影響を受けたそうである）実施するので、家庭の中に二つの文化と価値観の間に生じた衝突が薄くなったといえるが、そこからやはりMに「原住民ではないなら（漢人だとしたら）」という仮想的な質問を考えさせた。また信仰の方面では、信仰の意義を改めて構築することによって、Mに今頃の人生のバランスを見つけれられた。昔のように自信を持たないではなくなって、仕事でも才能を伸ばせる空間を見つけた。また母と何回の心を開いた談話に通しても自分に対する劣等感という束縛からだんだん解けていた。

私とMにとって、その会話とはシェアみたいなものということである。その間に、Mがそう私に言った。本文を機に、いろいろな忘れていたことを思い出して、昔の日記と写真集（Mと私の）を改めて読んでいた。そして、一緒に過ごした時間は彼女に楽しさをもたらせたり仕事のストレスを解消させたりしたとMが言った。こういう話を聞いてから、心の中に少しだけ重くならないと感じた。会話をする前にたくさんのことを考えた、例えば「論文」ということと「大学院生」という身分がMにとって生活的に面倒をかけるか、会話中にプレッシャーをかけるかなど。そして、Mが原住民関係のことについてあまり分かっていないので私に友人を紹介してあげようと言った理由は「論文」の件と「大学院生」の身分がMに悪い影響（例えば自分の話が本文に役に立たないと心配させた）を与えたと勝手に想像したが、最後のインタビューにMが私の想像のとおり思っていないと証明した。

原住民関係のことを分からないということに対して M の態度がとても平然としていた。部落の青年と付き合う時に漢人と看做されたのは違和感を持つが、それに対して M は気にしていない。この部分が家庭教育の中に父の役割にかかわると思われる。一方、幼い時から社会（漢人）と母からもたらされた劣等感が信仰の新義を見つけてからだんだん転化していると分かる。

自分と他人の対話を通して私のライフの一部分と私の目線からみた彼女のストーリーを著わした。しかし今までも分からないのはそれによって社会に対してどのぐらいの変化を起こすか、それによって小さいから社会から構築された計算できず測られない原住民に対する認知がどのぐらいの変化を起こしたかとのことである。それによって分かるのは今後の私或いは他人がこの記録された足跡が見えるということ、本文を通して漢人の主観的な立場と文化思惟によって構築された原住民に対する認知と対抗してみた足跡が見えることである。

もし始めていないなら、終わることもない。書き始めたので、最後には書くことが終わらないといけない。ただ終わる前に、私はためらった。本当にここで終わらせていかとためらっていた。なぜかという、言いたいことが全て言ったかと心配していた。読者の期待のように書かれたかと心配していた。

いずれにしても、最後の句点を書かないといけない。

## ● 「そして」の後に

パン屋さんの見習いで、約四年間をかけてパンの作り方を習ったので、よろしく。ほかの人より時間をかけたといっても、パンを作る技術がまだまだだめだったのである。

今日作ったこのミルフィーユ<sup>52</sup>は、いかがでしょうか。

私が作ったこのミルフィーユはたぶん売れないと思う。小麦粉を混ぜるときに、各材料の重さを量ることが忘れたまま、好きのように勝手に入れてしまったので、パイ皮のあるところが硬すぎて、あるところが柔らかすぎてしまった。また、バターをのせるときに、平均に力を使っていないので、あるところにバターをのせずぎて、あるところに少なすぎて、あるところにバターをのせることが忘れてしまった。その原因で、このミルフィーユを食べるときに、ある部分を食べるとさっぱりと感じられない、ある部分を食べると喉が渇くと感じるかもしれない。とにかく、このミルフィーユはバランスをとっていない、口に合わない状態である。

師匠たちにとってどう思われるか。「このパイはだめだ。そのまま出したらやばい。それによって、我々の名声と看板を壊される」というかもしれない。

しかし、私は確定できない気持ちを持って、きっとこのようなミルフィーユを好きな人がいると信じている。そんな人がどこにいると分からないまま、やっぱりこのミルフィーユを持ち出した。

---

<sup>52</sup> 「ミルフィーユ」という発想は同級生 J と阿川との三人の会話中から生み出したのである。

## 引用文献・引用資料

### 中文

#### 一、專書

1. 方永泉譯（保羅·弗雷勒 Paulo Freire 著）（2003）：《受壓迫者教育學》。台北：巨流。
2. 倪炎元（2003）：《再現的政治：台灣報紙媒體對「他者」建構的論述分析》。台北：韋伯。

#### 二、論文

1. 蘇雅蓉（2005）：〈「矮黑人」事件報導之論述分析〉，國立東華大學民族發展研究所碩士論文。

#### 三、教科書

1. 國立編譯館主編（1987）：《國民小學社會課本第三冊》。台北：國立編譯館。
2. 國立編譯館主編（1988）：《國民小學國語課本第五冊》。台北：國立編譯館。
3. 國立編譯館主編（1989）：《國民小學社會課本第六冊》。台北：國立編譯館。
4. 國立編譯館主編（1989）：《國民小學社會課本第七冊》。台北：國立編譯館。
5. 國立編譯館主編（1990）：《國民小學社會課本第八冊》。台北：國立編譯館。
6. 國立編譯館主編（1990）：《國民小學社會課本第九冊》。台北：國立編譯館。
7. 國立編譯館主編（1993）：《國民中學地理課本第二冊》。台北：國立編譯館。

## 参考文献・參考資料

### 中文

#### 一、專書

1. 王嵩音 (1996) : 《台灣原住民與新聞媒介—形象與再現》。台北：時英。
2. 孫大川 (1996) : <碾米廠的門檻>。見孫大川主編 (2003) : 《台灣原住民族漢語文學選集—散文卷 (上)》, 台北：印刻。81-83。
3. 姚美華、胡幼慧 (2008) : <一些質性方法上的思考：信度與效度？如何抽樣？如何收集資料、登錄與分析？>。見胡幼慧主編, 《質性研究-理論、方法及本土女性研究實例》。台北：巨流。117-132。
4. 蔡敏玲、余曉雯譯 (D. Jean Clandinin, F. Michael Connelly 著) (2003) : 《敘說探究：質性研究中的經驗與故事》。台北：心理。
5. 王勇智、鄧明宇合譯 (Catherine Kohler Riessman 著) (2003) : 《敘說分析》。台北：五南。
6. 丁興祥等譯 (Willaim Runyan 著) (2002) : 《生命史與心理傳記學—理論與方法的探索》。台北，遠流。
7. 王振寰、瞿海源主編 (2001) : 《增訂版：社會學與台灣社會》。台北：巨流。
8. 夏曉鵬 (2002) : 《流離尋岸—資本國際化下的「外籍新娘」現象》。台北：台灣社會研究雜誌社。

#### 二、論文

1. 陳雨嵐 (2008) : <台灣原住民圖書出版歷程之研究 (1980 至 2007 年)> , 南華大學出版與文化事業管理研究所碩士論文。
2. 何粵東 (2002) : <眾聲喧嘩與獨白：敘說學校生活故事> , 屏東師範學院國民教育研究所碩士論文。
3. 何婉如 (2006) : <迷路的大肚魚—一位女性研究生的自我追尋之旅> , 國立交通大學教育研究所碩士論文
4. 張佩涵 (2006) : <鹹魚復活記—從「勞動階級大學生求學經驗的探究」變形到「我的生命敘說」> , 國立交通大學教育研究所碩士論文
5. 顏如禎 (2005) : <裁縫師的女兒—以“乖”做為抗拒保護色的小學老師> , 輔仁大學心理學系碩士論文
6. 賴誠斌 (2004) : <自我敘說探究與生命轉化—發生在蘆荻社大的學習故事> , 輔仁大學心理學系博士論文
7. 蔡馨儀 (2010) : <第九章：豬的漫遊：走過心中所行之路>。見蔡馨儀<當豬遇見會計：敘說一位會計系學生轉化的歷程> , 東海大學會計學系碩士論文

### 三、期刊論文

1. 熊同鑫 (2001) : <窺、潰、饋：敘述我對生命史研究的理解>。《應用心理研究》，第 12 期，107-131。
2. 翁開誠 (2002) : <主體性的探究與實踐專題主編文>。《應用心理研究》，第 16 期，19-21。
3. 翁開誠 (2005) : <生命、書寫與心理健康專題主編文>。《應用心理研究》，第 25 期，27。
4. 胡紹嘉 (2005) : <于秘密之所探光：遭遇的書寫與描繪的自我>。《應用心理研究》，第 25 期，29-54。
5. 何粵東 (2005) : <敘說研究方法論初探>。《應用心理研究》，第 25 期，55-72。
6. 賴誠斌、丁興祥 (2005) : <自我書寫與生命創化：以蘆荻社大學員蕃薯的故事為例>。《應用心理研究》，第 25 期，73-114。
7. 鄧明宇 (2005) : <從沉淪走向能動：一個諮商實務工作者的自我敘說到社會實踐>。《應用心理研究》，第 25 期，115-142。
8. 林泉忠 (2010) : <哈日、親日、戀日？「邊陲東亞」的「日本情結」>。《思想》，第 14 期，139-159。

### 四、參考サイト・網路資料

1. 鄭玉卿教授 (民 93 年 11 月 27 日)。傳記的幻覺(the biographical illusion) Pierre Bourdieu 評論。台北市立教育大學教育學系文化認同經典讀書會，2009 年 11 月 23 日。取自：<http://www.tmue.edu.tw/~primary/culturereade/text1.htm>
2. 文藻外語學院網站 <http://www.wtuc.edu.tw/front/bin/home.phtml>
3. 高苑科技大學網站 <http://www.kyu.edu.tw/kyunew2/allkyu2x.html>
4. 國立台中技術學院網站 <http://www.ntit.edu.tw/>
5. 論文撰寫的基本格式(無日期)。論文寫作學習網。民 99 年 3 月 3 日。取自：<http://ebada.ath.cx/index.jsp>
6. 林天佑教授 (民 91 年)。APA 格式第五版。元智大學—圖書館—書目引用與管理。民 99 年 3 月 3 日。取自：<http://www.yzu.edu.tw/library/index.php/content/view/1075/598/>
7. 林天佑教授 (無日期)。APA 格式增訂事項—網路等電子化資料引用及參考文獻的寫法。元智大學—圖書館—書目引用與管理。民 99 年 3 月 3 日。取自：<http://www.yzu.edu.tw/library/index.php/content/view/1075/598/>
8. 國家圖書館全國碩博士論文資訊網 <http://etds.ncl.edu.tw/theabs/index.html>
9. 行政院原住民族委員會網站 <http://www.apc.gov.tw/main/>
10. 東海大学日本語文学系の公式サイト <http://www2.thu.edu.tw/~japan/>
11. 「ナヌムの家」日本語サイト <http://www.nanum.org/jp/index.html>

12. 「NGO 法人保見ヶ丘国際交流センター」のサイト <http://www.homigaoka.jp/>
13. 聯合知識庫 <http://udndata.com/>
14. 女人魚民宿 <http://www.mulita.com.tw/>
15. 林娟芬 (2000): <叙説分析與生命主題>。《神學與教會》, 第 25 期第 2 卷。  
取自 <http://www.tcs.org.tw/church/25.2/09.htm>

## 日文

### 専書

1. パウロ・フレイレ (小沢有作ほか訳) 『被抑圧者の教育学』 亜紀書房、1979 年。
2. 山田富秋編著 『ライフストーリーの社会学』 北樹出版、2005 年。
3. 保苺実 『ラディカル・オーラル・ヒストリー：オーストラリア先住民アボリジニの歴史実践—著者によるあとがき』 御茶の水書房、2004 年、P271～278。

添付資料一：

教えられた教科書（1986~1996）の中で「原住民」に言及された内容の整理表  
 在我使用過的教科書（1986~1996）當中與「原住民」相關之內容整理表格

學程科目	冊數年級	出版年	課文（內容）	圖
國小社會	第三冊二上	76年8月修訂再版	<p>P65-67：二、改革壞風俗（先民敬天畏神。<b>過去，山地同胞有用人頭祭神的壞風俗。吳鳳是一位很能幹的通事，山地同胞很尊敬他。吳鳳犧牲了自己的生命，革除了山地同胞用人頭祭神的風俗。</b>）</p> <p>P68-70：三、反抗強暴（日本人占領臺灣的時候，<b>常常毒打山地同胞，搶奪山胞的財物。</b>有一天，日本人在霧社舉行運動會，<b>山地同胞報仇，把日本人殺死。</b>日軍一批一批的攻打霧社山地同胞。<b>山地同胞英勇抵抗，不肯投降。</b>）</p>	<p>P61：吳鳳廟照片、霧社碧血英風牌坊照片</p> <p>P65-67：插畫</p> <p>P68-70：插畫</p> <p>P74：霧社（紀念碑）照片、中埔鄉（吳鳳廟）照片</p>
國小國語	第五冊三上	77年8月修訂再版	<p>P43-44：第十三課布農族的神箭手（我是布農族的小男孩。從前，我們的族人都過著打獵的日子，所以個個都很會射箭。現在我們村裡還有一位老公公，年輕時候射箭射得很好。有一次，他跟我講起學習射箭的往事。他說，以前布農族的男孩子，從小就把小弓箭當玩具玩。他最喜歡跟別的孩子比賽，看誰能一箭射中大樹的樹幹。七歲那一年，父親帶他去參加男孩子的射箭比賽。他用小小的弓，只射了一箭，就射中了目標。族人都很誇獎他，給他一條肉乾做獎品。他十三、四歲的時候，父親常常帶他到山頂上去練習射箭。父親把石頭推下山坡，叫他用箭去射那塊滾動的石頭。父親對他說：「那塊石頭，就像一隻會跑的山豬。快射，快射！」起初他老是射不中，後來練習的次數多了，就每次都能射中了。</p>	P43：插畫
國小社會	第六冊三下	78年1月修訂再版	<p>P48-49：參、山地社區（臺灣山地廣大，約占總面積的五分之三。山地有豐富的林木和礦產，也有不少的居民，他們利用不同的生活資源，也遭</p>	封面：文面老人

			<p>遇到一些<b>特殊的問題</b>，有待他們去克服和解決)</p> <p>P56-59：二、高山上的社區（……爸爸說：「住在梨山。<b>那裡原來只有山胞居住，交通不便，生活艱苦</b>。自從公路修通後，山胞和築路的榮民們，由政府輔導，開闢農場、果園，種植蔬菜和桃、梨、蘋果等溫帶果樹……」)</p> <p>P65-67：四、山地社區的問題（……「<b>還有一些居民仍有飲酒過量的習慣，不善生產，生活仍然困苦</b>。」……）</p> <p>P67：【研究與討論】四、<b>如何能使部分山地居地改正飲酒過量的習慣？</b></p>	
國小社會	第七冊四上	78年8月修訂再版	<p>P44-49：二、夷洲、流求和臺灣（……建國問爸爸：「<b>臺灣的山地同胞是從哪裡來的？</b>」「問得好！」爸爸說：「遠古時代，我國東南的浙江、福建等地，散居著越族的人；西南的雲南、貴州等地，散居著濮族的人。<b>臺灣的山胞，多數和越族、濮族有關，他們是從中國大陸到臺灣來的</b>。」……）</p> <p>P68-71：二、沈葆楨功在臺灣（建國的爸爸和媽媽，在環島旅行中曾到過花蓮、日月潭等地，<b>觀賞山胞的歌舞、文物</b>。在燈下，爸爸講述開發山地的故事。「提起開發山地，就使人想起沈葆楨。沈葆楨是福建閩侯人。西元一八七四年，<b>日本藉口琉球人在現在的恆春牡丹鄉被山胞所殺</b>，派兵在社寮港登陸，攻打山胞，並準備久占臺灣。清廷派沈葆楨到臺灣，辦理海防和交涉的事情。同年，日軍全部撤退。經過這事件後，沈葆楨深知臺灣地位的重要。」爸爸說：「滿清治理臺灣初期，禁止大陸人民來臺；<b>對臺灣的山地，禁止開發，讓山胞自生自滅</b>。直到沈葆楨來臺後，他眼光遠</p>	<p>封面：身著傳統服裝的原住民照片（2張）</p> <p>P44：身著傳統服裝的原住民照片（5張）、蘭嶼達悟族漁船照片</p> <p>P48：身著傳統服裝的原住民生活照（5張）、原住民傳統建築物照片（2張）、小米照片</p> <p>P60：山後風光好(三位阿美族女子著傳統服裝於東西橫貫公路入口處拍照)</p> <p>P68：插畫（沈葆楨與原住民）</p> <p>封底：蘭嶼達悟族漁船照片</p>

			<p>大，提出了開發的具體辦法：一、開發山地...（中略）...二、<b>安撫山胞</b>：開山後，伐木除草，<b>教導山胞分辨土壤，學習農耕</b>；建立村堡，設置官吏，安定社會秩序等。三、准許移民：沈葆楨請清政府開禁，准許大陸人民入臺，也准許臺灣平地居民入山開墾.....」</p> <p>P70【研究和討論】一、滿清治理臺灣初期，對山胞和移民臺灣，採取什麼樣的辦法？.....四、沈葆楨對<b>安撫山胞</b>，做了些什麼事？.....。</p> <p>P72-76：三、劉銘傳治臺新政（.....二、省政方面：他調整行政區域，省城設在臺中。他又清丈田地，防止大戶漏稅，減輕人民負擔，增加財政收入，籌足建設經費。他更積極<b>開發山地，教育山胞</b>。.....）</p>	
國小社會	第八冊四下	79年1月修訂再版		<p>P77：東西橫貫公路(照片中有兩位阿美族女子著傳統服裝)</p> <p>P109：阿美族豐年祭照片</p>
國小社會	第九冊五上	79年8月修訂再版		<p>P9：中華民族各宗族分布圖（臺灣山胞照片）</p> <p>P34：著傳統服飾的原住民老人</p>
國中地理	第二冊一下	82年1月修訂再版	<p>P4：族系很多 人口外移（地形仍為主要影響因素：（一）由於地形崎嶇阻隔，很多族系，如苗、僛、黎、傣、僮、<b>臺灣山胞等，仍然保持傳統的生活方式</b>。由於臺灣地區教育普及，國語通行於山胞各族之間，山地經濟日趨繁榮，傑出人才嶄露頭角。.....）</p> <p>P6：問題與討論（四、臺灣省的山胞有那些族系？）</p>	<p>P3-7 照片 1-1：泰雅族老婦人的揹簍—臺灣泰雅族分布的地區最廣，北、桃、竹、苗、中、投、花等縣都有，很多仍然保持傳統的生活方式。</p> <p>照片 1-2：布農族的婦女—臺灣布農族散居在南投、高雄等縣高山地區，勇士外出狩獵，婦女守在家舂米、釀酒，等待勇士狩獵歸來。</p> <p>照片 1-3：曹族的祭典—臺灣嘉義縣曹族的豐年祭歌</p>

				<p>舞，表現出強烈而純樸的生命力。</p> <p>照片 1-4：魯凱族的服飾與石板屋－臺灣屏東魯凱族盛裝時服飾華麗，其就地取材所建的石板屋，非常具有特色。</p> <p>照片 1-5：排灣族在狩獵前的儀式－臺灣排灣族居地在屏東、臺東等縣，擅長木雕、編織。</p> <p>照片 1-6：阿美族的歌舞－臺灣阿美族主要分布在臺東縱谷區，為臺灣山胞人數最多的一族。載歌載舞的表演儀式，都和祭典有關。</p> <p>照片 1-7：賽夏族的矮靈祭－一年一度的矮靈祭，是分布在新竹、苗栗境內山地的賽夏族的重大慶典活動，其迎送神歌是重要的祭祀音樂。</p> <p>圖 1-4：臺灣山胞分布圖</p> <p>照片 1-8：卑南族的服飾－卑南族居地在臺灣臺東縣，其居地內有巨石文化（當新石器時代）的遺跡。</p> <p>照片 1-9：雅美族少女的服飾－雅美族集居在臺東外海的蘭嶼，以捕魚及原始性的耕作爲生。</p> <p>照片 1-10：雅美族的漁船下水禮－漁船是雅美族生活上的重要工具。漁船首尾高聳突出，船上雕刻有紅、黑、白色彩紋，美觀而有特色。</p>
--	--	--	--	---

（この表は 2009 年 12 月 17 日に国立編訳館で集めた資料によって作成された）

（上述資料於 2009 年 12 月 17 日至国立編譯館搜集）

添付資料二：応募理由書・報考理由書

東海大學日本語文學系碩士班報考理由書  
東海大学日本語文学科大学院申込理由書

填表日/記入日	年 月 日
---------	-------

①個人資料 / 個人情報

姓名/氏名	性別	出生年月日	籍貫/出身地	畢業學校(大學) 最終卒業校(大学)
居住地/現住所				電話號碼/電話番号
連絡地址/連絡先住所				電話號碼/電話番号
職稱・連絡地址/職名・連絡先住所				

②語言能力自我評估/言語の力についての自己診断

本所要求中、日文的聽、說、讀、寫能力、也要求英文的閱讀能力。請自我評估各語言的實力。若有餘裕加強這些語言能力，將有助參加本所的入學考試。(各項目請以 0-10 的數字填入，精通【10】→完全不會【0】) / 本大学院では、中文・日文についてはそれぞれ文章を読みとり、書き、口頭で伝え、聴きとる能力が要求されます。また英文については文章を読みとる力が要求されます。それぞれの言語の運用能力について自己診断で回答してください。いずれかの能力に改善の余地があるということ自体は本大学院への受験に際して障害にはなりません。(各項目に、問題なくできる[10] ← まったくできない[0]を 0-10の数字で記入)

	閱讀能力 読み取る力	書寫能力 書く力	口語表達能力 口頭で伝える力	聽力 聴き取る力
日文/日本語				
中文/北京語				
英文/英語		*	*	*

\*項目、本所雖未要求，請自行評估。/\*は、本大学院では要求されないが、自己診断してください。

③請看本系碩士班網頁介紹，回答下列問題。(請以中文及日文兩種語言填寫。只用一種語言填寫者將不受理報名。)/本大学院のホームページを見て、以下の項目に記入してください。(記入は、中文および日文の二言語で行うこと。どちらか一方だけの場合は受理されない。)

③-1. 看完本系碩士班設立宗旨後，請在框內寫下為何會想在本所做研究的理由。/本大学院の趣旨を読んだ上で、なぜ本大学院での研究を希望するのか、その理由を以下の枠内に記入してください。

日	中
---	---

③-2. 看完本所的科目内容説明後，請從中選 2 個自己感到有興趣的科目，並在框內陳述自己感到興趣的理由。/ 本大学院の授業内容を読み、自分が興味を持った二つの授業を選び、それぞれについて、以下の枠内に興味を持った理由を説明してください。

授業名 (科目名稱) :	
日	中

授業名 (科目名稱) :	
日	中

③-3. 請在框內說明想在本所做什麼研究。/ 本大学院で研究したいことは何か、以下の枠内で説明してください。

日	中
---	---

## あとがき

### その一

6月22日、学位試験の前の二日には、テレビで以下のニュースを報道した。財団法人高等教育評鑑中心基金会は98学年度二学期の評判結果を発表した。その中に東海大学日本語文学系の学部及び大学院が「再観察」という結果を評判された。その意味は評鑑の委員にとって、学系の教学方針と課程などは「日本語文学系」という名前に相応しくないということだ。

6月24日、学位試験の当日には、指導先生の阿川、審査委員の阿花先生と珠雪先生からたくさん励ましと意見をもらって、そして現場の雰囲気が和らぎになって、そこから私が暖かいと感じた。また阿花先生はそういう話をして、「この雰囲気が特別で面白いと感じた」と言いながら、ほかの話にも学系をとっても褒めていた。褒める言葉を聞いてから、傍にいる珠雪先生がすぐ前日に再観察の評判をもらって、最悪な状況は無くなるかもしれないと阿花先生に学系の状況を説明した。そういう話を聞いて、阿花先生はちょっと気まずくて笑いながらこう返事した、「もしそういうふうになると、それはとても残念なことになるよ...」。

そうよ、もしそうなるよ、それは本当に、本当に残念なことになる...

学生として、実は体制に抵抗するなんてとても無理なことで、軽いことしかできないし、やってもあまりにも効果が出てこない。軽いのは多分今私がここで「評鑑の委員」、「評鑑の標準」と台湾の教育制度が大きな問題があると言うぐらいのことだ。しかし、軽くても効果があまり出なくても、私はそれを通して「見られる」チャンスを捕まえたい。なぜかという、そのまま周辺化されて消滅されたくない、黙っていて「認められない=異種=周辺化された・消滅された」というモデルの中に置かれたくない。すぐに変化を起されなくても、最後の最後には消滅されると分かっている、やっぱり何とか頑張りたい(死ぬ前にも頑張りたいほど)。

評鑑という制度はもし未来の学生のために学校及び学科の品質を監視するような存在だったら、では現在学校にいる学生たちの意見はどこに置かれたのか。現役の学生の経験を置きっぱなしにして、各学校の学科で体現しない委員たちから書類と訪問によって未来の学生のために評判をあげるなんて、かなり武断ではないか。現役の学生の経験と意見を中心に、また委員の意見を加えたほうが良いではないか。或いは直接にぴんときない評鑑という制度を廃除して、代わりに学校各自で市場メカニズムによって存続とか除き去るとかを決められるほうが、現在の評鑑制度より最も良いものだと思う。

まとめて言うと、評鑑の標準の上で、台湾の「日本語文学系大学院」は日本の言語、文学と文化この三つの領域を中心に研究しなければならないと決められたが、この範囲は狭すぎる。もし名前だけ変えれば範囲が狭いとの問題を解決できれば、そこから見た評鑑の制度はただ文字、権力とお金のゲームだけだと考えれる。

## その二

学位試験以来、時間はかなり飛んで去ったにもかかわらず、私はまだ現地でゆっくりでうごめきながら回っていて、適切な方向を探している。そして何回も止まって目の前の方向は観察して、目の前の方向に沿って前向きにするかどうかということによって迷うという状態がずっと続けていた。前のようにずっと同じ場所に止まるだけではなくて、ただ動きが遅くて、あまりにも進展がないし、改変もあまり見えない状態だ。

学位試験が終わったときの気持ちを回想すると、特に嬉しいとかホッとしたとか、解禁されたと感じないが、逆に「それで終わったの?! 本当に終わった?」という残念な気持ちがいっぱいであることを思い出した。まるで糸が切れて私の手元から飛んで離れた凧のように、「論文」が私の手元から離れていくと感じた。にもかかわらず、私の「ストーリー」がまだ続けている。なぜかというところ、「論文」と「ストーリー」を長い時間で粘っていたから、今はしょうがなく別れなければならないというのは原因だと思う。その原因で、深い寂しさが心の奥から浮かんできた。

この四年間、授業でも、プロジェクト（「山プロ」と「東アジアプロ」）でも、経済でも、精神などいろいろな方面で、たくさんの人から助けをもらったり、面倒をみてくれたり、我慢してくれたりした。特にいつも応援してくれる家族、親友、大学院の同級生と先生方が、この四年間いつも私の傍にいて支えてくれて、本当に感謝する。

試験のときに、指導先生と審査委員の意見によって、その場にいた私の緊張感を十分に緩められていた以外、はじめて先生たちに読んでくれたことによって、私の「ストーリー」と「声」が「見えた」「聞こえた」後に対話と交流の機会をもらえた。また「ストーリーは論文になれるか」という疑問の答えも得られた。そして、現場に応援しに来た先生方、同級生と後輩の皆にも、とても感謝する。皆がいるこそ、この「論文」の内容中心が学位試験という「空間」ではじめての公開的な対話と交流ができていたのだ。

そして、今までの人生の中に出会った人たちのことにも感謝したい。私のことを覚えているかどうかとは関係がなく、皆との出会いのおかげで、今の「私」がいる、そしてこ

の「論文」が出られた。特に「論文」の中に出ていた人たち、具体的に出ていない人も含めて、とても感謝する。

最後に言いたいのは、東海にいた四年間の中に出会った人とやったことがココロから本当に愛するということだ。いくら四年間をかけても、いくら世間にとって四年は長すぎても、いくら論文が難しくても、いくら元の仕事の貯金を使いきれても、いくら学費の貸付けを還さないといけなくても、いくら世の中にこの「日本語文学系」が変わっていると思われても、「この『変わった』ところがあるからこそ、『大学院』という地域の中に私は自分の居場所を見つけた。東海の四年間、本当に、充実に過ごした！」と、私はやっぱりそう言いたい。



ここで特に感謝したいのは本文を書くときに、いつも傍にいるがよく邪魔になる「あいつら」のことだ(証拠一は左の図)。

2010/04/20 16:26

2009/08/14 18:26